

# 福知山公立大学2019地域活性化策コンテスト 田舎力甲子園 9 入賞 “策” 目次

## ●最優秀賞

佐渡初！高校生がカフェOPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～  
(新潟県立佐渡中等教育学校：普通科5・6年12人) ----- 1

## ●優秀賞

溢れる『地元愛』蘇れ！我が母校～『モノではなく心』から生み出す真の地域活性化とは～  
(安部小Project 代表 内田奏杜(青翔開智高等学校:普通科3年)はじめ15人) -- 3 2

## ●佳作

道普請(みちぶしん)が田舎から世界までを変える～結いの精神を形に～  
(栃木県立栃木農業高等学校：農業土木科3年4人) ----- 4 9

YADからSADへ～地元再発見！新しい挑戦に向けて～  
(栃木県立矢板東高等学校：普通科2年10人) ----- 5 5

引き出せ地域の底地辛(そこぢから)！～幻の徳山唐辛子復活プロジェクト～  
(岐阜県立岐阜農林高等学校：食品科学科3年4人) ----- 7 1

“祖父江の虫送り”を通して文化や地域を引き継ぐ  
(愛知県立杏和高等学校：総合学科3年18人) ----- 7 7

民泊を使って出雲市の観光客を増やすには？  
(島根県立出雲高等学校：普通科3年5人) ----- 1 2 0

宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト  
(長崎県立宇久高等学校：普通科3年6人) ----- 1 3 2

我ら「小林市シムシティ課」～スマホアプリでまちづくりに挑戦！～  
(宮崎県立小林秀峰高等学校：商業科・経営情報科3年11人) ----- 1 5 4

福知山公立大学 2019 地域活性化策コンテスト

# 田舎力甲子園

i-1 Grand Prix of High School Students 2019

ニッポンの田舎を元気にする高校生のアイデア、全国募集します！  
目指せ、ローカルデザイナー！！



本学は京都府北部の福知山市にある公立大学です。ここ北近畿エリアをはじめ、ニッポン全国の地方都市・農山漁村は何処も少子高齢化や地域経済の活力低下という社会的問題に直面していますが、これら諸課題に対する解決策の一つとして「田舎」の持つ内発的発展力が注目されています。

そこで「田舎<sup>りよく</sup>力甲子園」と題して全国の高校生から地域活性化策のアイデアを募集し、2013年から表彰を行ってきました。新たな田舎料理・スイーツ等の開発、SNS等インターネット活用による地域情報の受発信、地域医療福祉に関する環境整備、グリーン・エコ・ヘルス等の「ニューツーリズム」や自然エネルギー利用による地域再生プラン等、内容は自由です。是非ご応募ください。

- 主催：福知山公立大学「田舎力甲子園」実行委員会 ●後援：内閣府地方創生推進事務局・京都府・福知山市
- 対象：全国の高校生（個人・グループいずれも可）等
- 様式：論文・企画書・動画・アニメ等いずれも可、字数・枚数・分量も自由 ●言語：日本語もしくは英語
- 表彰：最優秀賞 1組に賞状と副賞（旅行券または図書カード6万円分）  
優秀賞 1組に賞状と副賞（旅行券または図書カード3万円分）  
佳作 若干組に賞状と副賞（旅行券または図書カード1万円）  
奨励賞 若干組に賞状
- 応募締切：2019年6月21日（金） ●結果発表：2019年7月5日（金） ●表彰式：2019年7月20日（土）
- 実行委員：◎は委員長 ☆は副委員長 括弧内は（職名：専門分野）  
井口和起◎（福知山公立大学学長：歴史学）  
塩見直紀☆（半農半X研究所代表・本学准教授：ローカルデザイン） 中尾誠二☆（本学教授：農村振興）  
富野暉一郎（副学長：地方自治） 平野真（地域経営学部長：国際経営）  
矢口芳生（地域経営学科長：農業経済） 芦田信之（医療福祉経営学科長：遠隔医療） 本学教員《要項参照》

《ご応募・お問い合わせ先》 〒620-0886 京都府福知山市堀3370 福知山公立大学「田舎力甲子園」実行委員会  
Tel: 0773-24-7100 Fax: 0773-24-7170 Mail: inakaryoku@fukuchiyama.ac.jp



# 田舎力甲子園

i-1 Grand Prix of High School Students 2019

ニッポンの田舎を元気にする若者のアイデア今年も全国から大集合！

## 〔審査結果〕および〔表彰式・記念シンポジウム〕のご案内

福知山公立大学「田舎力甲子園」実行委員会では、今年1月15日から6月21日までの5ヶ月間、全国の高校生を対象に地域活性化策を募集しました。その結果、個人133 + グループ189 = 計322策の応募があり、当委員会での審査を経て次の通り表彰23策を決定しました。

- 最優秀賞：佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～  
新潟県立佐渡中等教育学校：普通科 5・6年 12人
- 優秀賞：溢れる『地元愛』蘇れ！我が母校～『モノではなく心』から生み出す真の地域活性化とは～  
安部小 Project 代表 内田奏杜（青翔開智高等学校：普通科 3年）はじめ 15人
- 佳作：道普請（みちぶしん）が田舎から世界までを変える～結いの精神を形に～  
栃木県立栃木農業高等学校：農業土木科 3年 4人  
YADからSADへ～地元再発見！新しい挑戦に向けて～  
栃木県立矢板東高等学校：普通科 2年 10人  
引き出せ地域の底地辛（そこぢから）！～幻の徳山唐辛子復活プロジェクト～  
岐阜県立岐阜農林高等学校：食品科学科 3年 4人  
“祖父江の虫送り”を通して文化や地域を引き継ぐ  
愛知県立杏和高等学校：総合学科 3年 18人  
民泊を使って出雲市の観光客を増やすには？  
島根県立出雲高等学校：普通科 3年 5人  
宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト  
長崎県立宇久高等学校：普通科 3年 6人  
我ら「小林市シムシティ課」～スマホアプリでまちづくりに挑戦！～  
宮崎県立小林秀峰高等学校：商業科・経営情報科 3年 11人
- 奨励賞：美味しく実れ♡浦河 food マラソン 北海道浦河高等学校：総合学科 3年 5人  
フランスと日本の観光の比較 土浦日本大学高等学校：普通科 3年 寺田浩亮  
もっと、もっとみんなに知ってほしいんだ 山梨県立吉田高等学校：普通科 2年 7人  
#インスタ映えで若い観光客を増やし隊 ver2.0 北杜市立甲陵高等学校：普通科 2年 3人  
愛する伊豆～命をつなげる 地域とつながる～ 静岡県立伊豆総合高等学校：総合学科 3年 5人  
高校生がまちづくりの先駆者に～アクティブな若者の力でまちを元気に～ 日星高等学校：普通科 3年 田中舞奈  
射添紙（いそがみ）でつなごう！村岡と世界～ふるさと納税で紡ぐ～ 兵庫県立村岡高等学校：普通科 2・3年 4人  
アプリを利用した地域とのコミュニケーションおよび地域の情報発信 島根県立江津高等学校：普通科 2年 58人  
不在宅配預かり屋 信頼の「アブ・デリ・ホーム」 岡山県立矢掛高等学校：普通科 3年 4人  
過疎高齢化による伝統文化の危機に向き合う高校生の実践とアイデア 金光学園高等学校：普通科 2・3年 12人  
神石高原町との取組～ドローン活用で地域の魅力を発信～等 広島県立油木高等学校：産業ビジネス科 2・3年 7人  
和紙で地域と世界の未来を変える 高知県立伊野商業高等学校：キャリアビジネス科 2・3年 11人  
MOVING・K プロジェクト 長崎県立中五島高等学校：普通科・商業科 3年 5人  
東京都の限界集落・奥多摩を再生する～アートプロジェクトの可能性～ N高等学校：普通科 3年 佐藤薫子

●表彰式・記念シンポジウム 開催日時：2019年7月20日（土）13時30分～

●会場：福知山公立大学4号館 ●参加費：無料（どなたでも参加いただけます）

●パネリスト：塩見直紀（半農半X研究所 代表・本学 准教授）、矢口芳生（本学 地域経営学科長）

福知山公立大学 2019 地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」

# 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

新潟県立佐渡中等教育学校 佐渡を豊かにする「中学生 PROJECT」

「カフェ#はっしゅたぐ」・「お菓子な S 宴祭」

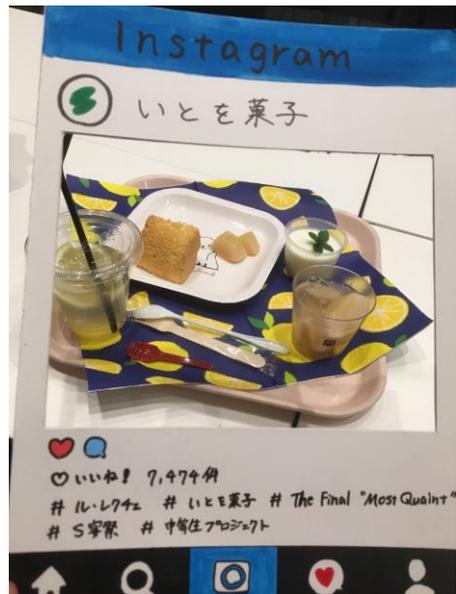
【6年生】 チーム名<#はっしゅたぐ>（「カフェ#はっしゅたぐ」）

甲斐綾香 齋藤優奈 桜庭絵莉衣 十文字美里 高橋雅子 平形凧紗

【5年生】 チーム名<いとを菓子>（「お菓子な S 宴祭」）

遠藤凜香 菊池和奏 齋藤更紗 白井良夢 鈴木葉月 中村美結

【指導者】 宮崎芳史 箕輪郁哉 （新潟県立佐渡中等教育学校）



目次 .....	P1
<b>第1章 STARTUP 研修 .....</b>	<b>P2～P7</b>
① はじめに ～佐渡を豊かにする「中等生 PROJECT」～	
② 豊かさとは何か？	
③ アイデア創出	
④ PROJECT チーム紹介 「カフェ#はっしゅたぐ」・「お菓子な S 宴祭」	
⑤ アイデアをカタチにする ビジョン・ゴール・コンセプト	
⑥ ビジネスモデルをデザインする ターゲット・パートナー・収支計画・広告宣伝計画	
<b>第2章 プレゼンテーション .....</b>	<b>P8～P10</b>
「心を動かす ・ 共感を生む ・ 巻き込む」	
<b>第3章 実践・検証・改善 .....</b>	<b>P11～P26</b>
① 「カフェ#はっしゅたぐ」 実践Ⅰ・検証・改善・実践Ⅱ・リフレクション (P11～P20)	
② 「お菓子な S 宴祭」 実践Ⅰ・検証・改善・実践Ⅱ・リフレクション (P21～P26)	
<b>第4章 成果と課題 .....</b>	<b>P27～P29</b>
① 成果 ービジョンにつなげられたことー	
② 課題 ーさらなる豊かさを創るためにー	
<b>第5章 終章 .....</b>	<b>P29</b>
「ないものは創ればいい。豊かな島は自分で創る」	
<b>ご支援・ご協力いただいた皆様 .....</b>	<b>P30</b>

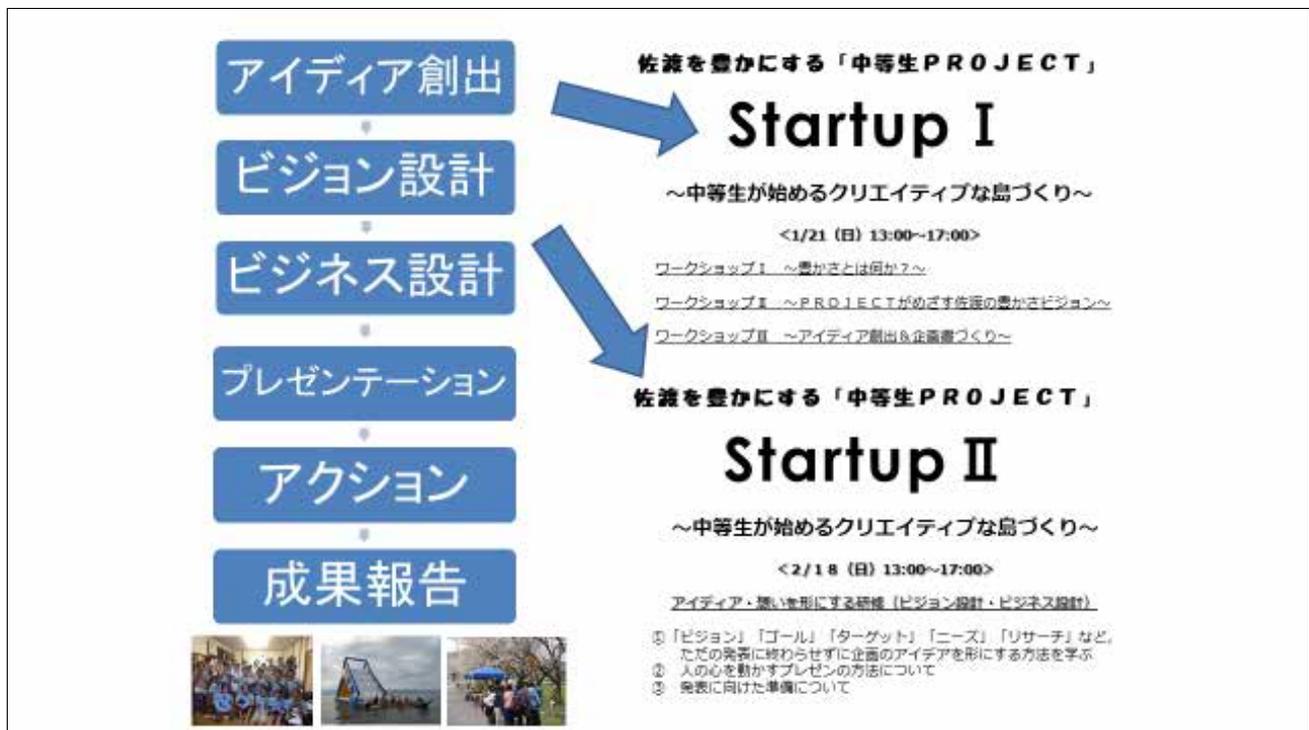
## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### 第1章 STARTUP 研修

佐渡を豊かにする  
「中等生PROJECT」  
佐渡の課題と豊かさを捉え、  
地域の人と共に、  
今までなかったものを創り出す！

#### ① はじめに ～佐渡を豊かにする「中等生 PROJECT」～

私たちは、有志活動の“佐渡を豊かにする「中等生 PROJECT」”に参加したメンバーです。この「中等生 PROJECT」は、佐渡の課題と豊かさを捉え、地域の人と共に、今までなかったものを創り出す活動です。昨年度は、“佐渡初「水上アスレチック」で佐渡の海を盛り上げたい！ OCEAN EVOLUTION”が、田舎力甲子園で奨励賞を受賞しました。PROJECTには、アイデア創出、ビジョン設計、ビジネス設計、プレゼンテーション、アクション、成果報告のフェーズがあり、1年間かけて活動してきました。2018年の1月・2月に実施された STARTUP 研修で想いと目的を明確にして、ビジョンを固めていくことから私たちの PROJECT はスタートしました。

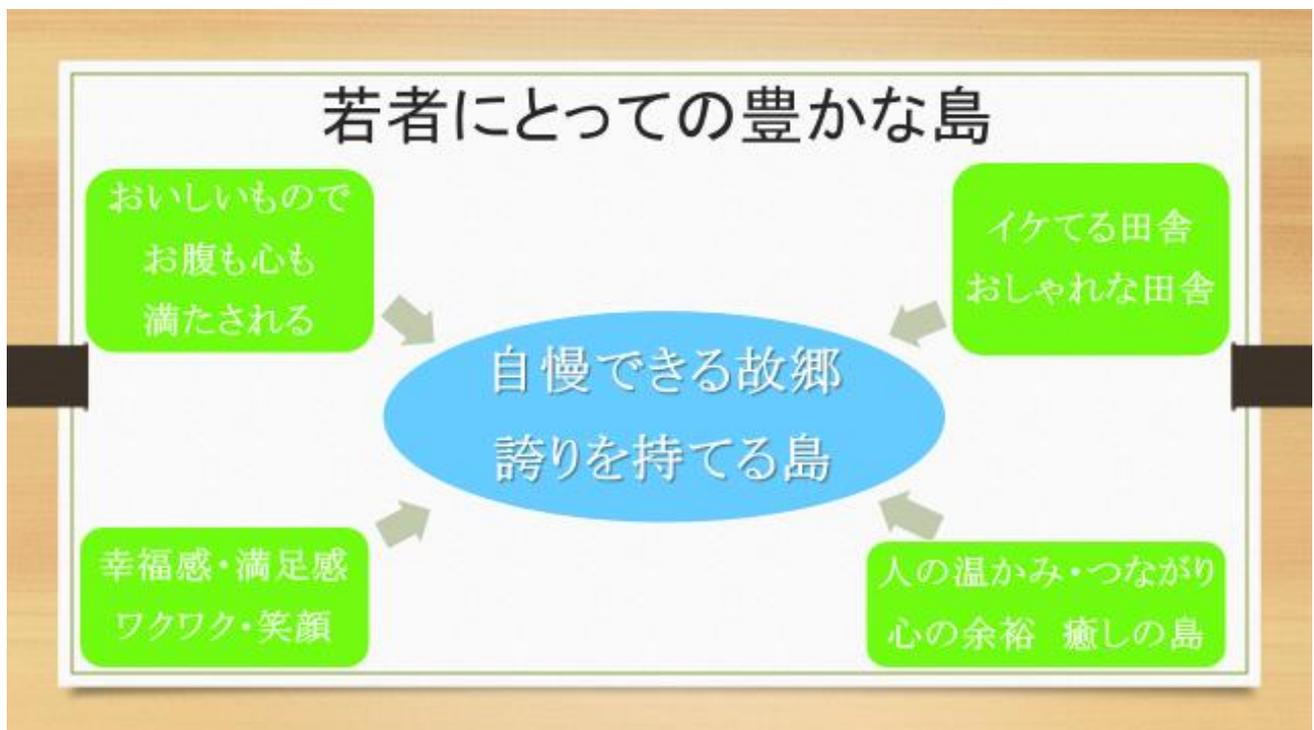


#### ② 豊かさとは何か？

私たちは、アイデアを出す前に、『若者にとっての豊かな島』について、話し合いました。自然の豊かさ、食材の豊富さ、お裾分けの文化や集落の祭りで感じる人々とのつながりなど、私たちは佐渡の良さに魅力を感じています。一方で、都会への憧れも非常に強く、佐渡の若者の多くが「島には何もない、つまらない」と言います。おしゃれなもの・おいしいもの・ワクワク感など、私たち女子高校生が望む都会的なものもありながら、田舎だからこそ感じられる幸福感・笑顔・人とのつながり・余裕・癒しが感じられる島になれば、私たち若者にとっても、自慢できる豊かな島になるのではないかと考えました。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

佐渡の最大の課題は人口減少と少子高齢化です。毎年1000人以上の人口減少と40%を越える高齢化率から、佐渡は課題先進地域と言われています。佐渡島内には大学がなく、高校生は卒業すると、その多くが佐渡の魅力を十分に知らないまま島外に進学します。2015年7月に策定された“佐渡市まち・ひと・しごと創生総合戦略”でも「短期的な取組で自然減を含めた人口減少を完全に止めることは不可能であるが、若年層の流出を中心とする社会減への対策が、佐渡の人口減少対策として極めて重要である。」と述べられています。雇用・生活環境などが重要なことはもちろんですが、それだけでは若者の心をつかむには不十分だと思います。昨年のPROJECTで、SNS上で実施されたアンケートでは、「佐渡で過ごす休日つまらない、または飽きたと思うか」というアンケートに、90人以上の方が回答し、70パーセント以上の方が「はい。」と回答しました。『若者にとって豊かな島』を私たち若者自身が自分たちの手でつくるのが、若年層の流出を抑える第一歩になると考えました。



### ③ アイデア創出

ブレインストーミングで豊かな島を創るアイデアを出して、KJ法でまとめていきました。佐渡の食材・自然・文化などの魅力を活かした新しい商品開発・情報発信・魅力PRのアイデアや、ギネスに挑戦など、様々なジャンルの意見が出ました。私たちは、多くのアイデアの中から、チームでビジョン・ゴール・コンセプトを決める過程の中で、自分たちが思い描く豊かな佐渡を実現するため、佐渡初の高校生によるカフェを開くことにしました。6年生(当時5年生)は、佐渡島内に多くあるおしゃれでおいしいカフェを紹介するカフェを開き、5年生(当時4年生)は、島の食材を活かしたスイーツづくりをすることにしました。場所は、佐渡市教育委員会の協力によって、調理実習室と広い駐車場が利用できる、私たちの地元・佐渡市両津の「あいぽーと佐渡」に決まりました。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～



### ④ PROJECT チーム紹介

○#はっしゅたぐー佐渡のカフェを紹介するイベント「カフェ#はっしゅたぐ」を開催

「#（はっしゅたぐ）」には、線が重なってつながる様子から人と人、人と佐渡の魅力を“つなげる”という意味と、インスタ映えする空間・商品を創り、“#”をつけて SNS で広める、という想いを込めました。

○いとを菓子ー佐渡産食材で創ったスイーツを販売するイベント「お菓子な S 宴祭」を開催

S 宴祭の S には「Sado・Students・Special Sweets・Smile Service」の想いが込められています。佐渡の学生によるご褒美スイーツを笑顔で提供するイベントを目指しました。

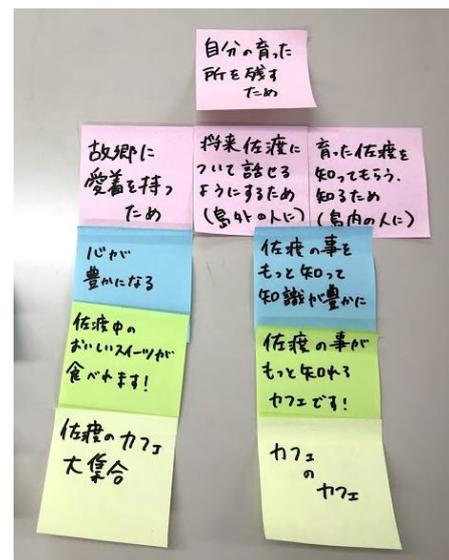
次の⑤ビジョン設計～⑥ビジネスモデルをデザインする はチームごとに進めていきました。

### カフェ#はっしゅたぐ

### ⑤ アイディアをカタチにする ビジョン・ゴール・コンセプト

2018年2月、ビジョンデザイナーの増山和秀様をお招きし、「アイデアをカタチにする研修」を開いていただきました。ここまで考えてきたアイデアの想いと目的を明確にするために、PROJECT のビジョン・ゴール・コンセプトを考えました。

2-1. サービス構造例			
付箋の色	名称	意味	例
赤	ビジョン	目指す姿、実現させたい社会（豊かさ）	新しい産業を生まれやすい環境を作り、若者の為の豊富な働き先を生み出す。
青	ゴール	実現したい事（豊かさ）	手に職をもつ移住者を増やす。IT技術者がファンになる都会にはない住み心地と働き心地。
緑	コンセプト	提供する価値	海辺のヘルスクエア・サテライトオフィス
黄色	ソリューション	提供方法	①喧騒から離れ、リラックスできる海辺の環境の宿泊施設 ②地産地消のヘルシーな職体験



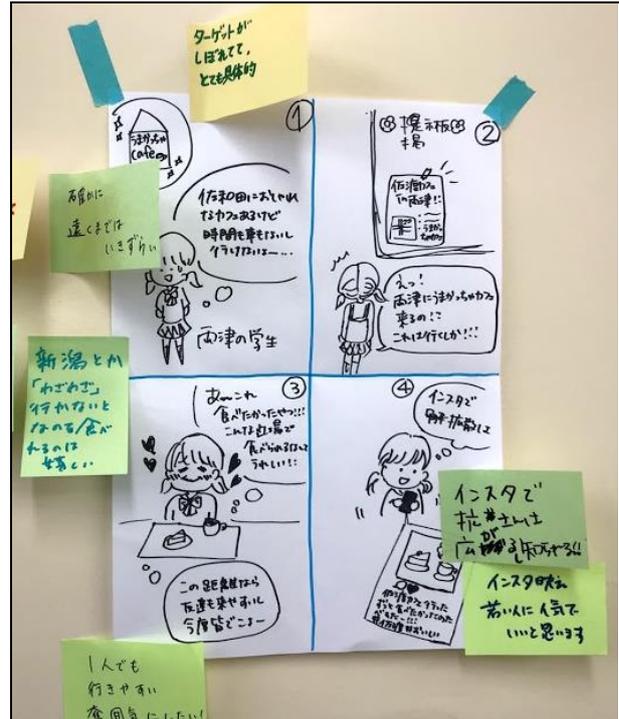
【研修資料：左のスライドに合わせて、右のように付箋でビジョン・ゴール・コンセプト・ソリューションをつないでいった】

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### 3-2.皆さんのユーザーとその課題はなんでしょう？

ユーザー	ニーズ（課題）
東京で働く30代システムエンジニア	仕事と家の往復で、心身ともに疲れており、仕事がかどらない。

● 思いつくものを書いてみましょう。



【研修でターゲットユーザーのニーズを明確にする】

【イベントを知る・来る・来た後のシナリオを描く】

私たちは、「佐渡は自然が豊かなだけでなく、都会に負けないくらいにおしゃれでまったりできる素敵なカフェがたくさんあるのに、それを知らないのはもったいない！」と考えました。島民にアンケートを取ってみると、島内のカフェ23店舗のうち、10店舗以上知っている人は41%、10店舗以上行ったことがある人はなんと20%しかいませんでした。そこで、私たちは佐渡のカフェを知ってもらうことで、ワクワクと笑顔を届けようと考えました。それが、佐渡の魅力を感じて、佐渡を今より好きになってもらうことにつながり、若者にとっての豊かな島づくりになると考えたからです。

### < ビジョン >

学生を中心とした若者にとっての豊かな島を創る。

⇒ 佐渡に魅力を感じて、佐渡を今より好きになってもらう。

### < ゴール >

佐渡のカフェを知ってもらい、ワクワクと笑顔を届ける。

### < コンセプト >

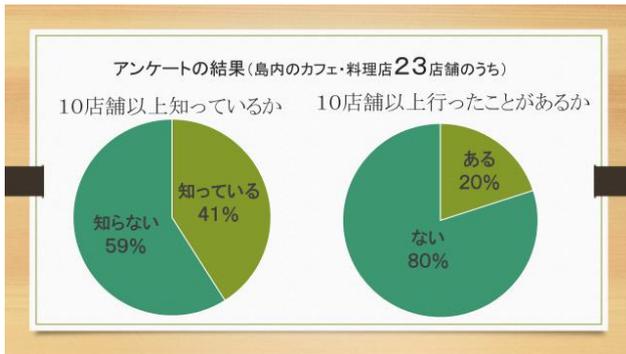
佐渡のカフェ大集合！

佐渡のおいしくておしゃれなカフェを知る・味わう機会の提供

### < ソリューション >

佐渡のカフェを紹介するカフェイベント

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

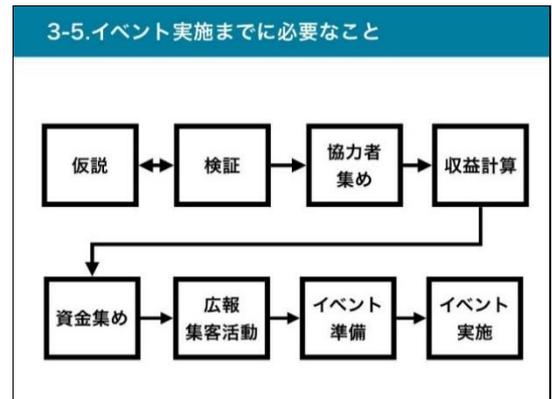
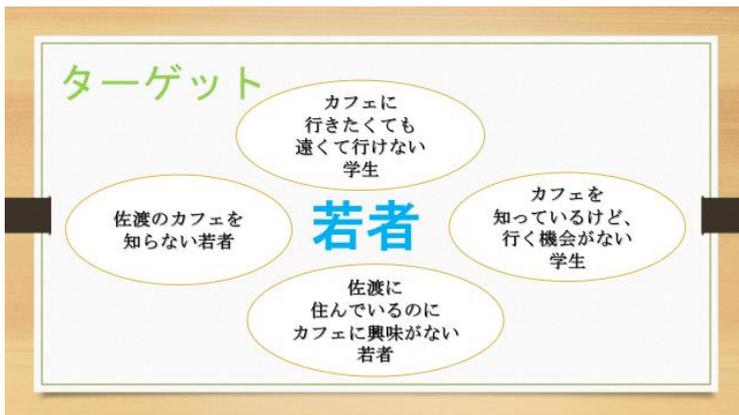


### ⑥ ビジネスモデルをデザインする ターゲット・パートナー・収支計画・広告宣伝計画

#### ＜ターゲット＞

アンケートからは、佐渡島内の移動手段のほとんどは車であり、学生は免許を持っていないため、距離が遠くて行くことができないことや、近くにお店があっても、学生は休日も部活や学校行事があつて忙しく、行ったことがない人が多いことがわかりました。

そこで、私たちが考えた主なターゲットは、佐渡のカフェに興味がない・知らない若者、カフェを知っているけど行く機会がない・遠くて行けない学生です。



【研修資料: イベント実施までに必要なこと】

＜協力者集め＞ 若者が魅力的に感じるカフェへの協力依頼をする。

＜収益計算＞ **支出** 商品の仕入れ + 備品・装飾 + 広告宣伝費

**収入** 募金活動 + 出店料 + オリジナルグッズの販売 で収入を得る。

会場費は減免申請を依頼する。スタッフは学生ボランティアを中心にする。

＜広告宣伝＞ チラシの掲示・配布 + SNS

＜その他準備＞ 備品・装飾の準備 導線のレイアウト 会計のやり方 スタッフの配置 など



3万円以上の  
の応援が  
集まる!

【イベントでの募金・告知活動】

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### お菓子なS宴祭

#### ⑤ アイディアをカタチにする ビジョン・ゴール・コンセプト

私たちは「若者が楽しめる場所を増やしたい」という想いと、魚・米のイメージだけが強い佐渡で「若者へ向けて佐渡の食の魅力を感じられるアプローチをしたい」という想いから、フルーツアイランドとも言われる佐渡のフルーツを活かして、若者の好きなスイーツをつくることにしました。

#### < ビジョン > 学生を中心とした若者にとっての豊かな島を創る

⇒佐渡に魅力を感じて、佐渡を今より好きになってもらう。

#### < ゴール > 佐渡の食材をつかったスイーツを通して佐渡の良さを知ってもらう。

#### < コンセプト > フルーツなどの佐渡産食材をおいしく味わう機会を提供する。

若者の好きな“フルーツを使ったスイーツ”を中心としたメニュー

#### <ソリューション> フルーツなどの佐渡産食材でスイーツを創り、販売するイベント

#### ⑥ ビジネスモデルをデザインする ターゲット・パートナー・収支計画・広告宣伝計画

<ターゲット> 10代の若者(小中高高校生中心)

<協力者への依頼>

スタートアップ研修にゲストで参加してくださったレストランシェフの尾崎邦彰様を中心とする「UMAMI LABO」様と佐渡で唯一いちご狩り体験をしている齋藤農園様に協力を依頼した。

<収益計算>

商品は販売価格の3割程度を収入にすることで、売れ残りがあっても食材費・運営費・研修費を得られるように収支計画を立てた。

<広告宣伝> 島内のイベントでの告知活動 小学校・保育園でのチラシ掲示・配布

<その他準備> バルーンアーチなどの装飾

#### 予算

スイーツ名	単価	人数	金額
イチゴタルト	¥220	100	¥22,000
植木鉢カップデザート	¥330	100	¥33,000
ポットク	¥100	100	¥10,000
フルーツサンドウィッチ	¥250	100	¥25,000
ストロベリーサイダー	¥150	100	¥15,000
合計	¥1,050		¥105,000

【販売額 105,000 円の収入を見込む】



【イベントでの告知活動】

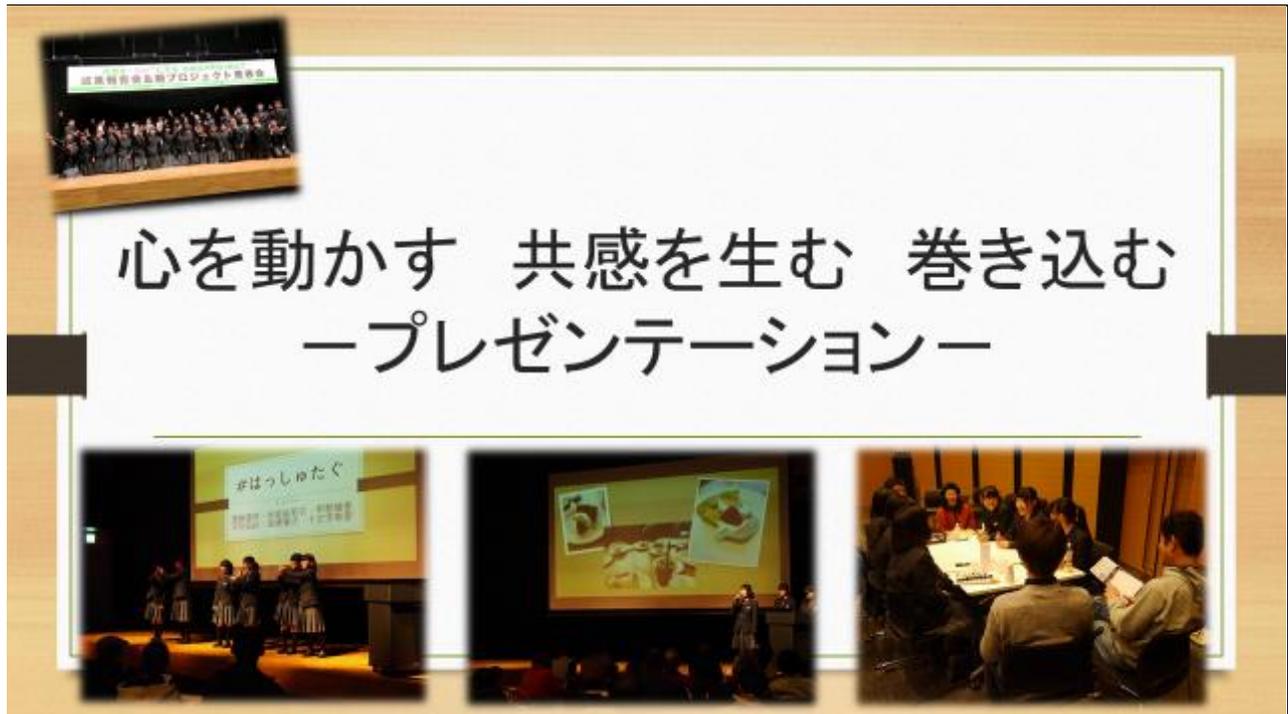


【齋藤農園でのいちご狩り体験】

佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

## 第2章 プレゼンテーション「心を動かす・共感を生む・巻き込む」

2018年3月21日、スタートアップ研修のまとめとして、アイデア実現に向けたプロジェクト発表会においてプレゼンテーションをおこないました。目的は、聴衆の共感を生み、資金面・スキル面・広告宣伝などを応援・協力して下さる方を増やすことです。この発表会が、実現へのスタートラインとなりました。発表会には、佐渡市長・佐渡市議会議長・佐渡市教育委員長をはじめ、地域の大人と発表者、総勢100名以上が参加しました。発表後には、来場者が各チームに直接アドバイスを求める対話の時間があり、最後には、発表者・来場者がともに「豊かさ」について考えました。



## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

発表会のコメントシートでは、自信と改善につながる以下のようなコメントをいただきました。

### <はっしゅたぐ>

- 「カフェのカフェというアイデアが素晴らしいと思います。コンセプト・アイデアは明確なので、それをいかに具体化していくのかが問われるところ。考えを練り上げ、実現可能なところを進めていってほしいです。頑張ってください。 / ○カフェのカフェとは斬新であると感じた。
- カフェのカフェという着眼はいいと思う。ターゲットへの告知、誘導は？拡大の可能性は？
- チーム名の「はっしゅたぐ」、まず、ここがイイと思いました。
- とても面白い発想だと思った。まだまだ実現するにはきびしい道のりだと思うが、がんばってほしい。  
また、佐渡の外へ出て本土のカフェはどんなものを出しているが、どんな内装がいいかを研究すると良いと思った。
- 『食べているときは幸せ』という言葉に共感しました。佐渡のカフェはあまり知られていないし、行っていないということがグラフでわかりやすかったし、佐渡の魅力あるカフェを知ってもらい、行ってもらい、楽しいときを過ごしてもらうための仕組みというアイデアは斬新だと想います。「助けてほしい」というメッセージを発信することは改めて大切だと想いました。頑張ってください！
- 明るさ・ポジティブさが全面に伝わってきて、「カフェ」の会場が楽しくなることが想像できました！自分たちでステキな空間をつくるためのリサーチなどしっかりとしていて良いなあと感じました。「助けてください」とのことでしたが、自分たちでできること・できないことをもう少し詳しく洗い出して、具体的に足りない・できない部分を出していくと、協力したり、できることがある人が集まってくると想いました！がんばってください！
- 2回目、3回目のこともプランにあります。まずは1回目のミニマムプラン・ぶれないコンセプトづくりをがんばってください。
- 佐渡のカフェで楽しい空気をつくってください。楽しい会話、楽しい音楽、ひとつひとつ丁寧にじっくりゆったり味わいたいですね。  
ゆったりとリラックスできる空気の研究を深めてもらえたらうれしいです。
- 佐渡を変えたい！という意気込みが良い！ / ○若者が楽しめるカフェ期待しています！
- 佐渡に23もカフェがあることを初めて知りました。ぜひ、このイベントを通じて、佐渡のカフェを盛り上げつつ、成功してほしいと想います。
- 佐渡の観光・就業・経済を含め、対策はまったなしの状況です。あらゆる角度から、持てる方策を打ち出さなくてはなりません。検討・議論を重ねるよりも、実施が必要です。少しでも前進するようがんばってください。
- 車がないと移動できない若者はどうしますか？

### 同世代・同級生からのコメント ～「若者にとっての豊かな島」への手応え～

- カワイイ♡人の心をわしづかみにするような発表のしかたでとても聞いていて飽きなかった。  
いろいろな思いが込められていて、「ああ、なるほどな」と思った。力を貸します！！
- カフェ大好きです！行きます！食べます！わくわくです！告知します！
- チーム名が工夫されていていいと想いました。私もカフェ大好きなので、ぜひ行きたいです(^)楽しみにしています！！
- カフェのカフェ、とてもおもしろい発想だと思いました。 / ○名前にセンスを感じました。 / ○オシャレで行ってみたいとおもった！！
- 手で#を表すはっしゅたぐポーズが良かった。／最初の「はっしゅたぐです」がかわいかった♡
- カフェのカフェというアイデアがよい。1回で終わりではなく、何回も継続して行うのもとてもよい。  
みんなキラキラしていて素敵です。発表で終わりではなく、実行まで頑張ってください。
- あいぽーと佐渡でやるなら、当日、佐渡汽船で宣伝してみたら、ふらっと立ち寄ることもできると思うので、考えてみてください。夏は島外からも人が来やすいと想うので、大変かもしれないけど、島外に向けての宣伝も良いと想います。
- 自分たちがイベントを行うだけでなく、そのイベントに協力して下さった人たちのアピールもできていいなと想います。
- 23店舗もあつたのはしらなかった！何回もやるのがすごい！

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### <いとを菓子>

- どのお菓子も見た目もよく、きつとおいしいだろうと思います。お客様も喜んでくれるお菓子だと思います。目的が「お客様に楽しんでもらうこと」なので、喜んでもらってかつ楽しんでもらうにはどうすればよいか工夫するとすばらしいイベントになると思います。
- スイーツにすべてイチゴを使っていることで、女性やお子さんにとても人気が出そうなイベントだと思います。インスタ映えする内容を友達やお姉さんなどにたくさんアドバイスをもらいながら、ガーリーな雰囲気頑張つてつくってください。スイーツ好きな男子もとこめるといいですね。
- オリジナル商品開発はOです。特に「ホットク」は独自性があります。
- 楽しい場になってください。そのためにサービスする側も楽しむこと。笑顔をどれだけ引き出せるか、引き出せた笑顔こそ一番の報酬です。
- 価格設定の考え方を知りたい。売り上げ目標は？なぜ各商品ともに100個にしたのか？
- 会計のところスイーツは5種類の各明細がありました。パルーンなどの装飾は計算していますか？どこからサポートがあるのでしょうか。
- スイーツ各100食×5種類ですが、両津地区保育園～高校までの集客告知で大丈夫ですか。告知方法をもっと多様にできると思います。
- それぞれの商品に込められたストーリーとか、お店に対する思いのようなものももっと感じられるといいなと思いました。
- チームメンバーが多いと、話がまとまらないことも多いです。みんなが自己主張するのではなく、自分がこだわるところ、妥協できる場所がうまくできると、強力なチームができます。

### 同世代・同級生からのコメント ～「若者にとっての豊かな島」への手応え～

- 写真からおいしそうなお感じ・かわいさが伝わってきた。この企画が実現したら行ってみたいと思うので、ぜひがんばってください！！
- おいそー！！食べに行かぬ！！／行きたいです！めっちゃおいそー！すべてがかわいい！／  
 すごく行きたくなるようなプレゼンでした！！／どれもおいそーなスイーツですね！当日ぜひ行きたいです(^)/  
 めちゃめちゃおいそー…！！イベントにとても参加したいと思える発表でした。スイーツがどれもおいそーですごく食べたくまりました！
- 案が若者むけでかわいらしくてとても良い♡ ホットク初めて知った！
- ボランティア、絶対に行きたいです。／ボランティアにぜひ参加したいです！
- パルーンアチ楽しみです。／スイーツも装飾もインスタ映えそー！！ ○佐渡の旬の食材を使用していると思います。
- 植木鉢のスイーツの上にミントとかイチゴのカットしたものを乗せたら、春っぽく可愛くなるかも！
- きつと食費やスイーツの作成だけでなく、パルーンアートなど、やりたいことがたくさんあるとお金もそれだけかかるから頑張つてね！
- インスタ映えをねらっていて、秋も考えているなら、インスタ・ツイッターでの告知、イベント当日の様子などもSNSで伝えた方が良さかも。
- もう少し男子が来やすい雰囲気があるといいかも！？

発表会でのアドバイスをもとに、PROJECT が前へ進んだだけでなく、発表会の聴衆がイベントでも来場者として来てくださったり、宣伝告知に協力してくださったり、応援の声を届けてくださることとなりました。

さらに、発表会後には、#はっしゅたぐが協力してほしい店舗を1件1件訪問して、このプレゼンテーションをして出店依頼をしていきました。すべてのお店が想いに共感し、出店を快諾してくださいました。中には、日程の都合で、1回目は参加が難しいお店もありましたが、2回目のイベントに出店していただくことができました。

**アイデア・想いをカタチにするプロセスを明確にして伝えることで、心を動かし、共感を生み、パートナーとなるお店を巻き込むことができました！**

佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

## 第3章 アクション【実践・検証・改善・リフレクション】

### ①「カフェ#はっしゅたぐ」 実践Ⅰ・検証・改善・実践Ⅱ・リフレクション

私たちは、「カフェ#はっしゅたぐ」というイベントを2018年の5月と11月、合計2回開催しました。合計550名以上が来場、2回とも商品は完売、大盛況でした。

#### <実践Ⅰ>

当日の様子をご覧ください。1回目は2018年5月6日に実施しました。4店舗の商品を販売し、そのカフェの魅力を伝えました。若者に人気のあるパンやドーナツ、焼菓子などに加え、カフェ#はっしゅたぐのオリジナルラテアートやオリジナルグッズも販売しました。



#### ご協力いただいたお店

##### ○おいしいドーナツタガス堂

佐渡市羽茂大崎の山間にあるドーナツ屋さんです。  
当日は開店から30分ほどで完売する人気ぶりでした。

##### ○Coffee&Tea22

佐渡市佐和田の雑貨屋の隣にあるカフェで、若者を中心に根強い人気があります。当日はパウンドケーキなどに、イチゴジャムでデコレーションして販売しました。

##### ○maSani coffee

佐渡汽船の中にあるカフェで、普段から観光客が行列をつくるほど人気なお店です。  
イベントでは#はっしゅたぐオリジナルラテアートの監修もしていただきました。



## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### ○焼菓子ヒガナ

佐渡市小木にある焼菓子を扱うおしゃれなお店です。

素材の美味しさを最大限に生かした焼菓子は、どれも絶品です。



【写真：出店4店舗のお店の様子】

### 豊かな島を創るアイデアを若者の感性でカタチにするポイント

#### ○カフェを紹介するオリジナルパンフレット

出店店舗と会場の両津近辺のカフェを取材し、紹介しました。

カフェの情報をすることで実際に足を運んでもらえるように想いを込めてつくりました。

#### ○SNS 映えする空間づくり カフェらしい雰囲気を心がけて会場をつくりました。

#### ○パウンドケーキのデコレーション

Coffee & Tea22 のパウンドケーキは、プレートにイチゴジャムでデコレーションをして、お店の味やイメージを守りながら、商品をよりおいしくみせるようにしました。

#### ○カフェ#はっしゅたぐ限定のオリジナルラテアートの販売

出店店舗のマサニコーヒーさんに監修をしていただき、試行錯誤の末に、カフェラテのうえにクリームを乗せ、その上にチョコソースやキャラメルソースで#(はっしゅたぐ)を描くラテアートが完成しました。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### ○オリジナルグッズの販売

消しゴムはんこをつくる研修会に参加し、つくり方を学んで、カフェ#オリジナルのコースターや商品を入れる紙袋をつくりました。

○宣伝 チラシを自分たちで1から作り、佐渡島内20ヶ所以上に掲示しました。

○接客 ボランティアのメンバーも皆、笑顔で明るく対応してくれました。

メンバーも、来場して下さったお客様も笑顔になって、素敵な空間を作れました。



### <検証・改善>

来場者アンケートからはイベントの満足度が高かったことがわかりました。「今まで行ったことがなかったお店の商品を買うことができた」、「テイクアウトのパッケージがすごくかわいい」、「眺めのよいスペースがあってよかった」、「明るい雰囲気よかった」、「とても優しく笑顔で接しやすかったです」、「生き生きとした様子で頑張っている姿を見て嬉しく思いました」、「ぜひ、またやってください」、「最高。このまま突き進め」といった声をいただくことができました。しかし、一方で改善すべき課題も残りました。

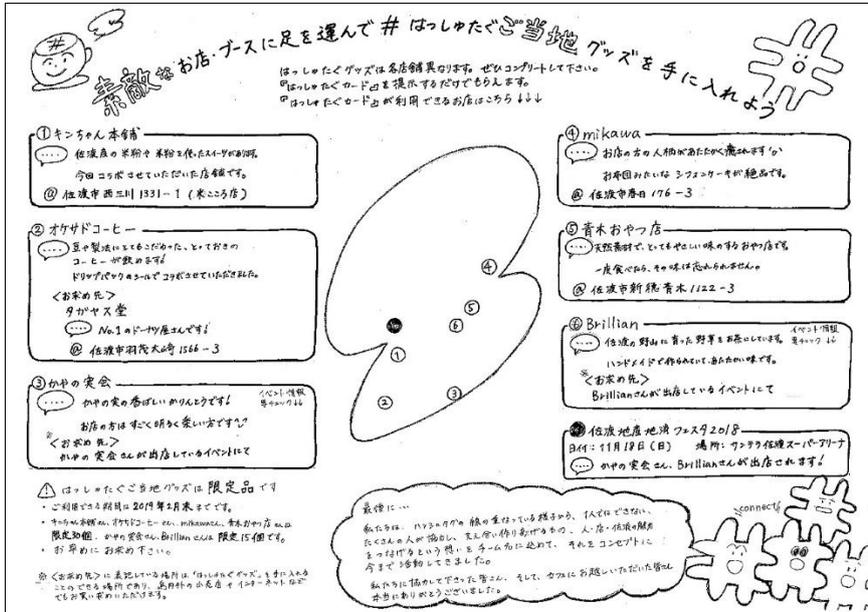
佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

○ターゲット層である若者の参加率を高めること ⇒中高生の来場者を増やすテーマ設定

2回目のイベントでは、最も豊かさを感じてほしいターゲットの中高生の割合を増やすため、自分たち学生が何を求めているのか話し合い、リサーチした結果、都会のようなキラキラした楽しいものだけでなく、落ち着けて安らげる、日々の疲れを癒してくれるものも欲していることが分かりました。そこで前回のカフェを紹介するという内容に加え、「自然とカフェと安らぎ」をテーマにすることにしました。癒しを求める若者向けのキャンドル販売・ワークショップも行うことにしました。

○実際にお店に足を運んでいただくしかけ ⇒「#はっしゅたぐカード」

2回目のイベントでは、出店している店舗に行けば、はっしゅたぐオリジナルグッズがもらえる「はっしゅたぐカード」を来場者に配布し、実際にお店に足を運んでいただく“しかけ”をつくることができました。イベントだけで終わらず、お客さんにカフェに直接行ってもらいたい、という想いを叶えるのがこの「はっしゅたぐカード」でした。何度も話し合いを重ねて、割引クーポンではなく、消しゴムはんこを使用してつくったオリジナルノートやお店とコラボレーションしたオリジナル商品をお渡しすることにしました。最終的には可愛いカードになり、店舗を紹介する内容も充実したものとなりました。



○SNSでの発信 ←上記の2つの課題ともつながる

1回目より宣伝に力を入れ、「#はっしゅたぐ」の公式 SNS を作成し、イベントの情報、告知、店舗の情報を発信しました。集客につながるよう、情報を正確に・漏れなく・魅力的に伝え、見ている人に楽しく、面白く思ってもらえるように工夫しました。SNS ではイベントそのものの発信だけではなく、お店の魅力を紹介する投稿を中心にする事で、SNS を通じて、佐渡のカフェに興味を持っていただくことができました。2回目のイベントのアンケートでは、SNS で知って来てくださった方の割合が最も多く、チラシ・口コミを越える結果となりました。

- 【Instagram アカウント】 @\_hashtagproject (アカウント名 #はっしゅたぐ PROJECT)
- 【Twitter アカウント】 @\_hashtagproject (アカウント名 #はっしゅたぐ PROJECT)
- 【facebook ページ】 #はっしゅたぐ

佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

○お客様満足度のさらなる向上 ⇒アンケートの声を改善に活かす。

アンケートで寄せられた以下の声を改善につなげることができた。

「はっしゅたぐラテアートが出てくるのが遅かった」 ⇒飲み物を出せるお店を増やした。

「メニューが少ない。(食品, 飲み物)」 ⇒店舗数・商品数を増やした。

「道順やどこになががあるのか分かりにくかった」 ⇒導線をわかりやすく改善した。

「チラシの場所が分かりにくい、内容が薄い」 ⇒チラシに必要な情報を載せられるように早めに内容を詰めた。掲示する場所を増やした。

「セルフサービスでお水と紙コップが置いてあると良いと思います」

⇒地元の名水である湧き水「箱根清水」を用意した。

「席が少なかった」

⇒同じ施設の多目的ホールを借りて、客席に使用した。

<実践Ⅱ>

2回目のイベントは2018年11月11日に実施しました。「自然とカフェと安らぎ」をテーマに、佐渡の自然・風景のスライドショー、ライトキャンドル、波の音のBGMなど、佐渡らしい落ち着いた空間作りにこだわりました。6店舗の商品を販売、2つの店とは私たちが企画したコラボレーション商品を販売し、イベント後も商品化されました。アロマキャンドルの販売・ジェルキャンドルのワークショップを行いました。320名以上のかたに御来場いただき、前回より多めに用意していた商品もすべて完売、大盛況でした。



# スイートポテトはると

「うまいもふんばりに使ってるから、さっまいのふんばりが感じられるスィーツ!」  
濃厚なさっまいのペーストの上に  
角切りされたさっまいをのせてお楽しみ!  
タルト生地には佐渡産茶葉使用

スイーツとタルトという  
新しい組み合わせ、どう?

# リンゴコンポートはると

リンゴのコンポートがおいしいはずだけど?  
リンゴの「食感」がたまらない!  
タルト生地には佐渡産茶葉使用  
リンゴの下にははちまがはちみつカード

# リンゴキャラメルはると

リンゴをキャラメルに煮るとおいしいはず?  
リンゴとキャラメルが相対するはず?  
タルト生地には佐渡産茶葉使用  
リンゴの下にははちまがはちみつカード

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～



### ご協力いただいたお店

#### ○キンちゃん本舗

佐渡産の米粉を使用したふわふわなスイーツを販売しているお店です。イベントでは私たちのアイデアをもとにコラボ商品としてスイートポテトタルト、りんごコンポートタルト、りんごキャラメルタルト、野草クッキーの4種類を販売していただきました。イベント終了後も、商品化して販売してくださっています。

#### ○新穂青木おやつ店

佐渡市新穂にある、地産地消にこだわった優しい味のおいしいおやつのお店です。当日はキャラットケーキ、シナモンロール、クッキーなどを販売していただきました。

#### ○佐渡赤泊かやの実会

佐渡市赤泊の名産品である「かやの実」からつくられた、歯ごたえがあって香ばしくおいしいかりんとうを販売しているお店です。

#### ○Brilliant（佐渡のめぐみ茶）

佐渡の野草を使用した、オーガニックで体に優しい野草茶を販売しているお店です。キンちゃん本舗さんとのコラボ商品の野草クッキーでは Brilliant さんの野草パウダーを使用しました。

#### ○オケサドコーヒー

山間にある大滝楽舎に焙煎所を構えるコーヒー専門店です。オリジナル商品として、ドリップバッグのデザインではっしゅたくとコラボさせていただきました。

#### ○mikawa

私たちの地元・佐渡市両津にある島民に大人気のカフェです。ニューヨークでパティシエをしていたこともあるオーナーの三川さんが作るスイーツは、当日約15分で完売したほどの人気です。私たちが初めて全員で行ったカフェで、カフェ#はっしゅたくの原点となったお店です。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～



**キンちゃん本舗** 株式会社



**かやの実舎**



【写真：出店6店舗のお店の様子・ロゴ】

**豊かな島を創るアイデアを若者の感性でカタチにするポイント**  
**○「自然とカフェと安らぎ」というテーマにあった空間作り**

**○見ているだけで癒されるジェルキャンドルのワークショップ**

佐渡の自然を身近に感じてもらえるように、佐渡の貝殻を使ったジェルキャンドルづくりを体験してもらいました。小さい子たちも多数参加してくれました。安全面に気を付けながら楽しんでいただけるように進行了ました。

佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

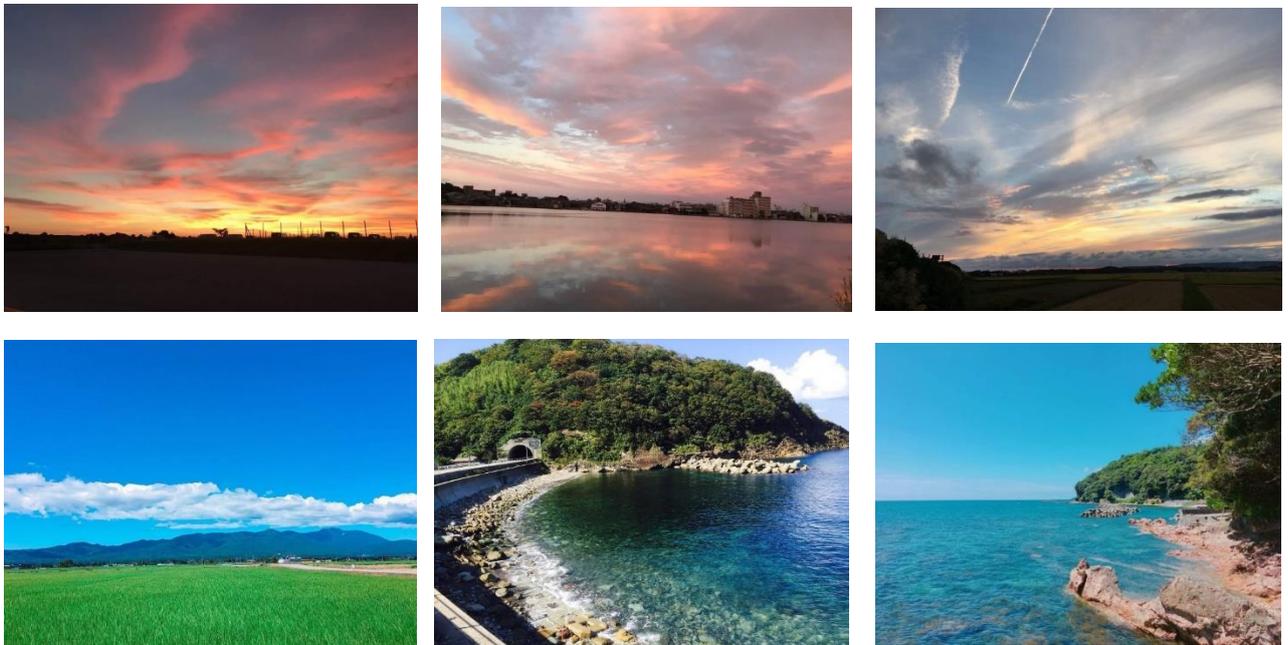
### ○香りで安らぐオリジナルアロマキャンドルの販売

家庭科の先生にも協力してもらい、試作を重ねて50個のキャンドルを販売しました。



### ○佐渡の自然の風景のスライドショー

使用する写真は、SNS で募集し、予想以上に多くの方々から提供してくださいました。



○学生ボランティアの協力 接客応対もよく、楽しみながら笑顔で協力してくれました。

## <リフレクション>

ビジョン・ゴールの実現に必要なことやスキルはたくさんあり、とても学生だけでは実現できないものばかりでした。ターゲットである学生を中心とした若者にどのように情報を届けるのか、お店にはどのように依頼するのか、提供したい商品・情報をどのように得て、どのように魅せるのか、お金はどのように集めるのか、収支計画はどのように立てるのか、装飾・備品はどうするのか、どのような空間にするのか、どのようなスケジュールで準備を進めるのか、食品を扱う上での安全面をどう担保するのかなど、どれも考えたことのないことばかりで、多くの壁を一つ一つ乗り越えていくことで、イベントを実現することができました。



キーパートナーとなるお店への依頼・打ち合わせは慣れない中でもご迷惑をかけずに気持ちよく協力していただけるように、特に力を入れました。中でも苦労したのは、お店の方とのコラボ商品の打ち合わせでした。お店の方につくっていただいた試作品を食べながら、よりよい商品になるよう、話し合いを重ねました。いかに私たちのこだわりを伝えるかが難しかったですが、満足のいく商品をつくることができました。

また、アイデアをカタチにする過程で、私たち自身のスキルアップが必要になることもありました。ワークショップに参加したり、プロから研修をしていただいたり、家庭科の先生に相談したりしながら、私たちはオリジナルの「消しゴムハンコ」をつくる、パウンドケーキのデコレーション、ラテアートづくり、キャンドルづくりなどを自分自身の手で、できるようになっていきました。

ビジョン・ゴールの実現に必要なことやスキルを学び、壁を乗り越え、ようやくアイデアとカタチにすることができたのは、地域・学校の多くの方々との協力とご指導のおかげです。

佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～



【コラボ商品は、私が考えたアイデアを元に、何度も打合せと試作を重ねて実現した。】



【指導していただける協力者のもと、スキルアップ！自分たち自身が成長することでカタチにできた。】

## ② 「お菓子な S 宴祭」 実践 I・検証・改善・実践 II・リフレクション

レストランシェフの尾崎邦彰様の監修のもと、佐渡のフルーツを使ったスイーツを創り、販売するイベントを実施しました。イベントは2018年の4月と12月に行い、1回目のイベント名は『お菓子なS宴祭～Very Berry Strawberry～』、2回目は『お菓子なS宴祭～Most Quaint～』です。集客人数は1回目のイベントでは320名以上、2回目のイベントでは180名以上、合計で500名以上のたくさんの方々がイベントに足を運んでくださいました。

### <実践 I >

1回目のイベント『お菓子なS宴祭～Very Berry Strawberry～』について紹介します。1回目のイベントでは、香りが良く、優しい酸味を持ち、島内外で人気を誇る齋藤農園さんのイチゴ・越後姫を使用してスイーツを創り、販売しました。齋藤農園さんでは試作品づくりの際にイチゴ狩りをさせていただき、当日も全てのイチゴを提供していただきました。

#### スイーツメニュー

- 苺のタルト さくさくの生地と優しい甘さのカスタード、甘酸っぱいイチゴがマッチしていました。
- フルーツサンドイッチ キウイ・バナナ・イチゴがサンドされた色鮮やかな一品です。
- ホットク 韓国のおやきで、もちもちの生地とあふれだすイチゴのソースがとろけます。  
イベントでは焼き立てほやほやを提供しました。
- 植木鉢スイーツ イチゴのババロアにクリームとココアパウダーをかけて植木鉢のような見た目にし、写真映え間違いなしのスイーツにしました。
- ストロベリーサイダー 凍らせたイチゴを砕き、サイダーと混ぜた爽やかな一品です。



## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～



### <検証・改善>

#### ○味だけじゃない！満足度を高めることが大切である。

1回目のイベントでは、320名以上が来場しました。予想以上に多くのお客様が来て、驚きました。満足してくれた方もいたが、お待たせする時間が長かったことやすぐに品切れになるメニューがあったことで不満を持たせてしまい、食材の魅力や豊かさを感じていただくことができなかつた方もいらっしゃいました。2回目では次の点を改善しました。

- －紙の注文表は会計方法や受取方法が分からないお客様がたくさんいた。
  - ⇒即売レジのアプリと会計の表を使い、相互に確認しながらスムーズに会計ができた。
  - ⇒ラミネートされた引換券をつくり、受け取りを分かりやすくした。
- －回転効率が悪かった。商品の準備が追いつかず待たせてしまった。
  - ⇒前日準備でほぼ完成させ、販売開始までには全ての商品を作り上げることができた。
- －スイーツをつくるのに精一杯で、調理室の外が良く見れていなかった。
  - ⇒メンバーがフロアに立ち、調理室の外も確認しながら、イベントを進めることができた。
- －完売が早く、商品を提供できなかったお客様が多くいた。
  - ⇒試作品づくりでシミュレーションを重ね、作る個数を増やすことができた。
- －飲食スペースが狭かった。
  - ⇒飲食スペースを広げたので、お客さんがくつろぐことができた。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### ○料理のスキルアップ ー質と量の両立を求めてー

毎月、尾崎シェフのもとで研修を行い、技術を磨きました。試作を重ねることで、お客様に喜ばれるおいしいスイーツをお待たせすることなくつくることができました。アンケートを見ると「おいしかった」という声が圧倒的に多かったです。喜んでいただけた様子を見ることができました。特に、2回目は来てくれたほとんどの方が佐渡のフルーツの魅力を感じ、満足していただきました。中には、「一口食べただけで、かんばったんだなということが分かった！」とおっしゃってくれたお客さんもいました。このように、佐渡の果物の魅力を感じてくれたお客様がたくさんいらっしゃって、頑張っただけで良かったな、と感じました。



### ○食材・農家・レシピの紹介 ⇒イベントを“佐渡を好きになってもらう”ことにつなげる！

1回目のイベントでは、調理で精一杯で農家の魅力や食材の紹介をすることができませんでした。そこで、2回目のイベントでは、農家さんへ訪問して食材について取材をし、農家さんを紹介するPOPを作成しました。また、スイーツのレシピの紙を作って配布することもできました。アンケートでは「レシピ付きなのがよかった。家で作ってみます」という方もいらっしゃいました。

#### レシピ例① ーホットクー

①材料を量り入れます。＜白玉粉は粉末状に！！＞

強力粉 130g、白玉粉 80g、砂糖 小さじ2、ドライトースト 小さじ1、塩 小さじ 1/2、  
具材 お好みで！ テーズ・チョコ・ジャム（イチゴ・ルレクチェ）など

②材料（①）の中心をくぼませて、そこに水 170g を入れて、ひとまとまりにします。

＜水は少しずつ加えてください！！＞

③材料（②）にラップをして、あたたかいうちで 30分～60分発酵させます。

④生地をつくりたい個数に分けます。＜手にサラダ油をつけるとうつつきません＞

⑤生地を手で伸ばし、具材をつつまます。

⑥フライパンに油をひいて焼きます。片面焼けたら裏返し、フライ返しで

ギュッと押しつぶします。

⑦両面焼けたら完成です！！

#### レシピ例② ーお米のムースー

①ミキサーにご飯 70g と牛乳 300cc を入れ、攪拌する。

②鍋に①の牛乳液と砂糖 40g を入れ、弱火にかける。＜沸騰させちゃダメ！！＞

③そこに粉ゼラチン 小さじ2 をいれて、余熱で溶かし、よく混ぜ、冷ましておく。

④ボウルに生クリーム 100cc を入れ、7分立てにする。

＜生クリームは泡立て器ですくい上げると、

かるく跡が残ってもゆっくり消えるくらいの固さになります！！＞

⑤上の④でつった生クリームを③の鍋に入れ、よく混ぜ合わせる。

⑥鍋底を氷水で、冷やしながらかき混ぜ、トロミがついたら、型に入れて冷蔵庫で冷やし固める。

⑦固まったら… 完成です！！

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### <実践Ⅱ>

2回目のイベントの『お菓子なS宴祭～Most Quaint～』について紹介します。“Most Quaint”はいとをかしの意味です。事前に農家さんを調べ、訪問そして見学をさせていただきました。当日はル・レクチェガーデン高野さんの甘みがとても強くとろけるような味わいが楽しめるル・レクチェと上野さんの無農薬レモン、佐渡乳業さんの製品を使わせていただきました。

- スイーツメニュー** 全体の食べ合わせを考えながらメニューを考えました。
- シフォンケーキ フワフワの生地と卵の優しい味がくせになる一品です。
  - ホットク 前回のイベントで大人気だった韓国風のおやきです。  
佐渡乳業さんのモッツアレラチーズとル・レクチェのソースを中に入れました。
  - 梨ゼリー ル・レクチェのコンポートと生の2種類を入れました。  
コンポートと生のル・レクチェを使うことで2種類の違う食感を楽しめます。
  - お米のムース 学校給食で大人気のデザートです。その味を佐渡産のお米を使って再現しました。アンケートでも、「おいしかった」とご好評をいただきました。
  - レモネード 佐渡産のレモンをふんだんに使って後味さわやかな飲み物にしました。



## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～



### <リフレクション>

活動を振り返って、私たちが特に力を入れて取り組むことができたのは、以下の点でした。多くの困難がありましたが、試行錯誤を繰り返しながら、若者にとっての豊かな島を創るイベントができたと感じています。

#### ○試作のプロセス ～どうすれば素材の味を生かしたおいしいスイーツになるのか～

私たちは、まず、佐渡産のフルーツで何を使うか、そのフルーツが旬なタイミングでイベントを開催できるのはいつなのかをメンバーと話し合いました。フルーツアイランドである佐渡の食材を使うことで、若者が豊かさを実感できるイベントを目指しました。イチゴ(新潟の特産品である越後姫)と洋なし(新潟の特産品であるルレクチェ)にメインの食材が決まり、春は2回・秋は5回の試作品づくりを実施しました。試作では、それぞれが持ち寄ったレシピで作った後、シェフに作り方やレシピのアレンジをしてもらいました。特に、同年代のニーズに合うスイーツにすることと、佐渡の食材の特徴を引き出せるスイーツは何かをよく考えました。工夫した点は、次の通りです。

#### 実践Ⅰ

- －素材を生かせるようにするため、イチゴタルトでは甘さを控えたカスタードクリームを作った。
- －フルーツの存在感を残せるようにカップを透明にした。
- －SNS 映えする写真がとれるように、フルーツサンドはイチゴをできるだけ大きく切って、いちごの形がそのままわかるようにした。
- －Instagram で流行していた植木鉢スイーツを取り入れた。
- －若者に流行している韓国のお菓子ホットクを取り入れた。  
ホットクは揚げ焼きのようになってしまわないように、油を少なめにした。

#### 実践Ⅱ

- －梨ゼリーではコンポートと生の2種類を使って、食感を楽しめるようにした。
- －果物の味もそのまま楽しんでいただけるように、洋なしのコンポートを添えて、シフォンケーキを提供した。
- －フルーツ以外でも佐渡の食材を使った。生クリーム・牛乳は佐渡で人気の佐渡乳業にお願いし、佐渡産米をつかったお米のムースも用意した。
- －ドリンクもレモネードを用意し、佐渡のフルーツを楽しめるようにした。レモンは佐渡の無農薬栽培農家を取材し、食材を提供していただいた。無農薬なので、レモネードに加えた輪切りレモンはそのまま食べることもできた。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

- －全種類食べられるように、重い軽い・さっぱりこっぴりりの食べ合わせを考えた。  
特に、粉ものが多くなって重い食べ物ばかりにならないようにバランスをよくした。

### ○スイーツによって佐渡産フルーツ・佐渡の食材の魅力をもっと多くの方に広げるために！

佐渡の食材をつかったスイーツを通して佐渡の良さを知ってもらうためには、おいしいスイーツをつくるだけではなく、より多くの方に知ってもらう、食べてもらう、感じてもらう、楽しんでもらうための工夫が必要でした。

#### －おいしさはもちろん、スイーツは SNS 映えするおしゃれな見栄えも大事！－

おいしいだけでなく、SNS 映えする商品・会場をつくることができ、かわいくて癒されたという声もあった。会場のバルーンアーチは、スイーツの色に合わせたパステルカラーの風船でつくった。春は春らしいピンクをベースにしてイチゴの風船もつけた。秋は洋なしの色に合わせて、イエローを中心にした。

#### －SNS で発信してもらう“しかけ”も重要！－

SNS で発信してもらえるように、インスタボードを作成した。1回目は人が写る大きなものを用意したが、人よりスイーツを撮りたいという理由からあまり多くの方に使用していただけなかった。2回目は小さいものを各テーブルに用意し、商品を置いて撮ってもらえるようにした。多くの方が撮影してくださり、大変好評だった。

#### －宣伝・広告による集客も大切！－

1回目のイベントでは、佐渡市両津のイベントでチラシを配って宣伝をしたり、小学校と保育園を回ってチラシを配布したりしました。UMAMI LABO 様からも発信していただいたことで多くのお客様に来ていただくことができました。準備万端で迎えた秋のイベントは、他の大きなイベントと重なっていたことや、1回目のイベントで想定以上に人が集まりすぎたために宣伝を抑えてしまったことで、春のイベントの320名以上に対して、180名程しか来場いただけませんでした。チラシを早めに作成し、多くの場所に掲示・配布、SNS でも積極的に発信することで、より多くの方に佐渡のフルーツを味わってもらえることができるとよかったです。

【Twitter】

@ito\_okashi04  
(いとを菓子)

【facebook】

いとを菓子



## 第4章 成果と課題

おしゃれなもの・おいしいもの・ワクワク感など、私たち女子高校生が望む都会的なものもありながら、田舎だからこそ感じられる幸福感・笑顔・人のつながり・余裕・癒しが感じられる島になれば、私たち若者にとっても、佐渡は自慢できる豊かな島になる、というのが私たちの仮説でした。私たちは、このような豊かな島を創り、佐渡に魅力を感じて、佐渡を今より好きになってもらうというビジョンを目指して活動してきました。

### <ビジョン> 学生を中心とした若者にとっての豊かな島を創る。

⇒ 佐渡に魅力を感じて、佐渡を今より好きになってもらう。

### <①成果 –ビジョンにつなげられたこと–>

#### ○来場者総合計 1,000 人以上！ ⇒来場者に島の豊かさを感じる機会をつくることができました！

多くのお客様に私たち学生が創る豊かさを感じもらうことができました。アンケートからは以下のような声が寄せられました。若者を中心として来場者に佐渡の豊かさを感じていただくことができました。

#### カフェ#はっしゅたぐ

- ・最高！！たのしかったです！
- ・おいしかったです！
- ・改めて、佐渡の美味しいものたちに触れることができました。人が多くて売り場は大変そうだったが、休憩スペースはゆっくりくつろげて、とても癒されました。スライドショー素敵！室内にいながら佐渡の自然を感じられた。
- ・佐渡の行ったことがないお店に出会えてよかった。
- ・いままで知らなかった佐渡のスイーツとお茶、お店の人ともお話ができてよかったです。
- ・とてもすてきなカフェでした。来てみて良かったと思います。アロマキャンドルかわいくてすてき！
- ・よくここまで準備したなーと感心しました。スライドショーで新しい佐渡の魅力を発見できました。
- ・販売だけでなく、体験、カフェコーナーがあったところが、ゆっくり過ごせてよかったと思います。
- ・盛況でびっくりしました。学生が沢山盛り上げて佐渡をよくしようとしているのが伝わりました。
- ・「佐渡の豊かさ」というものが今までよくわからなかったが、今回のカフェ#はっしゅたぐでその「佐渡の豊かさ」がわかった。

#### お菓子なS宴祭

- ・イキイキとして、かわいかったですよー！
- ・若い人たちがすごくいっぱいいてびっくりしました。
- ・とにかく女子力が高くてかわいかったです。
- ・バルーンアーチがとってもかわいかった！
- ・地元の食材をおしゃれに調理して提供してくれることは地元人にとって、とても嬉しいことです。
- ・どれも全部おいしくて、また食べたくまりました！レシピを配ってくれたおかげでお家でも再現できそうです！
- みんなが頑張っている様子が動画でもわかってとても良かったです。
- ・ホットクはもちもちして、見た目以上に新感覚な味にびっくりしました。
- ・激うまでした！
- ・イチゴが甘くておいしかった！
- ・梨がたっぷり使われていて美味しかったです！

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

- ・笑顔で丁寧にきちんとした接客態度に好感が持てた。
- ・あまりレクチュエの食べ方を知らなかったのので、こんなにおいしいと思わなかったです。
- ・孫と一緒に楽しい時間を過ごせました。佐渡はあまりこのような企画がないので、良かったです。



### ○売り上げ 596,940 円 ⇒豊かさを創るお店 ・ 農家への経済効果！

カフェ#はっしゅたぐの1回目の売り上げは、147,790 円、2回目は 194,050 円でした。合計は 341,840 円でした。お菓子なS宴祭の1回目の売り上げは 138,200 円、2回目は 116,900 円で、合計は 255,100 円でした。若者が豊かさを感じるカフェや、フルーツを生産する農家の売り上げとPRに貢献できました。

### ○SNS 上での総いいね数 2,800 以上 ⇒佐渡の豊かさをSNS上でも感じてもらうことができた！

数百人が見た投稿も多く、1万人以上が見た投稿もありました。いいね数は以下の通りです。  
 #はっしゅたぐ 2,300 以上 それに加えて、各出店店舗の SNS でも発信していただきました。  
 いとを菓子 500 以上 UMAMI Labo 様の facebook などでも発信していただきました。

### ○同世代・後輩への影響 ⇒私たち自身もインフルエンサーになることができた！

来場者としてだけでなく、ボランティアとしても同世代が多く参加してくれ、「楽しかった」と言ってくれました。私たちのイベントに協力してくれたことや「頑張っ！」と声をかけてくれたことは、ターゲットにしていた年代が興味をもってくれた証の1つです。佐渡がくれる満足感や幸せに気付いてもらうきっかけをつくることができました。

ボランティア・お客様として来場した後輩たちの中には、「中等生 PROJECT」に興味を持って、次の活動へとつなげてもらうことができました。佐渡を若者にとって豊かな島にするには、学生が佐渡のことを考えていくこと、プロジェクトを受け継いでいくことが必要です。それを促すためには、先輩たちのように、そして、私たちのように、立ち上がる人が必要です。

## 佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

### ＜②課題 —さらなる豊かさを創るために—＞

より多くの学生と佐渡の魅力であるカフェやフルーツなどの食材をつなげるために、イベントを日常につなげ、佐渡の魅力と人々をさらにつなげていくことが課題です。それぞれのチームがさらなるしかけ・しくみについて考えていきたいと思えます。

#### ○カフェ#はっしゅたぐ

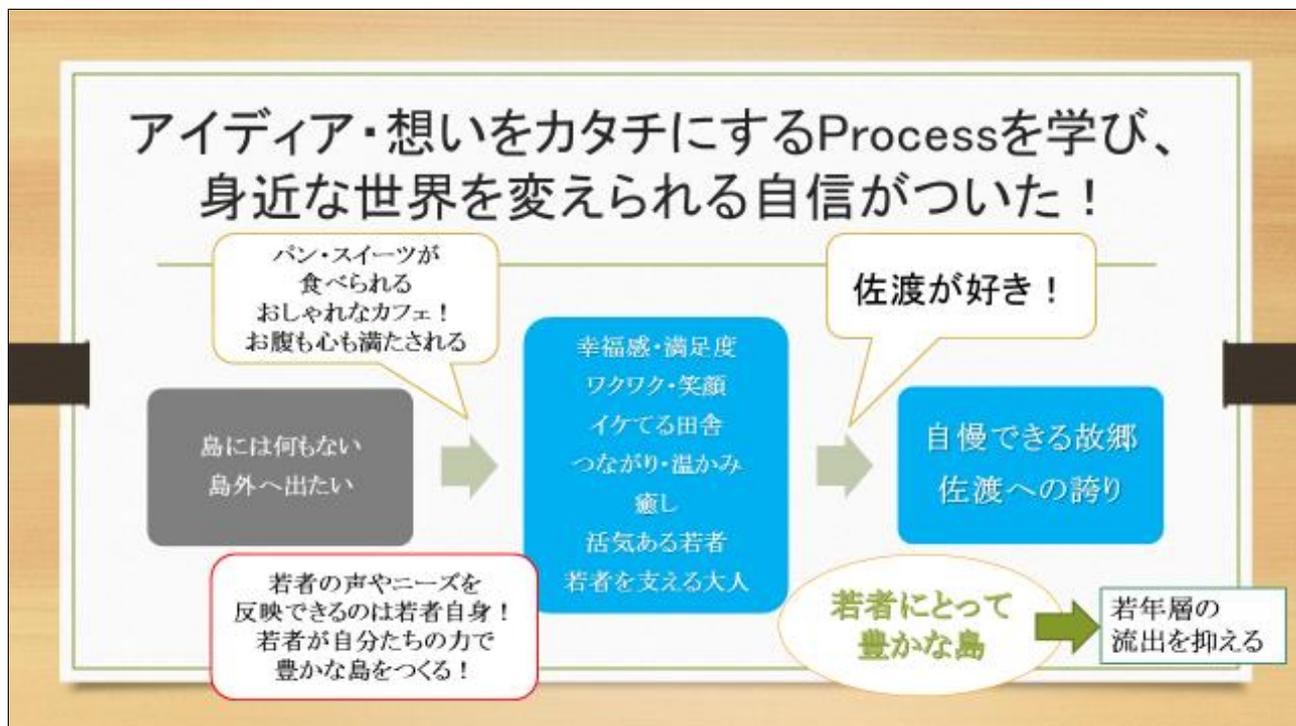
18歳限定の WEB クーポンなど更なる同年代・若者がお店に足を運ぶしかけを考えること

#### ○お菓子な S 宴祭

直売所を併設して、農家さんがつくった魅力ある食材をその場で販売するなど、フルーツをつくる生産者と来場者を直接つなぐしかけを考えること

## 第5章 終章 「ないものは創ればいい。豊かな島は自分で創る」

私たちはアイデア・想いをカタチにすることで、ターゲットである島内の若者の心に変化を与えて、「佐渡が好き」「佐渡は豊かだ」と感じられる島に近づけたと自信をもつことができるようになりました。今回、私たちが学んだことは、2つあります。1つ目は、「自分が島の豊かさに気付いていないだけだった」ということです。「何もない・つまらない」と感じるのは、「私たち自身が佐渡を知らないから、知るための行動をしないからだ!」と気付くことができました。2つ目は、「自分の力で島は変えられる」ということです。「佐渡には何もない、つまらない」と思っていた私たちですが、「ないものは創ればいい」、「自分たち自身の力で楽しい島を創ることができるのだ」ということに気付くことができました。これからは、地域・社会・組織に当事者意識を持って、人任せにして変化を待つのではなく、自らが動いて、周りに変化を与えられる人であり続けたいと思えます。



佐渡初！高校生がカフェ OPEN ～豊かな島を創るアイデアをカタチに～

— ご支援・ご協力いただいた皆様 —

<PROJECTアドバイザー>

増山和秀 様 (ビジネスデザイナー)

<PROJECTメンター>

渋谷春菜 様 (地域おこし協力隊・佐渡てらこや)

川上一貴 様 (佐渡市役所・佐渡てらこや)

尾崎邦彰 様 (レストランシェフ・UMAMI Labo)

山内三信 様 (ゲストハウスオーナー・いごねり屋早助・UMAMI Labo)

<PROJECTサポート>

佐渡てらこや UMAMI Labo 佐渡キャリア教育ネットワーク

出店店舗・協力農家の皆様

おいしいドーナツタガス堂 様 焼菓子ヒガナ 様

Coffee&Tea22 (佐渡ホンダ販売株式会社) 様

maSani coffee 様 キンちゃん本舗 様

新穂青木おやつ店 様 Brillian(佐渡のめぐみっ茶) 様

オケサドコーヒー 様 佐渡赤泊かやの実会 様 mikawa 様

齋藤農園 様 ルレクチェガーデン TAKANO 様 上野初男 様

ボランティアスタッフの皆様 アドバイスをいただいた皆様

募金活動にご協力いただいた皆様 広告にご協力いただいた皆様



福知山公立大学『田舎力甲子園』2019

溢れる『地元愛』蘇れ！我が母校  
『モノではなく心』から生み出す真の地域活性化とは

2019年5月1日

代表 内田 奏杜

安部小Project

## 《目次》

### 序章

#### 第1章 現状の認識と定義

- 1-1 鳥取県八頭町の概要
- 1-2 安部小学校の概要
- 1-3 安部小Projectの概要

#### 第2章 安部小Projectの設立と活動

- 2-1 Project設立に至る経緯
- 2-2 活動事例紹介
- 2-3 Projectに対する代表の思い
- 2-4 夏祭りにおいて工夫した点
- 2-5 活動を通して学んだこと
- 2-6 Projectの今後

#### 第3章 安部小Projectの評価

- 3-1 表彰等の記録
- 3-2 取材及び講演等の記録
- 3-3 地域の方及び県外中高生から寄せられた声
- 3-4 Projectメンバーからの声

#### 第4章 真の地域活性化とは

あとがき

参考文献

資料1：安部小Project 広報チラシ

資料2：第1回安部地区総合祭『安部っ子夏祭り』運営企画書（別紙）

## 序章

「地域活性“化”」とはなんだろうか。

今や社会問題となっている、少子高齢“化”や過疎“化”。語尾に“化”がつくと、現在進行形であり「今、変わっている」という意味である。地方創生について国が政策を発表してから、各自治体が「田舎の再生事業を展開」といった、俗に言う地域活性化を示すベクトルに沿って活動をしている。そして近年は、ゆるキャラの誕生、観光施設の充実、ICTを取り入れた事業、SDGsを取り入れた事業といった1つの固定概念の中で地域活性化が行われている。私はこの一連について違和感を覚える。私は地域というのは不定形であり、時代によって自然と変化するものだと考える。そのため、先ほどの固定概念に捉われる必要はないのではないだろうか。“今、変わっている”とは、無理に変えようとするのではなく、もとある資源や想いを尊重し時代に合わせて自然と変わっていくことを指す。近年、様々な取り組みがなされているが、固定概念に捉われて「地域活性化」をすることを最大の目的にしたために、外部から人が来て効果があるように見えるが実際は地域の人が主で関わることができず、本質的な地域の活性化に繋がっていないというケースが多い。

本論で私の設立した安部小Projectについて紹介するが、あくまでこのProjectは「地域活性化」をすることが最大の目的ではない。ある1つのこと(これが最大の目的)を間に挟み、それが作用することで地域活性化に繋がる仕組みにしている。是非、皆さんの地域に置き換えて「真の地域活性化とはなにか」考えていただきたい。

この論文は代表の内田が執筆者である。安部小Projectを運営するとともに、教育と地域活性化について1年間研究し論文を執筆した。研究テーマは「学校教育における地域活性化とはなにか?～総合的な学習の時間のシラバス作成とその実践～」で小学生の『地元愛』を育むためにはどうすべきか研究した。課題設定にあたり統廃合を経験した地元小学生にアンケートを取り結果を根拠とした。そして、結果や文部科学省の学習指導要領に基づき小学校の総合的な学習の時間のシラバスを作成し、実際に模擬授業を実施した。この論文では、それらの研究も踏まえて執筆する。(私の在籍する青翔開智高等学校やメンバーが在籍する各校と安部小Projectは直接的な関係がないため学校への問い合わせはご遠慮願います。)

### 執筆者の紹介

名前：内田 奏杜 (Kanato Uchida)

学年：高等学校3年

略歴：八頭町立安部保育所(H30閉所)

八頭町立安部小学校(H28閉校)

学校法人鶏鳴学園青翔開智中学校

学校法人鶏鳴学園青翔開智高等学校

出生：福岡県豊前市

出身：鳥取県八頭町

在住：鳥取県八頭町



幼少期から自宅近くの若桜鉄道安部駅に通い八頭若桜谷の風景を眺めてきた。母校の安部小学校が閉校し、卒業した幼馴染の中高生とともに『安部小Project』を平成30年に設立。校舎内清掃活動や安部っ子夏祭りなどを開催し大きな反響を呼ぶ。また、教育と地域活性化について、全国各地で『モノではなく心』の理念から生まれた『地元愛』をテーマに講演やパネラーを務めている。(各講演会時の紹介文を要約)

## 第1章 現状の認識と定義

本章では、私の在住する地域及び私が設立した安部小Projectの概要を主に述べる。本章で述べる概要及び定義は、以降の本論文においてすべてに共通するものである。なお、一部個人情報等を掲載しているため、インターネットやチラシ等で不特定多数の者に発信する場合は修正テープ等で白塗りしてからにすること。

### 1-1 鳥取県八頭町の概要

鳥取県の南東部に位置する八頭町は、平成の大合併により郡家町と船岡町と八東町の計3町が平成17年3月31日に合併してできた町だ。

『人が輝き未来が輝くまち八頭町～豊かな自然とともに みんなでつくる ふれあいのまち～』を町の将来像としている。人口は17,078人(令和元年6月1日時点)で総面積は206.71平方キロである。町の中心を八東川が流れそれに沿って第三セクターの若桜鉄道が走行する。沿線には特産品の西条柿や花御所柿、二十世紀梨などが見られ、鳥取と姫路を結ぶ国道29号線のうち、八頭町内はフルーツロードとして親しまれている。しかし、人口ランキング最下位の鳥取県の中でも山間部のため、人口減少及び少子高齢化が著しく進行している。合併した平成17年の八頭町総人口は19,434人であり、14年で約2,300人減少した。合併前の3町それぞれで見ると特に山あいにある八東町では急速な人口減少が進んでおり、廃村になった集落もある。また、次章以降で取り扱うが学校の統廃合が進んでいる。八頭町では『YAZU INNOVATION PROJECT』として廃校舎に大手IT企業を誘致してバスの自動運転実験をしたり、石破茂議員の地元として八頭町のPR用CMを作成したりと、日々、地元住民と共に地域振興に奮闘している。また、伝統文化や芸能も数多く継承されており、因幡しゃんしゃん傘踊りや麒麟獅子舞などが披露される。若桜鉄道の各駅の駅舎は昭和5年に建設されてからそのままであり一部を除いて、有形文化財に登録されている。四季折々の景色が楽しめる風情ある地域である。



図1.八頭町の合併図



図2.八頭町の田園風景(筆者撮影)

町総人口は19,434人であり、14年で約2,300人減少した。合併前の3町それぞれで見ると特に山あいにある八東町では急速な人口減少が進んでおり、廃村になった集落もある。また、次章以降で取り扱うが学校の統廃合が進んでいる。八頭町では『YAZU INNOVATION PROJECT』として廃校舎に大手IT企業を誘致してバスの自動運転実験をしたり、石破茂議員の地元として八頭町のPR用CMを作成したりと、日々、地元住民と共に地域振興に奮闘している。また、伝統文化や芸能も数多く継承されており、因幡しゃんしゃん傘踊りや麒麟獅子舞などが披露される。若桜鉄道の各駅の駅舎は昭和5年に建設されてからそのままであり一部を除いて、有形文化財に登録されている。四季折々の景色が楽しめる風情ある地域である。

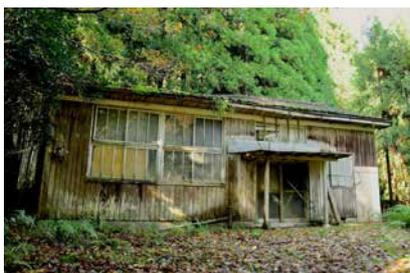


図3.八頭町の景観(筆者撮影)

## 1-2 安部小学校の概要

八頭町立安部小学校は明治7年に安井学校として開校し平成28年度をもって児童39名で閉校となった小学校である。八頭町合併前の八東町に位置し、合併直後の学校適正配置案に基づき統廃合となった。6つの集落からなる校区全体人口は2000年は1,072人であったが、2015年には903人になっており15年間で約170人、1年で平均約11人ずつ減少傾向にある。これらより、社会増減や自然増減などを考慮せずに数値のみで計算すると、約80年後には安部校区は消滅することになる。また、小学生の人口推移はピークの297名(昭和20年度)を境に児童数は激減し閉校時には39名となった。安部小学校の教育方針は『至誠・勤労・自治・奉仕』と、基本理念である『ふるさと安部を愛し、豊かに、たくましく「生きる力」をもって安部っ子の実践力を生み出す』という2つの柱がある。



図4.安部小学校外観(筆者撮影)

## 1-3 安部小Projectの概要

上記の通り安部小学校は閉校となった。卒業生である私たちは、閉校してから校区行事の消滅や耕作放棄地の増加など地域の急速な衰退を感じ、中高生団体『安部小Project』を平成30年4月に設立した。現在は15名が正式なProjectメンバーとして活動しており、これに加え小学生含む約10名が活動をサポートしている。本Projectは、上記の2つの柱に基づいて『溢れる「地元愛」蘇れ！我が母校』をスローガンに活動している。活動内容は、月に1回の廃校舎内清掃活動、安部校区の住民全員を参加対象にした安部っ子夏祭りの企画運営、各集落行事への参加や雪文字作成などの季節行事の実施である。本Projectは「地域活性化」を最大の目的にするのではなく『自分たちの「やりたい!」を自分たちの学び舎で実践し、やっつけのける中で地域の方と交流し「地元愛」を育み、その活動の作用で地域に貢献する』ことを最大の目的として活動している。特に、夏祭りは『地元愛』を具現化する場所として実施し、初開催にもかかわらず約400人の来場者数を記録した。



図5.安部小Project集合写真(Project資料)

氏名	在籍学校及び学年	氏名	在籍学校及び学年
内田 奏杜	青翔開智高等学校3年	木原 亮	鳥取工業高等学校2年
樋引 菜々穂	鳥取東高等学校2年	藤田 康太	鳥取工業高等学校2年
尾崎 歩	八頭高等学校2年	佐納 卯美	青翔開智高等学校1年
藪田 颯人	八頭高等学校2年	尾崎 菜々美	鳥取城北高等学校1年
岸田 歩夢	八頭高等学校2年	飯田 光希	八頭高等学校1年
藤原 一真	八頭高等学校2年	山部 光槻	八頭中学校3年
木原 碧	八頭高等学校2年	佐々木 紳佑	八頭中学校3年
藤田 侑省	鳥取湖陵高等学校2年		その他サポートメンバー

図6.安部小Project名簿

## 第2章 安部小Projectの設立と活動

本章では、安部小Projectの設立や活動に対する想いを中心に私たちの活動について紹介する。第4章の真の地域活性化について安部小Projectに置き換えて考察している。なお、第1章1-3と重複するものがある。

### 2-1 Project設立に至る経緯

活動のきっかけの根源となった出来事は、安部小学校の閉校である。小学校が地域の要となる存在であったことから閉校後の校区は想像以上の変貌を遂げた。昔から「フルーツの里」として柿や梨などの栽培が盛んに行われており、総合的な学習の時間には小学生が近所の農家の田畑で農業体験をしていた。農家は「小学生が体験に来るから」と田畑を維持してきた。しかし、閉校後は高齢化が進み多くの田畑が放置され、我が家も柿の収穫体験を引き受けていたが、柿の木を切ることになった。また、統廃合後はスクールバスでの登下校により通学中の地域交流がなくなった。集落の中路は人の気配がまるでない。「自分たちがなんとかしないと後がない」と思った。しかし、私は何をすべきなのか分からなかった。

そのような中、閉校した年の夏、私の弟(当時小学校5年生)が「安部小の校庭で遊んでいるけど草が生えて遊びづらい」と声をかけてきた。そこで私と同じ学校に通う佐納と共に校庭の草取りを真夏の炎天下の中行った。校庭の草取りをしている時に、校舎内が閉校時のままで片付けができていないことに気がついた。そこで校舎内清掃を実施したいと考え町役場にその旨を伝える内容を八頭町ホームページの町民意見の投稿欄に投稿した。これが私たちの

現在の活動の視覚的な根本である。そして、閉校した年の10月に中高生5人で校舎内清掃を行った。以後、毎月清掃活動を実施する中で、あるメンバーから「閉校して校区行事がなくなったから自分たちで納涼祭みたいなのをしてみたい」という意見が出た。全員一致で納涼祭を「やりたい！」となり、人員の確保や運営組織の確立を目的に平成30年4月に安部小Projectを設立した。募集をかける際は「安部校区の地域活性化に興味がある人！」ではなく『自分たちの「やりたい！」を自分たちの学び舎でやってのける！』というテーマでメンバーを募集した。中高生が少なく皆、幼馴染の感覚かつ”中高生のノリ”もあってすぐにメンバーが集まった。こうして安部小Projectを設立し始動した。



図7.Projectメンバー募集チラシ



図8.校舎内清掃活動による効果

## 2-2 活動事例紹介

安部小Projectの主な活動は、定期活動の校舎内清掃活動を軸として年に1回の安部っ子夏祭りを開催する。また不定期で講演やパネラーを代表が務めている。

校舎内清掃活動は平成29年10月から毎月続けている。Projectメンバーの在籍校がそれぞれ異なるため、定期考査や部活等の予定を考慮しながら毎月第三日曜日を目安に行なっている。清掃活動では、ただ掃除をするだけではマンネリ化するため、校舎内で鬼ごっこをしたり人生ゲームをしたりするなどレクリエーションを通して自分たちの古き学び舎で時間を過ごし、安部小学校在学時の思い出を振り返る。また、定例会を行い安部っ子夏祭りの準備を行ったり『地元愛』を育む活動をしている。具体的には「安部小学校の校舎の活用方法を考えよう！」と題してワークショップ(Projectメンバーのみ)を代表の内田が企画して行った。閉校舎の活用について考えるにあたり、まず知識や想いを共有した。安部地区や小学校についてのテーマを出して個人が付箋に書き、それをグループ内でまとめた。後半は、小学校の校舎跡地をどのように活用すれば良いかについて、個人でマインドマップを作成し、簡易企画書を作成した。それをもとに全体討論で情報交換し、実現するためにはどのようなことをすべきか全体で討論した。

図9.定例会

テーマ1：安部小学校に通ったときの思い出

テーマ2：安部小学校の良いところ

テーマ3：安部小学校が閉校してどうなった？

テーマ4：過疎地域ってどんな地域？

テーマ5：小学校の統廃合って必要？不要？



大人は参加せず中高生だけでワークショップをやったが、意見が活発に出て非常に有意義な時間となった。これらの活動も目的としている『地元愛』の育成につながると考える。

安部っ子夏祭りは、平成30年8月12日に安部小学校体育館を会場に開催した。テーマは安部小Projectの活動目的に合わせて『地元愛 ～安部っ子パワー全開！中高生の地元愛で八頭を元気に！！』とした。代表である私は、第1回は校区全体のお祭りにしたかったため校区内の全集落に屋台出店と伝統芸能発表をお願いした。屋台は飲食店として10品以上の品が、ステージでは手踊りや皿回し、大太鼓が披露された。また『地元愛』を表現するために映画を作成し上映した。資金は八頭町の補助金制度を活用した。当日は、初回にもかかわらず約400人の来場があり大盛況に終わった。夏祭りの準備や当日の苦労、学んだことなどは以後説明する。また、安部っ子夏祭りの企画詳細内容は資料2をご覧ください。



図10.安部っ子夏祭りの様子とチラシ

## 2-3 Projectに対する代表の想い

ここまで何度も述べた『地元愛』だが、これも不定形のものである。そして私が常日頃から大事にしている『モノではなく心』も不定形だ。ここで、私が講演をする時にいつも紹介する私の『地元愛』の概念を紹介する。

私は「安部に育てられた」と自信を持って言うことができる。理由は主に2つある。1つ目は、私が2,3歳の頃、親と一緒に最寄りの安部駅まで散歩をし、列車に手を振っていた時だ。私は記憶にないが、毎日通っていたこともあり車掌さんに顔と名前を覚えられ「かなとくん、こんにちは」と声をかけられていたようだ。そして、15年経った今でも、列車に乗ると「内田くん、最近調子はどうだえ？頑張れよ！」と声をかけていただける。ローカル鉄道だからこそ可能なことであって、都会でこんな経験をするのはまずないだろう。2つ目に、私は小さい時から近所の方々によく声をかけていただいていた。集落到同級生がいないため、下校時は家まで一緒についてきてくださった。私は当時、鉄道が好きで身勝手にその話ばかりしていたが、集落の方々は笑顔に何時間も話にのってくださった。今でも「安部小Projectがんばるとるがな！新聞見たぞー！」と声をかけていただける。人とのコミュニケーションによって『地元愛』は育まれるのだろう。近年「人口減少問題」や「少子高齢化問題」を解決すれば地域に活気が戻ると言われることもあるが、単純に考えて無理である。合計特殊出生率は2.07を下回ると人口が減少するという1つの指標であるが、1位の沖縄県でさえ1.9で2.07に届いてない。地域の活気を上げるならばやはり地元民の意識に尽きる。「鳥取には何もない」といった「心の過疎化」が問題である。しかし、世代問わず心が通い『地元愛』があれば「心の過疎化」は進行しない。「モノの過疎化」が進んでも「心の過疎化」は進行させない。これが『モノではなく心』である。

私は安部の良さを外部に発信するのではなく同じ中高生に共有したかった。そして『地元愛』のある中高生として大人になった時に皆が「ああ、安部に住んでいて良かったな」と思えるようにしたかった。私が安部小Projectを中高生団体にした理由はそこにある。もし地域活性化をするならば、地域活性化に興味のある多世代の人たちを集めて団体をつくる。中高生団体にしたのは、「地域活性化に興味のない子でも、自分たちの興味関心が地元愛の創造そして地域活性化に繋がる」と考えるからだ。正式メンバーは15名だが、募集をかけた時点で地域活性化に興味があるのは自分を含めて3名。私は設立する前からこうなることは承知していたので「地域活性化ではなく自分たちのやりたいことをやれる場にしよう！」と言って募集をかけた。それから1年、地域活性化に興味のなかった子も自分たちの「やりたい！」ことをやったことで、設立当時は消極的だったのが、今では自分たちで安部のことについて考察したり、第2回安部っ子夏祭りの企画内容を率先して考えてくれるようになった。これが『地元愛』を育む活動である。これからは学生がもっと自発的に動く必要があると社会は求めている。しかし、やる気があってもチャレンジしにくい環境にあるのが現状だ。鳥取県で高校生が地域について考えるイベントに参加した際、やりたいことがあるがやれないままにいる同級生、何かやりたいけど何をやればいいのか分からない同級生などが多くいた。閉塞的な学校という環境ではない課外活動としてProjectを設立した。

地域活性化はあくまであることをした作用によって起きるものである。我々は『地元愛』を育みそれを具現化することを目的に実施した夏祭りが、間接的に地域活性化に繋がっている。逆に「安部っ子夏祭りをするための安部小Project」では全く意味を成さない。これが継続が困難になる理由である。自分たちの「やりたい！」ことを自分たちの学び舎でやって地域の方と交流し『地元愛』を育むことが「心の過疎化」を防ぎ、地域の活性化に繋がるものだと私は考える。だからこそ、今の活動内容はこれ以上でもなくこれ以下でもない。そして『地元愛』は各々が定義するものであり不定形なのだ。

## 2-4 夏祭りにおいて工夫した点

夏祭りは上述の通り「地元愛を具現化する」ことを目的に開催した。そのため、各集落に屋台出店と伝統芸能発表をお願いした。また、当日は大勢の方に来場していただきたく、八頭高校書道部による書道パフォーマンスや青翔開智中高軽音部による演奏など、近隣の学校に出演していただき新鮮な夏祭りにした。『地元愛』をテーマに中高生で映画を作成し当日上映した。準備では、校区内でも思想や文化は昔から違う部分があり苦労する場面もあった。中高生ではできないことも多々あった。特に資金調達では町の補助金を使用し、町役場の方には補助金以外にも様々なアドバイスをいただいた。広報チラシ印刷の際には青開開智中高で印刷をさせていただき印刷費を抑えるなど費用削減にも努めた。各在籍校で生徒会執行部だったメンバーも数名おり、当時の経験を活かして安部校区にはどのような手段手法が適しているかということも自分たちで考えた。夏祭り直前には各集落の行事の中で実施の宣伝もした。また、公式Facebookを作成し情報発信を続けている。

## 2-5 活動を通して学んだこと

中高生の時に団体を設立し運営する経験は学校という閉塞的な環境でしようと思っても難しい。夏祭りを実行するにあたり、資金として八頭町役場から補助金をいただいたり、行政財産使用届、営業類似行為書などの文書作成、さらには傷害保険契約など苦労も多いが学校では経験できないことを自ら体験することができた。活動をしていく中で地域の協力によって私も含めメンバー全員が大きな知識や経験を得ることができたと実感している。そして「お前らがするなら協力しないわけにはいかんだ」と協力してくれた校区の方、屋台出店やステージ出演に携わっていただいた方、また、本来の業務では補助金のやり取りのみのところを運営や広報などでの的確なアドバイスをさせていただいた町役場の職員の皆さま。長期に渡って取材をさせていただいたメディア関係の皆さま、課外活動として応援していただいた青翔開智中高の皆さん。これだけたくさんの方々にお世話になり安部っ子夏祭りと安部小Projectは成り立っていることを改めて考えると、閉校になったものの1つの学び舎として安部小学校は残っており、これからも地域に欠かせない存在になると感じた。

## 2-6 Projectの今後

今後も『地元愛』を育む活動として自分たちの「やりたい！」ことを実践していく。しかし、閉校したことで安部小学校を卒業した中高生が数年後には消滅する。そこで安部小Projectでは、統合した八東小学校(統廃合を経験した児童102名)でアンケート調査を行った。重要な質問事項は下記の2つ。

Q1.以前通っていた小学校が閉校したことで寂しさを感じるか

Q2.小学校が閉校したことで地域の活気が薄れたと感じるか

Q1では全体の75%が寂しいと回答したが、Q2では全体の10%のみ活気がなくなったと回答した。この60%の差は「学校に対する想いは強いが『地元愛』は弱い」というところにある。すなわち、安部小Projectは閉校した学び舎で『地元愛』を育む活動をしているため、八東地域に視野を広げると活動が展開できると考える。また、令和元年度の夏祭りは町教委と八頭中学校のボランティア団体に協力してもらい同世代の中高生と活動を通して交流する。

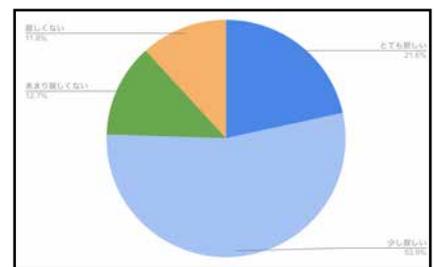


図11.Q1の回答分布

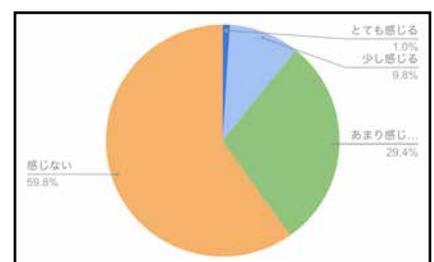


図12.Q2の回答分布

### 第3章 安部小Projectの評価

本章では、私が設立し代表を務めている安部小Projectの評価を紹介する。

#### 3-1 表彰等の記録

安部小Projectの活動において客観的な評価を得ること、全国区へと発信することを目的として『PRUDENTIAL SPIRIT OF COMMUNITY 第22回ボランティア・スピリット・アワード』（主催：プルデンシャル生命/ジブラルタ生命/教育新聞社 後援：文部科学省/日本赤十字社）に応募した(以下、SOCとする)。全国から1,631通の応募のうち、中四国ブロックにおいてブロック賞を受賞し、11月に岡山で開催された中四国ブロック表彰式、12月に東京で開催された全国表彰式に出席した。SOCは『称える・交流する・発信する』の三本柱で、ボランティア活動に取り組む中高生を支援するプログラムである。ボランティア活動をする個人または団体に各賞を贈り、3日間の中で自分の活動を発信したり全国の仲間の活動を吸収することができる。全国から集まった個性ある40人。何より感じたのは『主軸があってブレないが、必ず皆の活動を認めて自然と互いに高め合う仲間』だったということだ。学校やその他の集団の中で、個性あるメンバーが集まっても多様性を認めることができず協調性が欠けてしまい、結果として各々の力が出しきれないという状況をよく目にしてきた。しかしながら、SOCでは誰一人として落ちこぼれることなく自身の想いを皆に伝え、初めて出会った全国の仲間と共に3日間で多くの刺激を受けた。今でも連絡を取り合い相談する“仲間”である。



図13.SOC全国表彰式集合写真



図14.SOC全国表彰式出席メンバー

また、鳥取県内に活動を周知させることを目的に『平成30年度トットリズム活動表彰』（主催：トットリズム[鳥取県]）に応募した。こちらは、最優秀賞と若者活動部門優秀賞を同時受賞し活動への自信に繋がったほか、県内の活動表彰ということもあり県内の団体や行政の方々から声をかけていただけるようになった。SOCとは違い、県内で活躍される大人の方々や企業の方々と交流することができた。また、この受賞をきっかけに地方紙の日本海新聞から取材を何度か受けるようになり、新元号令和特集で新聞の第一面に掲載されたこともある。



図15.トットリズム活動表彰集合写真

さらに、SOCと似たプログラムで『全国高校生マイプロジェクトアワード』（主催：NPO法人カタリバなど）にも応募した(以下、マイプロとする)。こちらは書類選考は通過したものの全国大会に出場することはできなかった。しかし、マイプロは規模が大きく多岐にわたる分野に触れることができた。また、SOCのメンバーとの再会もあり自分たちの活動に磨きをかけることにつながった。当日割り当てられた班からいただいたコメントは3-3で紹介する。



図16.マイプロ関西大会集合写真

以上のプログラムを通して、安部小Projectの基礎理念や方向性に加えて活動内容の改善を行うことができた。次年度以降も可能であればプログラムに応募してProjectとしてのキャリアを積みたい。なお、ここで紹介した受賞記録は、“策”ではなく安部小Projectの活動に対してである。この論文は“真の地域活性化”を実行するための策を述べたものであり、初公開の内容である。

3-2 取材及び講演会の記録

安部小Projectの活動は客観的に見ると「廃校舎を活用して中高生が活動している」という点から新規性と話題性があるということで、ありがたいことにたくさんの取材を受けたり、講演やパネラーとして出演している。なお、八頭町ケーブルテレビで安部っ子夏祭りの特番(10分)を1ヶ月間毎日5回ほど放送していただいた。

掲載日	掲載
2018.06	毎日新聞
2018.07	鳥取県政だより
2018.07	鳥取市広報誌つばさ
2018.08	朝日新聞
2018.09	日本海新聞
2018.12	わかてつ便り
2019.03	日本海新聞
2019.03	中国新聞
2019.04	情報誌 いまと、これから。
2019.05	日本海新聞 (第一面掲載)

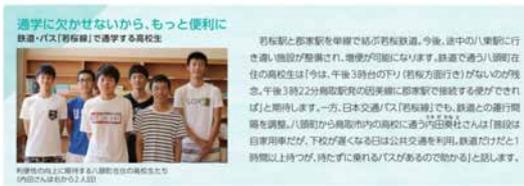


図17.取材記録

年月	概要
2018.03	邑南町長と地域について考える
2018.10	若桜鉄道88周年記念事業
2019.01	地元高校生×若手移住者



図18.講演&パネラー記録

### 3-3 地域の方及び県外の中高生から寄せられた声

安部っ子夏祭りを開催した際にいただいた地域の方の声や、SOCやマイプロの際にいただいた県外中高生を紹介する。

#### 【地域の方の声】

- ・若い人が全く組織のないところから、こんな催しをしてくれるのは非常にありがたい。
- ・4ヶ月という短い期間でここまで創り上げたことに感動。是非、来年度以降も継続してほしい。
- ・閉校前までであった校区民運動会に代替して私たち大人も交えて盛り上げていきたい。
- ・大人以上の活動で素晴らしい。安部小学校最高！
- ・若者の力はすごい。閉校という寂しい出来事を逆転した取り組みで私たちも頑張りたい。
- ・校舎内清掃活動をProjectのみでやっていると聞いた。年末などは大人も参加したい。
- ・補助金活用や保険契約など大変だったと思うが本当によく頑張った。素晴らしい。
- ・代表の『モノではなく心』という理念はものすごく共感した。
- ・『地元愛』ある夏祭りで非常に良かった。
- ・これからは若者中心。大人はそれをサポートしていきたい。本当によくやった。
- ・10人ちょっとの運営者で400人の集客はすごい。それも中高生。
- ・これぞ今後の教育。自ら学び自ら社会に飛び込む姿はお手本です！
- ・「地域活性化を最大の目的にするのではなく自分たちのしたいことをする」これが良い。
- ・代表が校歌をピアノ伴奏している時に涙が出てきた。安部小Projectに感謝。
- ・学校って素晴らしい。地域って素晴らしい。そしてあなたたちの活動がとっても素晴らしい。
- ・若者の力ってすごい。そこらへんの企業や団体のイベントより軸がある。
- ・中高生のノリでやったと聞いたが、それがものすごく大事。これからも頑張って！
- ・安部の子どもは本当にしっかりした子が多い。『地元愛』非常に良いです。
- ・自分たちも中高生の時にこんな祭りがしたかった。ん？今からでも遅くないか(笑)頑張れよー！
- ・『地元愛』があれば『心の過疎化』は進まないという言葉に感銘を受けた。
- ・代表の熱意はパフォーマンスではなく共感できるひとつの教えのように感じた。
- ・意義あるものだ。これからも頑張してほしい。
- ・代表の目指す未来像が非常に面白い。是非これからも頑張ってください！
- ・教育委員会などと連携して中高生の魅力的な存在をアピールしてほしい。
- ・閉校して安部小卒の子がいなくなるけど、安部小Projectは今後も残してほしいな...
- ・Projectもよく頑張っているが、集落全体で協力していて良い雰囲気だった。
- ・運営企画などを見る限り役場の協力体制が非常に良かったように感じる。
- ・地区公便りで祭り内容が発信されていて良かった。今後も継続してほしい。
- ・校歌に『理想に燃ゆる若人』とあるのはまさにこれのことだろうと感じた。
- ・青年団として来年以降も応援したい。頑張れ！安部小Project！！
- ・若者の可能性は本当に測りきれないと感じた。本当にすごい...
- ・よく異なる学校に通いながら準備したと思う。LINEで会議とかすごいですね。
- ・学校とは違って社会の場でよくやった。胸を張って頑張ってください！

この他、たくさんの方の声をいただいているが割愛する。

## 【県外中高生の声】

- ・心の過疎化の進行に歯止めを…！地元愛ものすごく伝わりました！！鳥取にしかない要素をもっと活かすといいと思いました♪大人も子供も楽しめるようなことで心の過疎化を止めてください！『モノではなく心』の理念から生み出された『地元愛』Good！！（岡山県・高校生）
- ・自分たちの『地元愛』で母校の閉校という寂しさを乗り越えたことにすごさを感じました。私も似たような活動をしていますが、プレゼンされていた『モノではなく心』を私も大事にしたいと思います！プレゼンの熱意から「本当にこれをやりたいんだ！」っていうのがよく伝わりました。これからも頑張ってください！！（広島県・中学生）
- ・自分たちでイベントを企画してそれを実際にやり遂げていること自体がまずすごいなと感じました。『モノではなく心』と『地元愛』をテーマにされた熱意あるプレゼンで聞き応えがありました。もっとお話し聞きたいです！（大阪府・高校生）
- ・『モノではなく心』とKeyWord『地元愛』を聞いて鳥取行きたくなりました！地元愛は私も活動内外でとても大切にしています！雪文字は羨ましい…(笑)こっちは降らないです…巻き込み力Good！やっぱりこれ書きながら『地元愛』大切だなって思いました。地元の良さを自分たちがまず知る『地元愛』。そして地元愛を育む作用で地域活性化という考え方に私も何か気づかされた気がします。中高生主体で楽しそうなプロジェクトだから私も参加したい！（笑）これからも頑張ってください！！（和歌山県・高校生）
- ・『モノではなく心』という考え方がステキだと感じました。私も地元でまちづくりの活動をする中で『地元愛』ってとっても大事だと思っています。今、地元愛を育んでもらえるようにまちの活性化に向けたプロジェクトを私たちも創設しています。共感できる点が多くありました。これからもお互い頑張っていきましょう！！（岐阜県・高校生）
- ・プレゼンの熱意から『地元愛』の重要性を改めて感じました。たくさんの方々を巻き込みながら活動を広げていらっしゃることにすごさを感じました。（京都府・中学生）
- ・安部小Projectさんの活動の内容もプレゼンも1週間経った今でもよく覚えています。あの熱意あるプレゼンで私の考え方も少し変わったような気がしました。またお会いできたら嬉しいです。これからも活動頑張ってください。（神奈川県・高校生）
- ・今でも熱意あるプレゼンを覚えています。私は熊本地震で被災しましたが『地元愛』があったからこそ今、地元でボランティアをしています。遠いところですが、是非またいつかお話を聞かせてください。鳥取に行く機会があったら連絡させていただきます！（熊本県・中学生）
- ・SOCの3日間ではあまりお話できなかったのですが、気になっていたので連絡させていただきました。『モノではなく心』という内容に特に共感しました。ただ閉校舎を活用するのではなく『地元愛』を育みその作用で地域活性化を図るとするのは奇抜なアイデアだと感じました。これからも頑張ってください！！（東京都・中学生）
- ・『モノではなく心』のプレゼンを聞いて、ボランティア活動だけでなく日々の生活にも繋がる話だなと感じました。そのような環境下にある鳥取に行ってみたい！（静岡県・中学生）
- ・安部っ子夏祭りの企画、とても勉強になりました。私の町は人口が500人くらいで同じように過疎地域ですが、私も『地元愛』があればその地域は残ると思っています。ただ方法として何をすれば良いか思いつかなかったのですが、安部小Projectさんのような祭りを企画してみたいと思いました！企画手順など良かったら教えてください！！（長野県・中学生）

この他、たくさんのお声をいただいているが割愛する。

### 3-4 Projectメンバーからの声

部活があるので参加するか悩んだけど、小学校時代の友達とまた話せるのはいいなと思って参加した。中高生のノリで始めたけど、いろんなところから協力してもらって、やり甲斐があるなと思った。ほんとに楽しかった。あんなにきれいな校舎だったのに、ほこりやカメムシだらけになって、人がいないときみしいなと思った。学校がなくなったのはさみしいから、盛り上げていきたいなと思った。勉強や部活などで忙しい毎日だったが、母校のためにと参加した。同級生はもちろん他学年との繋がりも増えたことで、楽しく充実した日々を過ごすことができた。また、このプロジェクトも良いものにすることができた。



図19.活動様子

## 第4章 真の地域活性化とは

序章で「地域活性“化”」とはなにか問いかけた。最初に地域活性化の定義を敢えてしていなかったもので、ここで述べる。一般的な地域活性化とは「各地域がそれぞれの特徴を活かし、自律的かつ持続的で魅力ある社会を作り出すこと」である。つまり、地域に住む人々にとって住みやすいようにしていくこと。もとある資源を大切にそれを活かしていくことなのだ。したがって、活動をアピールするために新たなことを創出したり変えていくものではない。地域活性化はあくまであることをした作用によって起きるものである。安部小Projectは『地元愛』を育みそれを具現化することを目的に実施した夏祭りが、作用で地域活性化に繋がっている。逆に「安部っ子夏祭りをするための安部小Project」では全く意味を成さない。これが継続が困難になる理由である。自分たちの「やりたい！」ことを自分たちの学び舎でやって地域の方と交流し『地元愛』を育むことが「心の過疎化」を防ぎ、地域の活性化に繋がるものだと私は考える。自分たちの町を愛す『地元愛』を謙虚に育み、それを地域の人々と共有し、団結して1つの物事に取り組むことで現れた成果こそ、真の地域活性化ができたと言えるのではないだろうか。

## あとがき

私は安部小学校が伝統ある地域の要となった場所として、閉校はしたものの校区民の心の中では地域の拠り所として生きていてほしい。私はその伝統を伝えることができるのは、校歌であると考えている。ピアノで校歌を弾くと自然と思いが蘇ってくる。

♪ 仰げば霊峰平木山 ふしてはのぞむ八東川 桜のかおる丘の上 輝きたてる我が校舎

至誠 勤労 自治 奉仕 平和の旗をおしたてて 雄々しく進む 我が校の 誉れは永遠に輝かん  
桜が丘の名において 理想に燃ゆる若人が 文化の香りいや高く 故郷の花と咲きいでん ♪

この校歌を聴くと、1番は安部にあるのどかな風景が、2番は安部っ子の勢いある姿が、3番は『地元愛』をもって若者が故郷で動いている姿が想像できる。自分たちの道を指し示してくれる歌だ。

地域も人も時代によって考え方や様子が自然と変わる。そこに良さがあり、それに気がつけば自分のすべきことが分かるはず。新しい時代「令和」。己に対して命令として自分のすべきことを下し、人々と協調性を大事にして調和を図ろうと試みるのが大事なのではないだろうか。

## 謝辞

安部小Projectの運営にあたり、積極的にご支援ご指摘していただいている安部校区の皆さま、安部小学校校舎を貸していただいている八頭町役場総務課管財係の皆さま、アンケート調査にご協力いただいた八東小学校の皆さまをはじめ、安部小Projectに関わっていただいている皆さまに深く御礼申し上げます。

## 参考文献

安部小学校閉校記念事業実行委員会『安部小学校閉校記念誌』2017年

「まちの概要」『八頭町』<http://www.town.yazu.tottori.jp/1002.htm> 参照日：2019年3月18日



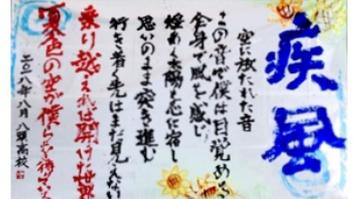
# 安部小Project

中四国ブロック代表・鳥取県  
内田 奏杜（代表）

## 溢れる『地元愛』 蘇れ！我が母校

### 【安部小Projectの概要】

設立：平成30年4月1日  
代表：内田 奏杜  
人員：15名（中3-高3）  
内容：廃校舎内清掃活動(月1回)  
『安部っ子夏祭り』企画運営  
集落行事への参加  
鳥取県事業パネラー等の参加



### 【安部小Projectの方針】

- ・教育方針『至誠・勤労・自治・奉仕』に基づき中高生の『**地元愛**』を育む。
- ・**地域の要**である小学校を活用することで校区内交流を活発にする。
- ・中高生の「やりたい！」をやってのける場へ。その実践を夏祭りで具現化する。

### 【第1回 安部っ子夏祭り】

日時：8月12日（日）16:00-19:15  
目的：地元愛の具現化,交流の活発化  
来客：約400人  
資金：八頭町企画課補助金  
内容：各集落屋台出店  
各集落伝統芸能発表  
自作映画上映(地元愛を映像に)  
八頭高校書道パフォーマンス  
青翔開智軽音演奏  
大太鼓パフォーマンス  
教員卒業生コメント

### 【受賞歴】

- ① ボランティア・スピリット・アワード  
主催:プルデンシャル生命,ジブラルタ生命  
後援:文部科学省,日本赤十字社  
結果:**中四国ブロック賞**(全国表彰式)
- ② トットリズム活動表彰  
主催:鳥取県(トットリズム)  
結果:**最優秀賞・若者活動部門優秀賞** W受賞

#### 地域の方々の声

若者が全く組織のないところから、こんな催しをしてくれるのは非常にありがたい。来年は保育所も開所するので第2回はさらに盛り上げてほしい。

これぞ安部の宝。4ヶ月という短い準備期間でここまで創り上げたことに感動。是非、来年度以降も継続してほしい。

『地元愛』を中高生が私たちに教えてくれた。代表の述べる「モノではなく心」というのは非常に大切だと感じた。

閉校前まであった校区民運動会に代替して私たち大人も交えて盛り上げていきたい。

『地元愛』を育み地域と母校を守る

## 閉校

平成28年度に安部小学校は全校児童39名で閉校した。統廃合後はスクールバスでの登下校、校区行事が減り交流が途絶えた。また、農地は耕作放棄地が多くなり、地域の過疎化が進んでいった。

## 掃除

校庭に草が生い茂っていたため、第1期の代表と副代表で草取りを8月末に行った。校舎内も掃除がしたくなり、役場に「掃除をさせてください」とメールを送ったのがキッカケで始まった。

## 設立

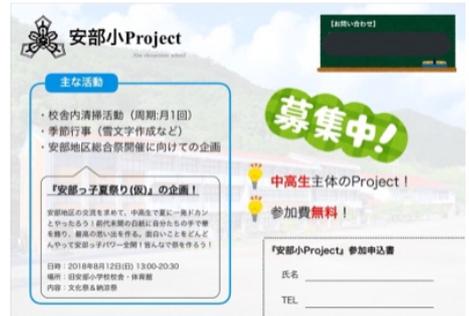
校舎内掃除に集まった人から**地域の人が集まれる夏祭りを実施したい**という意見が出た。実施にあたり卒業した中高生内でメンバーの募集をした。小規模校で皆が幼馴染であるため、すぐにメンバーが集まり、Projectを設立した。

## 準備

夏祭り実施にあたり、町の補助金を活用した。役場の方には補助金以外に運営や広報についても助言をいただき、大変お世話になった。また、保険契約や行政財産、食品営業類似許可など**学校という閉塞的な環境では学べないことを体験できた。**

## 夏祭り

『**地元愛**』をテーマに創り上げ、約400名の来場者数を記録した。課題も多く残ったが、今後も継続して続けていきたいと改めて感じた。



## 第1期代表の想い

代表である私は「中高生の時に皆んなであんなことやったな」という、**モノではなく心の**記憶としてProjectメンバーの一人一人に残ってほしいと思い取り組んでいます。観光地などの有形的なモノが少ない鳥取で、モノを求めてもさほど効果はないでしょう。しかし、心の過疎化が進行せず地域交流が絶えなければ、たとえ人口が少なからうとその町は活気に湧くと考えています。清掃活動だけでなく夏祭りを開催したのは、「ここ八頭町安部に住んでいて良かった」と、**地域の要的存在**である小学校を通して『**地元愛**』を、参加した方をはじめ私たち自身が実感することに最も意味があったと感じています。自分たちがしたいことを自分たちのできる範囲です。そして地元を見つめ直し、その作用で地域活性化を図ります。

## Projectメンバーの声

- ・部活があり参加するか悩んだけど、小学校時代の友達とまた話せるのはいいなと思って参加した。
- ・中高生のノリで始めたけど、いろんなところから協力してもらって、やり甲斐があるなと思った。
- ・あんなに綺麗な校舎だったのに、ほこりやカメムシだらけになって、人がいないとさみしいなと感じた。
- ・学校がなくなったのがさみしいから、盛り上げていきたいなと思った。
- ・勉強や部活などで忙しい毎日だったが、母校のためにと参加した。

## 【お問い合わせ先】

安部小Project 代表 内田奏杜  
TEL : 080-2906-5098(携帯)  
Mail : [abe.es.project@gmail.com](mailto:abe.es.project@gmail.com)



## 【広報・SNS】

Facebookで随時、活動紹介中！  
活動以外にも、安部校区の様子などを掲載しています。



公式Facebook

# 道普請みちぶしんが田舎から世界までを変える

～結いの精神を形に～



栃木県立栃木農業高等学校 農業土木科

臼井 幹太 岩木 響

早澤 匠カルロス 石塚 友希

## 1 はじめに

2015年9月の関東東北豪雨。栃木県山間部では統計開始以来の極値を更新し、下流域にあたる鬼怒川が決壊。氾濫によって甚大な被害が発生した。本校のある栃木市も市内中心部が水没したり、数多くの地滑りなどの土砂災害<sup>図1)</sup>が記録されている。本校は山裾に位置し、幾つかの砂防ダムが隣接しているが、土砂や沢水が越流し、校舎付近に堆積するなどの被害に見舞われた。二次被害を防ぐために、当時の農業土木科3年生が中心となり、災害発生土を速やかに除去し、その土を使って土のう製作を始めた。当初は被災した箇所の補修や学校林の整備に使用していたが、数が膨大なため、地域で有効活用できないか検討を始めたことが活動の原点である。



図1 校内でも発生した土砂災害(H27.9)。砂防ダムを越え、校舎(赤い屋根)脇まで土砂が堆積

## 2 活動(地域インフラ整備)の動機

先輩たちは、土のうについて調べるうちに、袋の強度や耐久性、あるいは土砂の性質について安全上の基準を満たせるのかという課題にぶつかり、科学的な考察で解決してみようと研究を開始した。その中で、東日本大震災の復興事業でも注目された軟弱地盤対策工事に用いられる新型土のう「D・BOX」に出会い、開発者からの技術的な支援や工学系大学より土質試験等の協力やアドバイスをいただきながら<sup>図2)</sup>、力学的・物理学的には不安定な土砂廃棄物であっても、新型土のうを使用すると構造体になり得るという結論に辿り着いた。



図2 大学・民間企業等の研究機関や行政機関と協力し、放置ため池の改修(漏水)工事に成功した

2017年には研究の成果を活かし、新型土のうを利用した身近なインフラ整備に着手し、放置ため池の漏水を抑制する工事に取り組んだ。現場の状況から重機の使用や土砂の搬入を断念し、人力での施工を試みた。結果的に汚泥でも施工可能なことや機械を使用しなくても十分な強度が得られることが判明し、誰でもどこでもできる技術開発に成功した。

そして一昨年度、身近な林道である環境省「関東ふれあいの道」の被災箇所の修復工事を開始した。およそ90t(中型トラック10台分)相当の土砂を再利用し、同時に、岩石や実習で発生する廃コンクリート・地域で廃棄物となっている大谷石なども破碎して、土のう内に使用する取り組みも開始した。防災・減災に関する助成を受けていたこともあり、実施するに当たってはなるべく地域の方々を巻き込むよう先生からも指導を受け、当時1年生だった私達が中心となって「ESD 活動」を計画した。

「SDGs」や「森里川海」など、世界や日本が取り組んでいる環境教育や防災・減災教育について調査し、地域インフラ整備に持続可能性の視点を加え、特に「パートナーシップ」を意識したワークショップや協働活動・普及啓発を目指した。

## 3 道普請に関する活動内容

### I. 防災と減災に関するワークショップ<sup>図3)</sup>

2018年10月には、小中学生に地域環境や土砂災害の現状を見て・知って・考えてもらうワークショップを開催。ゴマと塩を使った土砂災害の実験や実際の災害箇所を見学。二次被害を防ぐための資源循環についても講義した。身近で起こる自然災害に子供たちは驚き、ミニテラポット作りや土のう製作を通して資源循環の大切さに気がついてくれたようだ。



図3 防災と減災に関するワークショップ

## Ⅱ. 林道整備に関するワークショップ<sup>図4)</sup>

栃木市役所や栃木県農政部などの行政機関並びに地域住民向けに行ったワークショップでは、高校生が講師となって実際の林道整備までを体験をしていただいた。高校生でもできるインフラ整備とはどのような技術なのかと、10名以上の行政職員の方の参加があった。こちら土砂災害の原理を学ぶ実験と災害箇所の視察を行い、その後実際に新型土のうの施工を行った。事後アンケートからは、「一市民でも地域の道づくりや災害復旧に携われた」という達成感や「税金投資だけがインフラ整備ではない」など、地域づくりの在り方について様々なご意見をいただいた。



図4 林道整備に関するワークショップ

## Ⅲ. 環境イベントや学会等での研究発表

環境イベントでは大勢の聴衆者に新型土のうの可能性や、誰にでもできるインフラ整備を訴えるなど、たくさんの市民を巻き込みながら、普及・啓発に努めた。自分たちの取り組みをPRしながらも、専門家からの助言も広く求めるために、廃棄物資源循環学会<sup>図5)</sup>での発表にも挑戦。高校生による初めての発表にして上位5組に相当する優秀賞を受賞し、研究者からも多くのアドバイスもいただくことができた。県建設業協会や農業振興事務所にも協力依頼し、それぞれの立場からの意見を頂戴している<sup>図6)</sup>。東京農業大学地域創生学科へのヒアリングでは、「伝統的農村風景である棚田改修に使用できるのではないかと」「産業廃棄物であるクリンカアッシュ(石炭灰)を混ぜると周囲の土壌や水質浄化の効果が期待できる」と助言をいただき研究の幅が広がっている。

ユース環境活動報告会や高校生自然環境サミットでは、全国の環境学習や地域貢献活動に注力している高校生と交流・意見交換をしながら、幅広い視点を加えたさらなるブラッシュアップに努めてきた。

## Ⅳ. 道普請に関するワークショップ

前回の林道整備に関するワークショップに参加された地域のお年寄りから、「道普請」という言葉を教えていただいた。「一昔前は、地域住民総出で簡易インフラを維持管理していたもの。今では、木が一本倒れただけで役所に電話すればいいと思っている人が多い。自分達の生活道路くらい、できる範囲で手を加えていかなければ地域は衰退してしまう」との内容で、「道普請」とは職業や立場など関係ない根源的な相互扶助であり、地域によっては「結い」とも言われるそうだ。その言葉に深い感銘を受けた私達の代が企画・実施した最初のESD活動として、「道普請ウォーク in 太平山」というワークショップを5月4日に開催した。昨年度末までに林道整備が概ね完成したこともあり、様々な人が関わって修復できた場所に新しい物語性を吹き込むことで、「結い」の場として持続可能な空間にしていくことがねらいた。



図5 平成30年度廃棄物資源循環学会にて高校生初の発表にして優秀賞を受賞



図6 大学や民間企業等も巻き込んで、工学・農学・社会学など幅広い意見を求めた



図7 道普請に関するワークショップ  
新型土のうによる林道整備も実施した

大勢の地域住民に参加していただき、土砂廃棄物や間伐材など身近な素材を使って、高校生主導の下で市民中心となって整備してきた場所であることを伝えた<sup>図7)</sup>。一つの自然災害で、地域の環境や生態系はいつも簡単に変わり、手を加えなければ次の災害を引き起こすこと。そして何より、田舎や集落に存在する「地域コミュニティ」こそが持続可能な開発や地域づくりを行うためのカギだということを、私達なりに伝えることができた。

今回のワークショップの目玉は、整備された林道を使って山頂にある神社までのハイキングと間伐材や小枝など、現地調達材だけで作る木の人形・通称“木人”作りだ<sup>図8)</sup>。身近な自然環境を見て・知って・感じた後で、そこに参加者一人ひとりの思いを木人に託して、林道へと設置する。林道に「作る人と使う人」双方が結ばれた様々なストーリーが宿った瞬間だと感じる事ができた。

2018年から今現在までの ESD 活動によって、「高校生や市民が一体となって人力によるインフラ整備ができた」「その過程に於いて、土のう工法の持続可能性を検証し、専門家より高い評価を得ることができた」「実施にあたっては 1000 人以上を巻き込んだ<sup>図9)</sup> ESD 活動などを展開し、道普請による地域インフラ整備の普及・啓発にも取り組んだ」「地域協働活動に関わった方々の意識変化についてデータ分析<sup>図10)</sup>ができた」以上の成果を得ることが出来たと考えている。

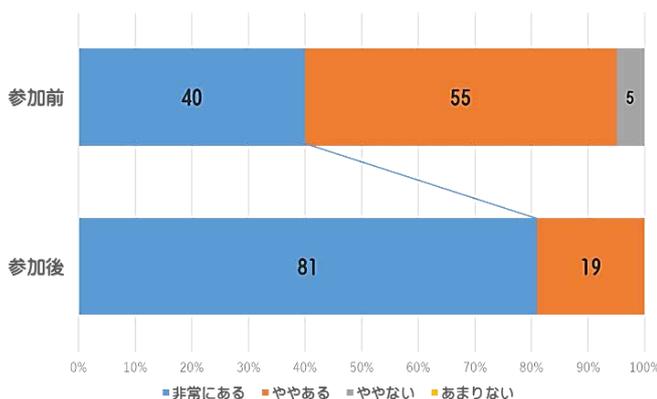


図8 整備された林道に様々なストーリーが吹き込まれていく

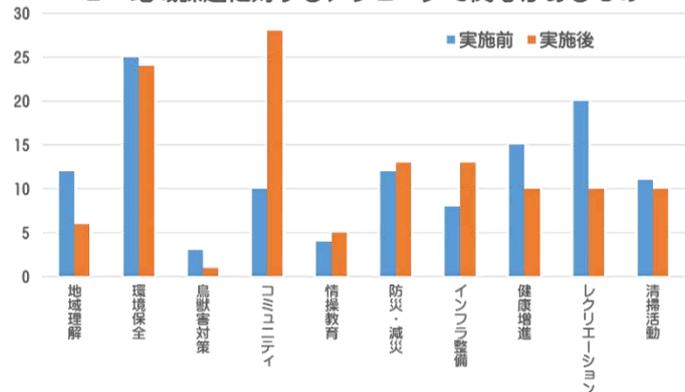
	行政機関	教育機関	民間企業 NPO・NGO・法人	地域住民 市民・その他
技術開発 技術評価	栃本市役所 栃木県農政部 栃木県国土整備部 県南環境森林事務所	宇都宮大学 東京農業大学 足利大学 日本大学 鳥取環境大学 名城大学	メトリー研究所 廃棄物資源循環学会 栃木県建設業協会 栃木県環境技術協会 里山エネルギー エコロジーオンライン 自然史データバンクアニマnet 道普請人	平井町自治会 地域の皆様 アグネスチャン氏
助成・協力 広報活動	環境省 栃本市役所 栃木県農政部 県南環境森林事務所 栃木県教育委員会	日本大学 高校生自然環境サミット	中谷医工計測技術振興財団 日本ユネスコ協会連盟 ボランティア・リットワート事務局 環境再生保全機構 下野新聞社 とちぎケーブルTV とちぎ市民活動推進センター	FMくらら エコライフinとちぎ参加者
活動参加 聴衆者	環境省 栃本市役所 栃木県農政部 県南環境森林事務所	地域の小中学校 各種イベントや発表会参加者	メトリー研究所 自然史データバンクアニマnet とちぎ市民活動推進センター	平井町自治会 地域の皆様 各種イベントや発表会参加者

図9 この活動を通じて、巻き込んだり繋がった方々

### 1. 地域における協働活動に関心はありますか。



### 2 地域課題に対するアプローチに関心があるもの



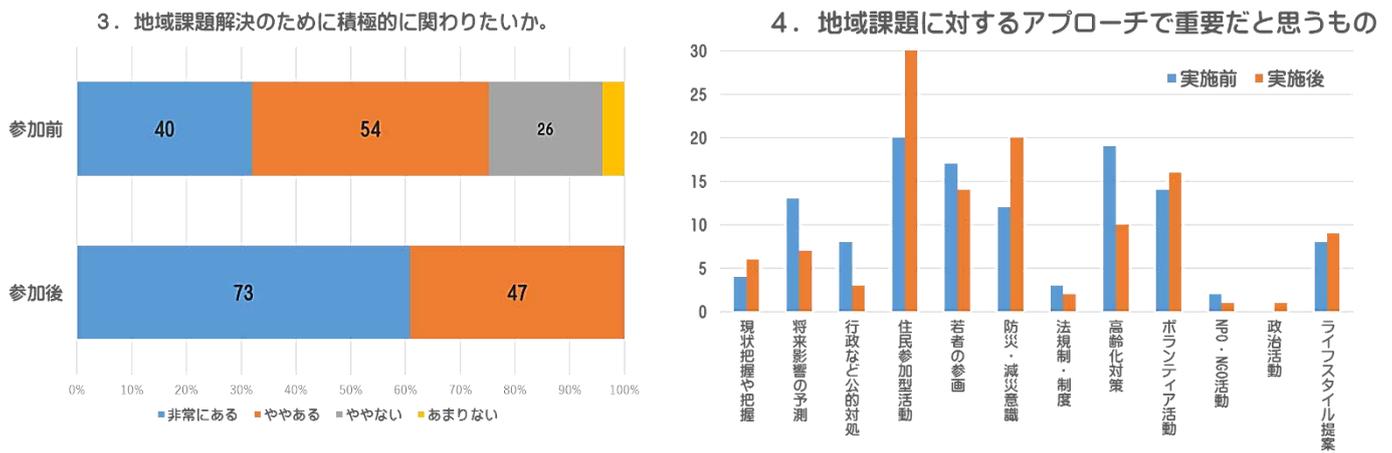


図10 協働活動参加者の意識調査〈一部〉(H28～H31:120名分)

#### 4. 提言と今後の課題

人力施工や廃材を素材に変える取り組みなどは、道普請が今でも重要な地域づくりの手段である中山間地域などの「田舎」で普及ができないかと考え、関連機関と計画を進めている。さらには、田舎以上に不便であろう電力や資源に恵まれない発展途上国での普及も見据えた取り組みも進捗している<sup>図11</sup>。これまでも技術支援を仰いできたNPOエコロジーオンラインと里山エネルギー株式会社が、これまでマダガスカルでの学校建設・集落整備に取り組んでいた経緯もあり、私達の活動(道普請の仕組みそのもの)を支援として役立てられないか打ち合わせを重ねている。現地は電気や化石燃料普及率が30%に満たないことから、クリーンエネルギーと融合した転圧機械の開発にも着手したい。



図11 NPOやアグネスチャン氏との出会いによって、世界にも目を向けた活動を始めている

新型土のうを開発したメトリー研究所の野本さんは JICA(国際協力機構)と共に、現在ミャンマーでの施工プロジェクトを進行中で、私たちの人力施工のデータも参考にさせていただいている。環境イベントでお会いしたアグネスチャン氏からは「現代の生活では必要ない昔ながらの知恵や技術こそ、地方や世界のどこかで必要とされているもの。ぜひ、広い視野で活動してください」と背中を後押ししていただいた。

多くの人との出会いから、新しい時代の道普請は、いかに多様な主体(ステークホルダー)を巻き込みながら、「誰でも」「どこでも」できることを模索しながらアクションしていくのが重要だと知ることが出来た。同時に、「よそ者・若者・バカ者」である高校生こそが、田舎や中山間地域で主体となって活動することで、伝統的文化的の継承や地域づくりに大きな夢や希望を与えられるのだと教えていただき、自覚することができた。

田植えや稲刈り、集落総出の草刈り。ほんのちょっと昔までは何気なくあった、地域の中のお互い様。助けられたり、助けたり。支えられたり、支えたり…。持続可能な社会のために、私達は世界を見据えながらも地域の中で「結いの精神」を形にし、多くの人々の居場所づくりや環境保全に貢献していきたい。

# 道普請が田舎から世界までを変える 栃木県立栃木農業高等学校農業土木科



田舎カ甲子園2019

## TOCHIBUSHIN 「橋普請プロジェクト」

2015年9月の関東東北豪雨災害。本校も甚大な被害を受け、二次災害を防ぐと先陣たちが研究を始めた「土砂廃棄物による循環型施工」。翌年には、大学や民間などの研究機関と連携しながら、特殊な土のうを利用した放置ため池の改修工事に着手しました。その後、本校に隣接する環境省「関東ふれあいの道」内の整備や自然災害に関するワークショップの開催など、多くの方々の巻き込みながら「環境保全」「防災減災」「鳥獣対策」など、その都度見つかる様々な地域課題と向き合ってきました。

「身近な災害を今後どのように防いでいくのか」「循環型施工による環境影響が起ころうのか」「整備した林道を10年、100年先まで維持するにはどうしたらよいか。」地域課題解決に取り組む中で、「持続可能性」について考える機会が増えました。

そして、そのカギとなるのがSDGsの17番目「パートナーシップ・人と人との繋がり」ではないかと考え、市民協働による地域づくりを目指す目標を立てました。

かつて田舎や集落に当たり前に根付いていた「市民普請」という伝統文化があります。身近な道路整備を行う「道普請」を始め、農作業や伝統行事など、セルフビルドによるまちづくりです。私達高校生が主体となって地元・栃木市の社会課題と向き合うネットワーク「橋普請」を立ち上げ、「誰にでも・どこでも」できる持続可能な地域づくりを実践します。

### （橋普請プロジェクトの活動概要）

- 1 パートナーシップの構築  
様々な主体とのネットワークを作り、地域ESDの拠点を目指す。
- 2 地域住民を巻き込む活動の展開  
定期的に林道整備や協働活動（ワークショップ）を行う。
- 3 意識調査などによる定量的な評価  
関係機関へと還元していきます。



## 「誰にでも・どこでも」 できるインフラ整備

校舎のすぐ脇で発生した土砂災害。堆積した土砂を取り除かなくては、二次災害の恐れがあるため、自分たちの力で土砂の運搬と分別・土のう作りを開始しました。これまでに90tを超える土砂を再利用しており、通常の土木工事で行えば数百万規模の工事になると試算も…。

再利用の方法は、主に新型土のう「D-BOX®」を利用した道づくりです。2016年より、開発した研究者の方と、放置ため池の漏水対策の試験施工や六価クロムなどの環境影響について研究を重ねてきました。

重機が入れない林道や棚田でも施工ができるよう、現地で発生する間伐材を使った型枠や人での転圧方法を確立し、今ではコンクリート並みの強度まで仕上げることで、**「施工性」「経済性」「環境性」に優れた工法**であるとして、廃棄物資源循環学会での発表でも高い評価をいただくことができました。



## 多様な主体を「巻き込んで」つながっていく

これまでも行政や大学・民間企業等、様々な組織と関わりながら活動を行ってきましたが、その限りの繋がりに終わってしまっていました。分化した組織、コミュニティの垣根を越えて一同に集まり、互いに語りあう中で地域を作っていく場の必要性を感じていたところ、ユネスコスクール活動の一環で「ホールシステムアプローチ」を知りました。

農業土木科と環境デザイン科の高校生が主体となり、地域づくりや環境教育を実践。「現状・地域課題の共有」、「ビジョンの作成」、「問題解決方法の探索」、「活動シナリオ制作」などを地域へ出て進めていきます。その名も「橋普請」。この仕組みで、栃木市民推進活動「とちぎ夢フォーレ」助成を受けることになり、栃木県高校では初めてとなる「ユネスコスクール」認証を頂く予定となっており、今後は地域ESDの拠点を目指します。

### 今までの活動



### 橋普請として目指す形



### 発信されながら 発信する側に

環境保全やSDGs・地域づくりに関するイベントやボランティアに積極的に参加し、私たちの取り組みを多くの人に伝えるよう心がけています。そこでの出会いをもとに、また新しい主体とつながっていくことも多く、最近では様々な媒体で紹介していただけるようにもなりました。



アクネスチャンさんとの出会いも

## 「蝶の羽ばたきから、大きな風を」 Think Globally, Act Locally

私たちは「バタフライエフェクト」という言葉を、活動方針にしています。たった1度の蝶の羽ばたきが、めぐり巡って、様々な要因と結び合って、ハリケーンのような大きな風を成長していくと考えた科学者がいたらしい、世界はおろか地域全体で見てもまだまだちっぽけな取り組みでも、いつかは社会を変えるイノベーションになりうるのではないかと感じました。

新型土のうを開発したメトリー研究所の野本さんはJICA（国際協力機構）と共に、現在ミャンマーでの施工プロジェクトを進行中で、私たちの人力施工のデータも参考してくださっています。私たちも、地域のNPO「エコロジーオンライン」のプロジェクト「チームマダガスカル」に参加し、現地の学校建設や通学路の整備に協力・参加しています。発展途上国など、電力も化石燃料もない地域を想定し、人力による土のう工法をさらに普及させるために、クリーンエネルギーとの融合を実現し、環境に優しい転圧機材の開発にも着手したい考えです。また、道普請そのものの仕組みで支援ができないかと新たな計画を立てています。

田舎や福刈り、集落縮出の草刈り、ほんのちよつと昔までは何気なくあった、地域の中のお互い様。助けられたり、助けたり。支えられたり、支えたり。持続可能な社会のために、「橋普請」は世界を見据えながらも地域の中で「結いの精神」を形にし、多くの人の居場所づくりや環境保全に貢献していきたいと思えます。



栃木県立栃木農業高等学校は、明治40年に下都賀郡立栃木農学校として創立され、今年度は113周年に当たります。これまで、農業に関する専門学科を5学科設置していますが、平成31年度からは学科がリニューアルしました。農業や環境に関するユニークな4つの学科での学習や、特別活動・学科の学習の一環としての地域貢献を通して、将来に役立つ学習・体験をします。環境系学科である農業土木科では、土・測量など地域を創造する工学をはじめ、地域資源活用・林産物利用なども学んでいます。環境系の新学科にあたる環境デザイン科では、フィールドワークを中心に地域の自然や産業を理解し、それを取り巻く環境の維持・改善や持続可能な地域づくりの手法を学んでいます。

## YADからSADへ～地元再発見！新しい挑戦に向けて～

栃木県立矢板東高等学校 リベラルアーツ同好会

## (1) はじめに

2019年6月1日、2020年に行われる東京オリンピックに関連した全国を巡る聖火リレーの栃木県ルート概要が示された。

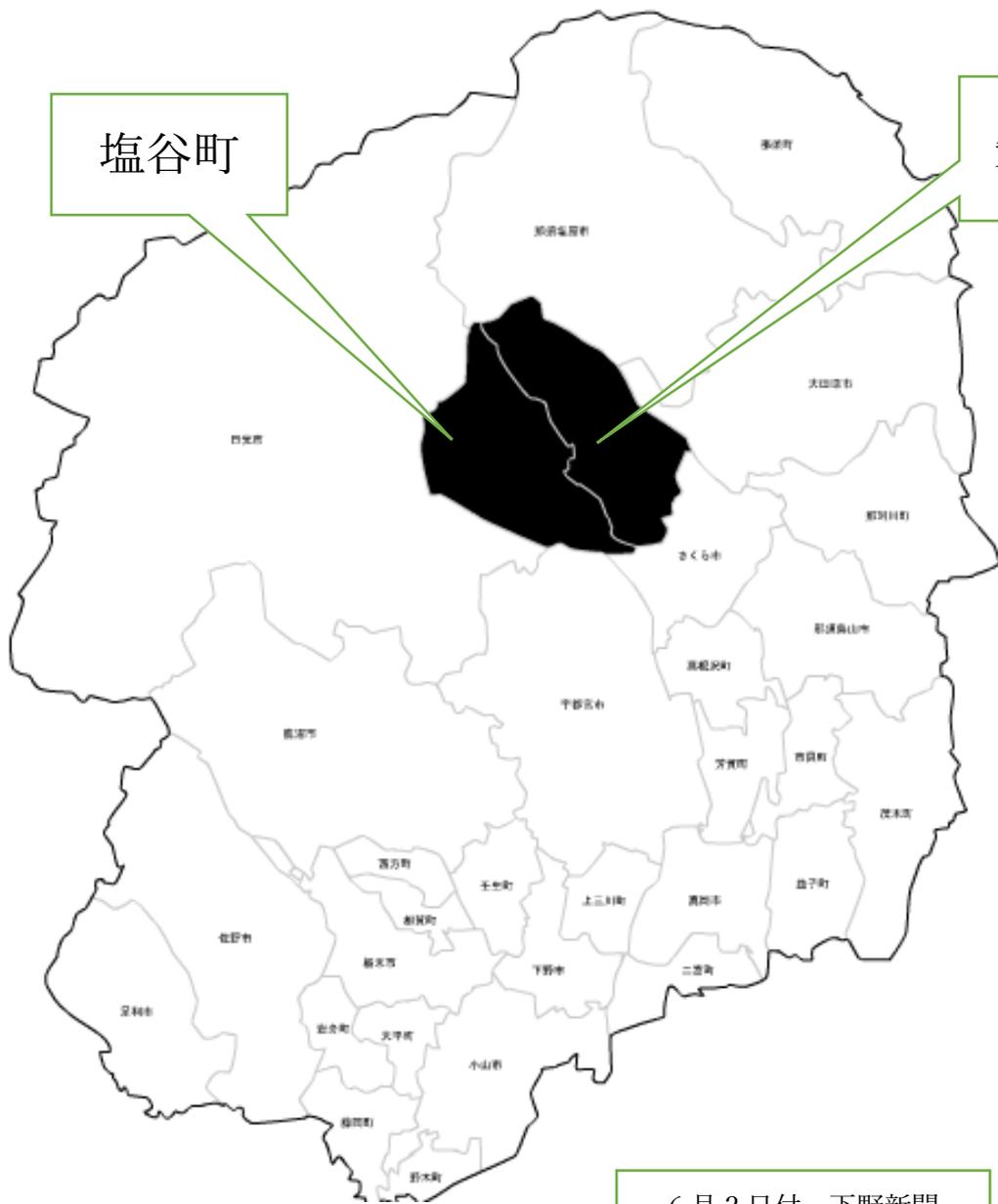
私たちが住む栃木県には市町村が25あり、そのうち16市町を通過するルートが示されたが、私たちが通学している矢板市や隣接する塩谷町、大田原市はルートから外れた。地方紙『下野新聞』の記事によれば、ルートの確定については、日光の二社一寺に代表される世界遺産や那須烏山市や鹿沼市の誇るユネスコ無形文化遺産などの魅力を海外にアピールすることを重視したことや、見学のしやすさや安全性を含めて総合評価した結果とのことだが、裏を返せば、私たちの市町には内外に発信できるだけの魅力が薄いということである。

栃木県は毎年行われている都道府県魅力度ランキングにおいて、毎年最下位争いをしており、2018年はかろうじてワースト3位を免れ、43位であった。そのような県の中でも際立って何もないと位置づけられているのはなぜだろうか。

昨年度、JRと地域が協働で取り組む国内最大規模の大型観光キャンペーンであるデステイネーションキャンペーンが、2018年4月1日から6月30日まで行われた。その結果として、観光をきっかけとした地域間の連携強化や地域活性化の機運の高まり、276のデステイネーションキャンペーン特別企画の創出があったそうである。また観光客入込数は目標を達成し、宿泊数は目標に達しなかったものの、初の2年連続200万人を超えたとされている。なかには、ダムカードやマンホールカードに代表されるインフラカードの配布や、地域の歴史遺産や自然遺産、地元特産品を生かしたルートマップの作成など各地域が趣向を凝らした内容でもてなした。それらに矢板市や塩谷町も持ち前の自然豊かな環境を生かし参加した。しかし、デステイネーションキャンペーンの取組は一過性のものであり、宿泊数を伸ばすことができていないという課題を浮き彫りにした。首都圏から近いということが結果的に宿泊数の増加にはマイナスの要素となっている現状はいなめない。

一方で、大田原市では松尾芭蕉ゆかりの地である雲岩寺を取り上げ、女優の吉永小百合さんがCMで出演したことも話題となり、大いに賑わったようである。またNHK大河ドラマ「いだてん」にもゆかりのある土地ということで、観光客も比較的多い。

そのため、今回は矢板市と塩谷町を取り上げ、それぞれの現状と課題を把握し、内発的発展力を提案したい。



6月2日付 下野新聞



## (2) 矢板市の現状・課題

栃木県でも県北に位置する矢板市は、県庁所在地である宇都宮から電車で30分ほど北に向かった場所に位置している。交通の利便性が高く、高速道路の矢板インターの活用や国道4号線が通っていることによって、市の産業が発達した経緯がある。特に市の発展に寄与したのはシャープ矢板工場であった。シャープ矢板工場は、「世界の矢板モデル」として液晶テレビの生産に力をいれるはずだったが、最終的にはその座は三重県亀山市に決まり、「世界の矢板モデル」は幻となった。それでも亀山市同様、企業誘致で市が発展を遂げ、雇用の増加や人口の増加につながった過去がある。しかし、シャープの苦境が市を襲い、雇用の減少や人口の減少が浮き彫りとなった現在は、大企業誘致で発展してきただけにそれが失われたことによって市から一気に活気がなくなった。また、高速道路や国道4号線の利便性の高さは、同時に那須方面や宇都宮面へのヒト・モノ・カネの移動を促した。特に宇都宮郊外につくられたショッピングモールや、那須へのアウトレットモールの進出は、多くの若者の魅力を引きつけた。そのような流れのために、観光客は矢板市・塩谷町・大田原市を通り過ぎてしまうのである。さらに矢板はJRが通っているが、塩谷町や大田原市には駅が存在しない。仮に遠方からの観光客がいたとしても、宇都宮、那須塩原市は新幹線が停車するが、矢板には停車しない。このような状況で、さらに町が発展していくにはどうすればよいのか。この状況を打破する解決策を以下に提案する。



SHARP創業者の早川氏の名字が、矢板市では町名となっている。

かつての面影はなく、広大な敷地は少し荒れてしまっている。企業誘致で栄えた矢板市は次の市の在り方を模索している状態が続いている。

(3) 解決策・矢板のもつ内発的な力①～鉱泉を利用した観光業～

作成者 星野桃子

企業誘致型で発展してきた矢板市だが、シャープの撤退を受けて新しい道を模索しなければいけない。そこで、鉱泉を拠点にしたエコツーリズムやグリーンツーリズムで県内外からの観光客を集めたい。



道が険しく、  
対向車とす  
れ違うこと  
は出来ない。



4WDの自動車以外は  
通行できない。



たどり着いた秘境の地



1866年創業の由来が  
示されている。

上記写真で示したのは、矢板市の北部に位置する赤滝鉱泉である。矢板市北部には鉱泉が現在3カ所存在するが、その中で、最も山深いところに存在するのが赤滝鉱泉である。4WD以外の自動車は途中で駐車をして歩いて行かなければいけないことや、昔ながらの湯治場であるため、自然を堪能できることは田舎のもつ内発的な力になり得る。また薪でわかしている鉱泉のため、都会では味わえない雰囲気が楽しめるのは最大のメリットである。そのため、「ないものはない」をよい方向にとらえ、この自然環境を生かしたグリーンツーリズムやエコツーリズムを企画したい。釣りや昆虫採集をはじめ、昔ながらの生活が味わえるものが提供できるし、スマートフォンから離れた一日を送ることが出来ることは、かけがえのない体験だと思っている。「ないものはない」を十分堪能できるだけの自然がここにはある。

しかし、道の駅矢板からは少し距離が有り、電車で来る場合もバスは期待できないため、主たる交通手段を考えたい。道の駅矢板から北西に向かって日光に流れるルートよりも、北に向かって進むルートを推奨していく必要があり、そのルートを整備することで外部からの客を那須や日光に逃がさないようにしていくべきである。そのため、鉱泉の近くに立地する山の駅たかはらともタイアップし、自然を活用した観光業を行う必要があると感じる。

この鉱泉を活用した提案に、追い風となるデータが6月5日付けの下野新聞に記載されていた。

第3種郵便物認可

日帰り客78%  
「憂鬱少なく」

日帰りや1泊2日の温泉旅行でも心身の健康増進に効果あり。環境省が多忙な現代のライフスタイルに合わせた温泉の楽しみ方を「新・湯治」として提唱している。東京都

内々で4日に開いた会合で、日帰り客の78・6%が「憂鬱な気分が少なくなった」と答えたとのアンケート結果も公表した。

このほか「肌の調子が良くなった」との効果は日帰り客

**温泉 短期滞在にも効果**  
**環境省、「新・湯治」提唱**

の79・3%、1泊2日では80・3%が感じていた。温泉地を頻りに訪れる人ほど滞在後に「より健康になった」と感じる割合が多くなり、年1回の人74・6%だったのに対し、年6回以上だと83・6%になった。

分析した温泉医科学研究所の早坂信哉所長は「湯治は短期間でも健康に良い。長期休暇が取れなくても、気軽に何度も温泉地を訪れるのは効果的だ」と指摘している。

調査は昨年7月〜今年2月に全国20カ所の温泉地などで実施し、20歳以上の計3844人から回答を得た。

記事によれば、温泉医科学研究所の早坂信哉氏によれば、「気軽に何度も温泉地を訪れるのは効果的だ」と述べており、首都圏から近い栃木県の温泉を目的とした観光が増加する流れはできそうだ。そのため、健康志向が強まっている現代において、この環境省の掲げる「新・湯治」提唱は栃木県の課題である宿泊客増加につながるものであると考える。その中で、多様な自然体験を織り込んだ、グリーンツーリズムやエコツーリズムをいち早く、立ち上げていくべきである。

#### (4) 解決策・矢板のもつ内発的な力②～YADの活動を拠点に～

作成者 YAD 代表 椎貝菜月 副代表 石山琴音 メンバー 相馬優吾

私たちは平成30年に YAITA ALL DIRECTIONS(以下、YAD と略す)という団体が設立を立ち上げた。きっかけは、矢板市が主催の「矢板武塾」という町づくりを行う集まりに参加したことである。この YAD の設立目的は以下の通りである。

目的：高校生が主体的に地域と関わり合いながら、矢板市の活性化を目指すとともに、その活動を通して「自分の居場所」を創りだすことを目的としている。ここでいう「居場所」とは、物質的な空間だけでなく、「心が安まる」「存在意義を感じられる」といった意味を含む。また活動そのものが、私たちにとっての居場所となることを目指す。

#### 活動内容

##### ① 花火大会に出店

目的：YAD の P R、メンバーの募集を含め、祭りに積極的に参加をして盛り上げる。

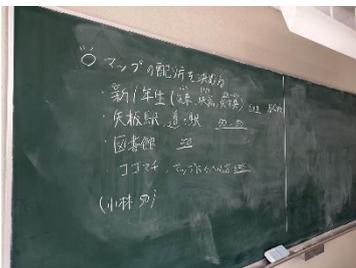


活動の P R と販売

##### ② 高校生向けのまち歩きマップ作り

目的：マップ作りを通して、矢板についてもっとよく知り、地域の方と交流をする。

高校生に地元に対してもっと知ってもらうための、手段として作成する。



マップをつくるための会議を実施



試行錯誤の末、完成したマップ

### ③ 地域おこし協力隊と協力した空き家の改修工事

目的：空き家の増加に歯止めをかけると共に、リニューアルして価値を見いだす。



きれいに塗り直して、リニューアル。  
おしゃれな空間に様変わり。



YAD の基本方針

YAD では、自分たちで企画した事業を実施する。

企画力、計画力、行動力、思考力を養うよい機会と捉え、より主体的に活動することで、地域と向き合うことができるようにする。

YAD のこれから

様々な活動を通して、地域とのつながりを深め、より高校生が参画していくことで、町づくりに力をいれていく。直近では「高校生カフェ」をつくることを目指している。

学校の枠を越えて結成した団体であるため、多様な意見がでてくることが醍醐味である。そしてこの活動が市町村の枠を越えた交流になっても面白いと考えている。

ラジオ、新聞を始め、様々なメディアを活用し、矢板市の魅力を発信することに成功している。



## 【活動の様子】

## ①7月 設立総会



## ②8～10月

10月13日（土）の花火大会に合わせ、団体PRを目的としたメンバーによる出店に向けた準備を進めた。当日は、タピオカドリンク、コーンスープの販売およびチラシ配布による団体PRを行った。



## ③11～3月

まちあるきマップ第1弾は「駅近グルメ」とのテーマを設定し、メンバーが選んだ市内店舗への取材やマップの作成を行った。



## ④2月・3月

地域おこし協力隊が運営する組織「矢板ふるさと支援センターTAKIBI」のワークショップに参加。また、「TAKIBI」の拠点を整備中である矢板駅西側にある建物内に「高校生カフェ」の整備を開始。

次年度の活動予定なども検討し始めた。



## ⑤その他

SNSを活用した団体活動の発信に加え、新聞記事、YOUTUBE、ラジオなどを通じ、団体PRを行った。



## (5) 塩谷町の現状・課題

作成者 安達奏音

栃木県の北部、矢板 I C から約 5 km という場所に塩谷町は位置している。塩谷は尚仁沢湧水をはじめとする豊かな自然や広大な田園の広がる緑あふれる町だが、今その町から人が消えつつある。(平成 21 年度 6 月から 2000 人の人口減少) 現在の町の人口は約 12000 人であり、栃木県でも最低水準である。しかし一方で、高齢人口は増え続けており、高齢人口は平成 29 年の統計では 35.3% となっている。

この人口減少の原因の 1 つと考えられるのが、町内の交通の利便性の低さだ。現在塩谷町に駅はなく、唯一の交通機関であるバスの運行も芳しくない。実際に町営バスは平成 14 年に廃止されており、現在は矢板市と塩谷町を結ぶしおや交通のバスが、1 日往復 5 便となっている。また関東バスが塩谷町と宇都宮市を結んでおり、1 日 18 便となっているため、通学という観点でも高校生が県の中心部に流れやすい状況にある。

町民のほとんどが自動車を所有し、自動車がなくては生活が出来ないといった状態になっている。更に、この交通の利便性の低さは町内への影響だけでなく、町外から来る人にも観光を目的として訪れることに影響を及ぼしている。このような要因から、塩谷町が内外の人口の獲得を妨げていることは間違いないだろう。

また、町内には高校がなく、事業所も他に比べると少ないため、人が外から入ってこないという問題もある。平成 26 年度の総務省経済センサスによれば、宇都宮市が 22875 事業所に対して、塩谷町は 495 事業所しかない。

さらにもっともこの町を襲っている問題として、放射性物質の最終処分場の候補地となっていることである。町をあげて反対運動する理由は、自然環境の豊かさをウリにしているためである。豊かな自然が汚染された場合、この町の存続にかかわり、その問題は隣接する矢板市や日光市も及ぶものと考えられる。



様々な問題を抱えている塩谷町には、人がとどまらない。この状況で塩谷町に人をとどめるにはどのような策を講じる必要があるか。

## (6) 解決策・塩谷のもつ内発的な力～廃校再生計画（大衆文化祭の開催）～

今まで、尚仁沢湧水などの観光資源で発展を図ろうとしてきた塩谷町だが、人口の流出を防ぎ、町の内外からより発展していくためには新しい観光資源を開発していく必要がある。そこで、塩谷町ならではの大衆演劇などの文化と広い土地を利用したイベントを新たな観光資源として提案したい。

現在塩谷町には、人口減少によって廃校となった学校がいくつか存在する。校舎が現存している6校はみな自然に囲まれた田舎ならではの学校である。そのうちの1校である旧熊ノ木小学校は現在「星ふる学校くまの木」と名を改め、歴史的な木造の校舎を利用した宿泊施設として生まれ変わりを果たしている。小学校ならではの体育館や校庭を利用した活動はもちろん、自然に囲まれた場所だからこそ出来る天体観測を行うことが出来るのがこの施設の魅力だ。テレビなどのメディアにも何度か取り上げられており、塩谷町の名を広めるのに貢献している。

そこで提案したいのが、廃校を利用したイベントを町で企画するということだ。自然溢れる学校を利用するとなれば、珍しさもあり多くの集客が見込めると考える。そして塩谷町には船生かぶき村という大衆演劇の発信地が存在する。これは塩谷町ならではの独自の文化であり、この廃校を利用する計画に組み込むことで、より一層の集客を見込める。自動車での観光客用に道の駅を駐車場とし、そこからピストン輸送も可能とすれば、多くの集客も見込める。以下に、具体的な企画を示す。

### ・廃校劇場

廃校の体育館などを改築して小劇場化、大衆演劇の歌舞伎をはじめとする文化発信の地にする。「学校での観劇」という体験は珍しいため、目を引くと考えられる。

歌舞伎だけでなく、外部の劇団なども誘致したイベントの開催などでより一層の経済効果を見込む。

### ・屋外映画館

現在流行している屋外映画館を塩谷町の自然の中で、かつ廃校で行う。広い校庭のある田舎であり、街灯が少ないからこそ届けられる体験が得られる。



塩谷町湧水マップで  
中心地を拡大した図



船生かぶき村

## (7) 道の駅の果たしている役割

矢板市、塩谷町にはそれぞれ道の駅が1か所ある。この道の駅を生かした町作りを考えたいが、課題が多い。それぞれの道の駅の特徴は次の報告書とおりである。

「道の駅矢板」 調査報告 相馬優吾、増子晃希

5/19 実施日

### 1 施設

直売所：矢板産の肉、野菜、果物、工芸品や酒、米、花、調味料などが売っている。

りんごを使った商品は棚1列以上置かれていた。

りんごを加工した商品を中心としたいわゆる矢板ブランドのものが多く。

地産地消を目的に設置され、今ではJAしおのやのものを置いている。

食堂：そば、うどん、カレーなど普通の食堂である。矢板のりんごを使ったソフトクリームも売っている。

駐車場：ややせまいが、よく整備されていた。

エコハウス：道の駅より1年前に完成。環境省より補助をもらって作られた。

栃木県産の木材、石材、廃ガラス、和紙を使っている。

エコハウスは全国で20カ所あるが、道の駅と接しているのは矢板のみである。

### 2 周辺の状況：西側は田んぼや畑。東側は市役所、図書館、文化会館などがある。

駐車場に接している道路は北へ行くと矢板インターがある。南側は那須まで通っている。車の通りは多い。

### 3 気付いたこと：昼頃に訪れたが、駐車場はほぼ埋まっていた。直売所も人が多かった。

自転車やバイクは少なかった。

残念ながら、中高生の姿は見られなかった。



エコモデルハウスの説明

「道の駅湧水の郷しおや」調査報告 安達奏音

5/19 実施

塩谷町船生に存在する「道の駅湧水の郷しおや」は平成 24 年に作られた県内 20 番目の道の駅である。塩谷町の活性化や地域交流の場として利用されている。

## 1 施設

道の駅は大きく分けると交流館・直売所・食堂・その他の軽食店に分けられる。

- ・交流館：道の駅の管理事務局をはじめ、町の資料やイベント情報などが飾られているスペース。多目的ホールも併設してあり、ちょっと小さめの体育館くらいの大きさはある。置いてあるものとしては、尚仁沢のPRや船村徹の資料、町の手芸会の作品などである。ここでは、謎のスタンプも押せる。
- ・直売所：他の道の駅などに比べると小さめの直売所で、野菜が中心となっている。工芸品などが一部売られていたりするが、大々的に置かれてあるのは日光や鬼怒川のものが目立つ。
- ・食堂：直売所からそのまま入れる食堂である。そばやカレーなどオーソドックスな道の駅といったラインナップである。
- ・軽食屋：食堂とは別に存在するいくつかの店がある。ラーメン屋やスイーツ、あゆの塩焼きなんか売っていた。(あゆラーメンもあった) 割とかき氷を食べている人も多かった。

他にも露店のような形で手作りのものを販売している方がいた。革製品やデニムを加工したバック、婦人服などフリーマーケットに近い感じだった。

建物の後ろには広々とした野原が広がっていて、サッカーゴールなどがあるところから見るに、地元のひとにとってのフリースペースといった感じなのかもしれない。

## 2 周辺の様子

自動車の通りは少なめ。周りは田んぼだらけで向かいにはJA、向うには山がそびえる。近くに町営の住宅地があるものの、スーパーマーケットやコンビニエンスストアが数軒あるのみである。

## 3 見受けられた特徴

観光客に勧めているという点は尚仁沢と演歌界の有名人、船村徹の2つである。

- ・施設内の交流館では、尚仁沢関連の展示や尚仁沢湧水の自動販売機がある。
- ・自然豊かな印象を抱かせる道の駅の名前は個性がある。
- ・船村徹に関しても、展示や建てられている石碑などから楽しめる要素がある。(ちなみにこの石碑は近づくと曲が流れる)

他の特産物というのは目立って見受けられず、むしろ方向性がばらばらな印象をもった。感想としては、思っていたよりも人がいるという感じであったが、大体が地元の人と見受けられ、対外的な効果というのはとても薄いように思った。



尚仁沢湧水  
の商品化



船村徹  
を讃える  
石碑



日光市の特産品を販売していることが気になる。塩谷町の個性がない。



### 道の駅のまとめ

矢板の道の駅から塩谷町の道の駅まで約 14 km であり、それぞれ地元の特産品を生かした商品を提供しているが、市内、町内からの客が主になっており、外部からの観光客の誘致にやや課題が見られる。

また塩谷町の道の駅から約 12 km 離れたところに、日光の道の駅があり、そこには、塩谷町がウリにしていた、船村徹の記念館が建てられた。記念館と石碑では、さすがに観光客は日光を選ぶ可能性が高いように思われる。

道の駅の規模も日光市の方が大きい上に、  
観光地としてのネームバリューもある



(8) まとめ~YAD から SAD への派生、連携への期待

これから地方が創生を図るには、このような「地方にしかない魅力」を生かすことが必要になってくる。都市には無い自然の魅力、広大な土地を生かした田舎ならではの体験を提供するという形で地方と都市との結びつきを強くすることが重要であり、それが地方の発展の糸口となるだろう。さらに、ここでは他の地方との差別化も課題となる。矢板市や塩谷町が周辺の観光地と一線を画すためには、今回提案したような、道の駅を起点とした町おこし、YAD のような団体の協力を仰ぐことが必要だ。そして YAD だけでなく、SAD (Shioya All Directions) のような機関を塩谷町にも設置し、若者の意見を潤沢に取り入れていく体制を整えていくということも、課題解決においてよい効果をもたらすだろう。

矢板の YAD の塩谷町バージョンは SAD となるが、「SAD でも sad(悲しい)じゃない塩谷町」として、私たち高校生が主体的に地元の課題に取り組んでいく必要がある。YAD との地域を超えた交流を起こせば、もっと地元が活気づくのではないか。

地方の人口減少や経済発展の停滞が問題となっている今、地方創生のために新しい地方の魅力の発掘、そして「なにもない」ことを生かす取り組み方法の模索が求められている。

そしてなにより、私たち若い世代も自分の住む市町村に興味をもち、世代を超えて、直面している課題に主体的に取り組んでいくことが望ましいと感じている。

作成者

(2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(7) は記載した通り、現地調査や活動を含めた担当生徒によるものである。

(1)、(8) については、現地調査や活動を含めた担当生徒を含め、栃木県立矢板東高等学校リベアルアーツ同好会メンバーを加えた合計 10 名で議論して、だしたものである。

栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	安達	奏音 (あだち かのん)	0287-45-2551
栃木県立矢板東高等学校	普通科	3年	石山	琴音 (いしやま ことね)	0287-98-2798
栃木県立矢板東高等学校	普通科	3年	椎貝	菜月 (しいがい なつき)	0287-62-7067
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	石崎	莉菜 (いしざき りな)	028-682-7220
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	坂巻	朝香 (さかまき ともか)	0287-47-1617
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	菊地	康平 (きくち こうへい)	0287-68-0204
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	佐藤	乙葉 (さとう おとは)	0287-62-8295
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	相馬	優吾 (そうま ゆうご)	0287-43-4448
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	星野	桃子 (ほしの とうこ)	0287-43-0940
栃木県立矢板東高等学校	普通科	2年	増子	晃希 (ましこ こうき)	0287-65-0675

## 2019年度 田舎力甲子園

引き出せ地域の<sup>そこから</sup>底地辛！

～幻の唐辛子復活プロジェクト～



岐阜県立岐阜農林高等学校

食品科学科 課題研究班

## 1. はじめに

皆さんのふるさとの記憶は、どのように引き継がれているだろうか。私達が通う岐阜農林高校のすぐそばには日本一の貯水量を誇る「徳山ダム」がある<sup>図1</sup>。山に囲まれた美しいダム湖で、年間を通して数多くの観光客が訪れているが、その下に「徳山村」があったことは少しずつ忘れられている。徳山村は昭和62年にダム建設に伴って廃村となり、村民も近隣自治体への移住を余儀なくされ、村での営みは全て失われたとされていた。ところが昨年、徳山村で栽培されていたとされる「徳山唐辛子」の種が偶然にも発見され、地元新聞紙面に大きく掲載された。食品科学科で学ぶ私達は、この唐辛子を普及させ、失われたふるさとの記憶を蘇らせるプロジェクトを立ち上げた。



図1. 徳山ダム（旧徳山村跡地）

## 2. 事前調査と活動目標



図3. 生産者の 羽田さん（上）  
徳山唐辛子（下）

徳山唐辛子について調査するため、本巣市役所の産業建設部を訪問した<sup>図2</sup>。現在、徳山唐辛子を栽培している方は本巣市根尾地区の能郷営農組合長をされている羽田新作さんで、徳山ダムの建設に携わっていた際に村民の方から種を受け継いでいた<sup>図3</sup>。本巣市としても徳山唐辛子を地元の特産品として売り出していきたいため、岐阜農林高校へ徳山唐辛子を使った加工品開発の依頼をいただいた。早速羽田さんから徳山唐辛子を分けていただき研究を開始した。



図2. 本巣市役所との連携

私達は、徳山村の営みを現在、そして未来へとつなげるような商品を開発したいと考え、旧徳山村村民の大牧富士夫・フサエさん夫婦を訪問した<sup>図4</sup>。大牧さんは昭和2年から廃村になる昭和62年までの約60年間を徳山村で過ごし、現在は本巣市に移住されている。ご自宅にお伺いして、当時の生活の様子や徳山村ならではの食文化について聞き書きをした。持参し

た徳山唐辛子をお見せすると、「なつかしい、これを冬に食べて身体を温めていた」というお話から始まり、四方を山に囲まれた徳山村の冬は大変厳しく、村の小学校で先生をされていた富士夫さんは冬になると村の外に住んでいる先生が学校に来られなくなるため一人で勉強を教えていたというエピソードもお聞かせいただくことができた。そんな厳しい冬を乗り越えるため、徳山村では唐辛子を使った「地獄うどん」という名物料理を皆食べていたようだ。

また、徳山唐辛子は一般的な唐辛子と比較して辛味成分であるカプサイシンが約1.6倍も多く含まれており、畑を取り囲むようにして苗を植え付け栽培することで野生鳥獣による畑の被害を抑制していたことが分かった。現在、岐阜県内の野生鳥獣による農作物の被害額は年間約3億3千万円にもなっており、生態系や日常生活への被害も発生するなど依然として深刻な問題となっている。岐阜農林高校のある本巣市でも年間約1千万円程度の野生鳥獣被害があり、特に鹿による食害が顕著である。そこで、徳山唐辛子をただ普及させるのではなく、山に囲まれた村ならではの「自然と共存する知恵」をメッセージとして伝えることを商品のコンセプトとして、鹿肉と唐辛子を使った新しい加工品を作ることとした。ダムの底に沈んでしまった先哲の知恵を私達がすくい上げ、ふるさとの記憶と共に後世へとつないでいく。それがこのプロジェクトの目標である。



図4. 大牧さんご夫婦（上）と  
地獄うどん（下）

### 3. 活動内容

#### 3-1. 地獄うどんについての調査～宮川さんからの聞き書き～

地獄うどんの詳細について調査をするため、旧徳山村村民の宮川澄雄さんを訪問した(図5)。宮川さんはNPO法人「旧徳山村の自然生態と歴史を記録する会」の代表理事をされており、徳山村の営みを未来へ残すために活動をされている。私たちは宮川さんから徳山唐辛子を使った料理の起源について教えて頂いた。それは今から500年前、戦国時代の武将である柴田勝家に所縁のある本巢市根尾の「専念寺」でお斎の際に出されていた「辛々大根」にあるという。辛々大根とは、醤油と出汁で味付けをした大根に徳山唐辛子をふんだんに入れた煮物で、500年前から食べられていた郷土料理である。寒さが厳しい徳山村では身体を暖める効果のある徳山唐辛子が重宝されており、漬物などにもよく用いられている。

終戦直後の日本では乾麺が流行し、村でもよく食べられるようになった。冬には囲炉裏端で夜通し草履を編むのが日課で、囲炉裏にかけた鍋にうどんの乾麺と徳山唐辛子を入れて夜食に食べていたのが地獄うどんの始まりだそうだ。地獄という名称は、囲炉裏の炎でぐつぐつと煮える鍋と、唐辛子の辛さから地獄のように熱くなることからいつしかそう呼ばれるようになった。

徳山村はダムの底に沈んでしまったが、こうした徳山唐辛子のルーツや地獄うどんのエピソードは、村民の方の記憶の中に確かに存在している。しかし誰かが語り継がなければいずれ失われてしまうだろう。私たちは地元の高校生としてその一役を担いたいと考えている。そこで、食品科学科での学びを生かした加工品開発を通し、羽田さんや大牧さん、宮川さんから聞き書きをさせていただいた村の文化を未来へ継承する活動を実施することにした。

#### 3-2. 徳山唐辛子の加工品開発

私たちは徳山唐辛子を使った郷土料理「地獄うどん」を現代版にアレンジして多くの人に味わってもらえるような加工品を開発しようと考えた。具体的には、うどんの生地に直接徳山唐辛子を混ぜて製麺し、商品化することを目指した。現在、徳山唐辛子の生産者は種の保有者である羽田さんしかおらず、今年は台風の影響もありその生産量はわずかである。そのため、できるだけ多くの人に徳山唐辛子を味わってもらうため、唐辛子の使用量を調整する必要がある。そこで唐辛子の配合量を5%、3%、1%と3段階に変えて試作し、見た目、辛さ、味を検討した(図6)。徳山唐辛子はうどんの麺に添加すると麺の色がオレンジ色となり、茹でると鮮やかさが増した。配合量が多くなるほど色が濃くなり、見た目からも辛さが伝わる程である。具体的な配合量と作り方は以下の通りである(表1)。

表1. 徳山唐辛子入りうどんの配合量

・小麦粉(薄力粉) 100g	・水 46g	・食塩 15g
・徳山唐辛子(粉末) 5g	/ 3g	/ 1g

##### ○作り方

1. 小麦粉に徳山唐辛子を混ぜ、その上に食塩水を2/3ほど入れ混ぜる。全体的に混ぜたら残りの食塩も入れてよく混ぜる。
2. 生地がまとまったら乾燥しないようラップに包んで30分～1時間ほど熟成させる。
3. 生地を取り出し軽くこねなおす。再びラップで包み、10～20分程度生地を寝かす。
4. 打ち粉を振り、生地を綿棒で厚さ3mm程度まで伸ばす。生地をたたみ包丁で切り、10分ほど茹でる。



図5. 旧徳山村村民の宮川さん(上)と、徳山唐辛子入り辛々大根(下)



図6. 唐辛子を練り込んだうどんの試作(上)と実際に試作したうどん(下) ※左から5%、3%、1%

完成したうどんについて、岐農祭で200名の方に試食をしていただきアンケート調査を実施した。辛さ、見た目、味、総合評価の4観点について5段階評価をしていただいた結果、唐辛子の添加率5%が全ての調査項目で最も良いという結果となった。この結果をもとに、地元で製麺業を営むナガヤワークスさんに委託をして、乾麺の製造を依頼した。唐辛子の量に限りがあるため、今回は100食のみ製品化することができた。商品名は「底地辛うどん」とし、オリジナルの徳山唐辛子マスコットを作成してパッケージデザインに盛り込んだ<sup>(図8)</sup>。商品名には、ダムの底に沈んでしまった土地の恵みを辛さで伝えたいという想いを込めた<sup>(図9)</sup>。パッケージの裏面には、大牧さんと宮川さんから教えていただいた地獄うどんのレシピを掲載して徳山村の食文化を広く認知してもらえるようにした。



図8 完成した「底地辛うどん」



図9 うどんパッケージ(表・裏)

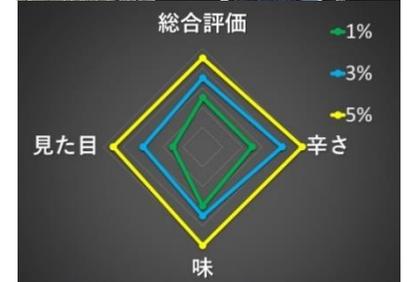


図7 唐辛子を練り込んだうどんの試作(上)と実際に試作したうどん(下)  
※左から5%、3%、1%

### 3-3.クラウドファンディングの実施

底地辛うどんを商品化し、徳山唐辛子の需要を高めることに成功した私たちは、徳山唐辛子の生産者を増やすために何かできることはないかと考えた。現在、本巣市根尾能郷地区で徳山唐辛子を栽培されている羽田さんのお話によると、この地域は野生鳥獣害が多く、農家の高齢化もあり離農者が後を絶たず生産者を増やすことが難しいという。また、昼夜の寒暖差が大きい中山間地でないと本来の辛さが出ないため、他の地域で栽培すると品質の低下を招く恐れがある。そこで私たちは、里山保全活動を実施して野生鳥獣害を減らし、離農者を呼び戻して唐辛子の生産者を増やす活動を実施することとした。具体的には、「底地辛うどん」の製造にかかった費用をクラウドファンディングで集め、集まった費用の一部を里山保全活動の資金として充当する方法を考案した。クラウドファンディングを選択した理由として、第一にネットによる情報拡散力が強いということが挙げられる。世界中に私達の研究内容を伝えることができ、今では各地に離散してしまった徳山村にゆかりのある方達とつながる可能性もある。実施する際の課題として、サイトの開設と運営が挙げられるが、これは科目「情報処理」での学びにより解決することができた。クラウドファンディングサービスは中日新聞社が運営する「夢チューブ」で立ち上げた。地元の企業であることと、法人のみの企画を取り扱うサイトだったので、支援者に安心感を与えることができると考えて夢チューブを選択した<sup>(図10)</sup>。

クラウドファンディングの目標金額は40万円である。支援金は単純に商品の開発費として集めるのではなく、集まった支援金の一部を里山整備活動に充てる。そうすることで生産農家を支援し、更なる商品開発を進めることができる。底地辛うどんをきっかけとした、地域農業活性化システムの構築を目指した。

販売チケットの一覧を図11に示した。御礼メールと研究報告資料の送付、うどん1人前と実習製品のセット、うどん2人前と実習製品のセットという3パターンを用意した。



図10 夢チューブで立ち上げたクラウドファンディングサイト



図11 販売チケットの一覧

クラウドファンディングの収支内訳を図 12 に示した。40 万円集まったと仮定して、うどんや実習製品、発送代、手数料を合わせた返礼品代として 23 万 5 千円を計上するので、残りの 16 万 5 千円を研究資金として利用し、唐辛子の栽培資材、商品開発、里山整備を行う。

平成 31 年 1 月 18 日から 3 月 18 日までの 2 ヶ月間の募集をして、目標金額の 40 万円を超える 40 万 1 千円の支援をいただき、見事目標金額を達成することができた。チケットの販売枚数結果としては、1000 円のチケットを 151 枚、3000 円を 50 枚、5000 円を 20 枚販売し、底地辛うどんは 90 食分を販売することができた。岐阜県外からも多数の購入者があり、岩手県、東京都、千葉県、神奈川県、石川県、愛知県の 1 都 5 県へ返礼品を発送した。特に隣県の愛知県からは多数の購入者があった。

目標達成に至るまでにはいくつかの要因が挙げられる。一つは新聞各紙での報道である。中日新聞さんを始めとして、岐阜新聞、読売新聞、日本経済新聞、日本農業新聞など、多くの新聞社に取り上げていただいた<sup>13</sup>。2 つめとして、SNS を活用した情報拡散や、

web ニュースへの掲載が挙げられる。県外からの購入者は、こうしたネットの情報を元に購入している可能性が高いと考えられる。3 つめには、徳山村に縁のある方からたくさんの支援をいただいたことが挙げられる。例えば、徳山村村民 2 世の岩須直紀さんである<sup>14</sup>。岩須さんは幼い頃に徳山村に住んでいたが、今は名古屋でワインバーを経営されている。私達に直接メールをしていただき、底地辛うどんを使った新メニューの開発をしていただけたとのことであった。このように、クラウドファンディングを実施したことによって、徳山村の営みと徳山唐辛子を日本中に発信することができた。

### 3-4. 里山整備による地域農業の活性化

クラウドファンディングで得た研究資金の内訳として里山整備費用を挙げている。これは、鳥獣害対策や豊かな里山を育成する活動を実施することで、地域の農業を活性化させることを目的としている。さっそく、里山整備に協力していただける NPO 法人を調査したところ、里山保全組織の猪鹿庁さんが協力していただけることになった。猪鹿庁の興膳さんを訪ね、シカの食害に悩む地域のネット張りに協力させていただいた<sup>15</sup>。この地域は長良川源流の植樹地帯であり、里山を整備することで豊かな森林と水源を創造することができ、農業のみならず林業や漁業を守る活動へと発展した。今後も、クラウドファンディングの支援金をもとに、植樹活動などを実施していく予定である。

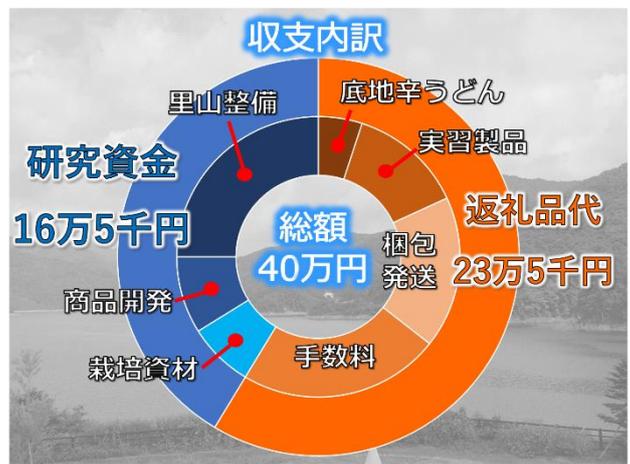


図 12 販売チケットの一覧



図 13 掲載された新聞記事の一例



図 14 徳山村に縁のある岩須直紀さんに返礼品をお渡しする様子



図 15 NPO 法人猪鹿庁の興膳さんとネットを張る様子

## 4. 今後の展望とまとめ

旧徳山村の村民の方から聞き書きをする中で、私たちの中に徳山村の営みや文化を次世代へ継承したいという想いが強く沸き上がった。食品科学科で学んだ食品製造技術を生かし、徳山村の伝統野菜である徳山唐辛子を使った底地辛うどんを開発することに成功した。また、その加工品をきっかけとしてクラウドファンディングを実施し、唐辛子の生産者を増やすために里山整備活動を展開するに至ったが、ここまで到達するためには多くの方の協力が不可欠であった。このプロジェクトに協力をいただいた関係者の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げたい。JAの広報にも私たちの活動を掲載していただき、認知度を高めることができた<sup>図 16</sup>。また、今年から徳山唐辛子の生産者が 20 人に増え、着実に成果が上がっている。今後も活動を継続して、徳山村の営みを未来へとつないでいきたい。

今の日本は過疎や高齢化により、中山間地域での営みが途絶えつつある。集落の建物など、目に見える物が失われるのはわかりやすいが、そこで培われた目には見えない「営みの知恵」が消失することは認識しづらい。ダムに沈んだ徳山村には、唐辛子だけでなく先達が残した数え切れないほどの目には見えない財産が眠っている。そうした財産は、岐阜県だけでなく日本中に存在しているはずだ。そしてそれらは、現代社会が抱えるいくつかの問題に対する最善解を示してくれるような気がしている。里山に生き、里山と共に暮らした人々の知恵を次の世代へと受け継ぎ、地域の農業と暮らしを発展させていくことがいかに大切かを、このプロジェクトを通して伝えていきたい。



図 16 広報誌に掲載された徳山唐辛子の特集と私たちの活動（JAぎふ）

# “祖父江の虫送り”を通して 文化や地域を引き継ぐ



## 杏和高校 地域研究グループ

熊沢 咲良 小出 来捺 木村 心優 近藤 夢子 塩田 茉莉 鈴木 柚香  
田島 奈実 遠山 美樹 野田 詩織 林 すみれ 松坂 穂乃香 山下 歩華  
秋葉大輝 三津原 やまと 磯野 晃希 瀧波 愛翔 橋本 隆良 横井 純

## はじめに

私たちの愛知県立杏和高校は愛知県稲沢市の旧祖父江町にある。「祖父江の虫送り」はそこで行われ、愛知県の無形民俗文化財になっている。

虫送りは初夏に、稲の害虫を村から駆除し追い出すために全国的に行われてきた行事である。形はいろいろあるが、斎藤実盛人形をつくり松明で行列を行い村境まで虫を追い出す地域も多い。しかし、農薬の普及や都市化が進む中で多くの地域でその行事はなくなっていった。愛知県内も多くの地区で行われていたが、大々的に行われているのはほんのわずかである。その一つが、私たちの地域に残された「祖父江の虫送り」である。

6年前から杏和高校はこの伝統行事に参加し、調査を行うとともに、何名かの生徒が参加し行事の担い手として大きな役割を果たすようになってきた。

去年多くの先輩が情報発信することで、地域活性化の活動を行った。2月に行われた本校独自の発表会である「総合学科発表会」でも、その取り組みを発表した。地域とつながることの楽しさと大切さを訴えていた。その場で「虫送りに参加し私たちに意思を引き継いでほしい」と強調していた。今年も十数名がその取り組みを引き継いでいくことを決意した。何人かは初めての虫送りで手探りの活動だが地域とつながりを求めて活動をしようと考えている。

今回の論文は先輩たちが昨年やってきた成果と、今年私たちが5月からやり始めたこと、およびこれからかやる予定のことからなっている。活動を開始して十分な活動ができていないことと、虫送りという行事が行われる前にこの論文の提出締め切りがあるため今年部分は不十分な形だ。

昨年の活動に関しては先輩たちが「昨年の田舎力甲子園」以降の活動を書きおいたレポートをそのまま掲載することにする。なのでこれは先輩と私たちと私たちの2年間にわたる合同の作品である。

わたしたちの今回の研究は2部からなる。以下のとおりである。

### I部 2018年の活動

- ・2018年の虫送り 当日レポート
- ・他の虫送りとの比較 愛知県常滑の調査
- ・情報宣伝活動
- ・祖父江の虫送り ATOZ の作成

### II部 2019年の活動

- ・他の虫送りとの比較 三重県熊野市
- ・情報活動
- ・今後の予定
- ・まとめにかえて

# I 部

2018 年度の活動  
(昨年の田舎力甲子園以降の活動)

## 1.2018年の祖父江の虫送り

1) 人形・松明作り 日時は7月7日(土曜日) 場所稲沢市立牧川小学校 14:00~17:00



朝は曇りだったが、作業が始まる頃には雨がひどくなり虫送りが行われるのか不安になった。

1体だけ作るのに時間的に余裕があり14:00から始まった(2017年は虫送り用と郷土資料館用の2体作ったので13:00スタートだった)。実盛人形は全員で組み立てていくのではなく、「手足班」、「頭班」、「ウマ班」など、部位に合わせて分かれて作り、それぞれが出来上がったところで集めて合体させた。馬は稲ワラ、小麦ワラ、細縄、サツマイモ、ナスを使い、実盛人形は小麦ワラ、ハカマくず、稲ワラ細縄を使い作られる。これも例年と一緒だ。

まずは、麦の袴をとる作業。今年の麦はちゃんと麦畑を近くで確保できたらしい。去年は長さが短く人形を作るのに苦労していた。会長さんは「今年はきちんとした麦だから大丈夫」とおっしゃっていた。一方雨でぬれて少し黒くなっていたのは残念だった。



藁のはかまを取る作業はとても細かく、量も多いため結構大変だが、いろんな人たちとお話をしながら作業をすることで、気も紛れ、時間を忘れて楽しく行うことができた。特に一部のメンバーは昨年と同じ人の隣に座りますます仲良くなることができ、LINE を交換などしていた。

おじさんたちが笑わせてくれたので、疲れなかった。おじさんと将来の夢や、大学の話をした。おじさんの中には小さなことでもほめてくださる方がいて、うれしかったし、よく見ていてくださるなどびっくりした。

あと今回大きな変化があった。子どもの参加がとても多かった。自分たち高校生も今回は人形づくりの1部に参加したのは23人。ほとんどが3年生で部活動を引退したために人形づくりから参加することができ昨年の2倍である。地域研究の13人以外にも「おもしろそうだから」と10人ほどが参加してくれた。小学生も中学生も例年と比べて格段に多く感じた。



実盛の手綱づくりは稲の苗を使って行った。苗をみつあみで編んでいった。この部位は去年は高校生が一人も参加していないらしく、私たちが来たことがうれしかったそうだ。「(この作業を)引き継いで行ってほしいなあ」と言われ思わず「是非!!」と返事をしてしまった。編みこむだけで簡単だったので来年は小中学生も積極的に参加してほしいと思う。たわいもない話をしながら編み込む作業はとても面白かった。

馬の手足をつける作業もやらせてもらった。去年はひたすら袴取りをしていたけど、ひもを結ばせてくれたのはうれしかった。一方、はやくやったらゆっくりやれと怒られるし、ゆっくりやれば早く足を完成させないとちょっとどいてと言われ、どうしていいのかよくわからなかった。馬の足を作る際に、滑らないようにするため太い紐に結び目を作り、それを束ねた藁の中に入れていた。馬の足と体を合体させるときに、細い紐でたすきをかけるように斜めに結んでいた。また、頑丈にするために何重にも結んでいた。結び方を覚えるのはとても難しく、何回もやってみないとなかなか覚えられないが、教える方もとても難しいと感じた。



実盛人形の胴体作りはほかの場所に比べて複雑なので去年は昔から虫送りに参加している地元の人たち中心で作っていたのだが、今年の胴体作りは始めて胴体を作る人たちや虫送り自体始めて参加する人たちによって作られていた。部分を作る時は全員で役割分担をしてスムーズに作れるような体制で作業を進めていた。

実際に組み立てる時にもその場の地元の人が「頭は体を藁で巻いてからさしてははずだ。」と言う人と「いや、頭はさしながら巻くんだ。」と作り方をああでもないこうでもないと手探りで作っているような感じがあった。実盛人形を立てる時に実際に持ってみて予想をはるかに超える重さに驚いた。大人が三人と高校生一人でようやく何とか動かせるような重さだった。

一番大きな変化があったのは松明作り。



2017年は袴取りと並行して松明作りが行われていたが、今年は袴取りが終わり、人形の部品作りが終わったところで、体育館全体を使って一気に30本ほどの松明づくりがおこなわれた。だから、私たちも全員が松明づくりにかかわることが可能だった。袴取りよりずっと楽しく、行事に参加しているという実感をつよくした。

もう一つの変化は小中学生が例年の倍以上いたために、自分たち以上に子供たちが楽しそうに積極的に松明作りを行っていた。おじいさんほどの人と楽しそうに縄の結び方を教えてもらいながら作業をしていた。小学生と高校生、中学生と高校生の共同作業もたくさんみられた。

結び方が少し複雑で難しかった。しかし、「こうしたら取れないよ」などたくさんのアドバイスをくれた。新聞をまとめるときも有効活用できると聞いたので活用していきたいと思った。たいまつ作り方も教わる人によって、縄を使う人や藁で紐を作って縄代わりにするひと、また、結び方も人によって違っていたので説明を受けてみるのも楽しかった。

一方で、「去年より小中学生が多かったため遠慮してしまい、思い切りできなかった」という声もあった。これは、それだけ小学生が増えて行事としては良い方向に向かっている証拠だと感じた。



最後に会長さんが実盛に服と顔を書き入れ完成。今年の顔はここ数年にないイケメン。みんなから「今年はかっこいい」という声上がる。「今年は違う人が書いたの」という声が上がっていたが、書いているのは去年も今年も会長さんなので、どうしてこれほど違うのかとも思った。

相変わらず外は小雨が降っている。会長さんが言うには虫送りの夜は雨が絶対にふらないらしい。「多分、やむだろう」という期待を込めて。一時解散。夜を待つことになった。



5時に人形づくりが終わって、7時までもらった助六ずしを食べて休憩。外は雨なのでひたすら体育館の中で待つ。一部メンバーは小学生と仲良くなり、じゃれ合って遊ぶ。小学生と遊ぶ機会なんてほとんどない。これも虫送りの御蔭である。

外はどしゃ降りに、とうとう6時50分虫送り行列の中止が決定。体育館内でセレモニーだけが行われ、本日は終了。2時間待つ中止は残念。雨には勝てず仕方がない。虫送り延期はここ10年で初めてのことらしい。



## 2) 虫送り行事 7月8日(日) 前日の雨天によりこの日に順延

例年なら牧川小学校グラウンドで市長や県議員や市議員のあいさつなどが続くセレモニーを行ってから出発する。しかし、今年は前日夜体育館でセレモニーが行われたため、7時から虫送りが始まった。海田会長が軽トラックの上から挨拶・諸注意行いスタート。例年より15分ほど早く行列が始まった。そのためずいぶん明るいうちにスタートした。下の昨年(2019年)の写真を比べるとよくわかる。



↑ 昨年



まだまだ明るい中、祖父江と書いた提灯、鐘、太鼓、実盛人形、そのあとを松明が続く。松明は全部で31本。ほぼ例年と同じである。しかし、今年は順延となったために、持ち手が若干足りなかった。私たち杏和高校にはそのうち7本を割り当てられた(去年は4本だったので、一本を5人で交代しながら持った)。私たち自身も日程変更で15人ほどしか来る人のめどが立たなかった。さらに太鼓を持ってほしいという依頼もあり、急遽、近所の友達を呼び出すなどして対応した。結局体格の良い男子二人は太鼓持つという大役をうけた。残ったメンバーで一人もしくは二人で松明を持つことになった。



虫送りの行列が続く、まだまだ空が明るい中でやるのは不思議な気もした。

←急遽太鼓を持つことになった二人



去年の同じ場所明るさが全く違う →



松明を持って歩いているとき、どんどん火が燃え盛っていき、このままでは火が手まで来てしまうのではないかとあせった。途中で消防団の方が水を持ってきて調節してくれた。中にはもう手元まで来てやけど寸前まで来たのもあった。もう下に置くしかなかった。とにかく、二人で持つのは重く、次の日は筋肉痛になるくらいだった。

風向きがひどく煙がひたすら自分のほうに向かってきた。煙たさは半端なかった。行列のゴールが近づくにつれて、やっとなんか暗くなりはじめ、松明の火がきれいに見えるようになって来た。



ようやく暗くなった中、松明を次から次へと炎の中に投げ入れる。最後に鐘・太鼓が鳴る中、実盛人形を炎の中にいれ、昇天させ全員の拍手のうちに豊作を祈る行事は終わる。最後に海田会長が挨拶をされた。

ラストは大きな火の中にみんながたいまつを投げ入れる瞬間を撮っていた。炎はとても大きく、熱く、みんなが汗水たらして作ったものが一瞬にして消えてしまった。最後の実盛人形を投げ入れた後、みんなの拍手があり、とても良い光景だと思った。みんなで作りあげて、統一感のある終わり方。地域ならではの伝統行事であった。

## 2. 他の虫送りとの比較 愛知県常滑の調査

### 1) 常滑市矢田の虫送りと祖父江の虫送りの関係

稲沢市祖父江の「虫送り」と常滑市矢田の「虫送り」がセットになって昭和59年に「尾張の虫送り行事」として県指定無形民俗文化財に登録された。二つで初めて無形文化財となっている。



### 2) 常滑矢田地区と祖父江の虫送りの最大の違い

祖父江の虫送りとの最大の違いは、実盛人形が登場する「ウンカ送り」と松明行列を行う「虫送り」の二つに分かれていることである。

### 3) ウンカ送り

2018年6月28日（金）

「ウンカ送り」は夕方に行われ、サネモリ人形とフウフの鳥を先頭に、太鼓とほら貝で矢田川のほとりを約30分ほど歩き、五穀豊穡を祈って最後に矢田川に流す神事である。

6月28日に行われた。私たちは期末考査中で現地に行けなかった。右の写真は常滑市のWEB『常滑市ホットニュース2018年6月』から引用している。



このウンカ送りは、皆川さんからもらったアンケート用紙の返事で考察する。

皆川さんからもらった返事によると

サネモリ人形は「麦わらで胴体をつくり、白い紙をまく。紙製の陣羽織・刀・采配をつくり、身につけさせる」でサイズは「120センチ」。フウフ鳥は「麦わらと青竹と紙」でサイズは「200センチ」である。

サネモリ人形は祖父江のものとは全く別物である。その違いが面白い。常滑のものはまるで江戸時代の武士である。



【常滑（公民館に飾ってあったもの）】



【祖父江】

フウフの鳥は祖父江には存在しないものである。皆川さんの返事によると「実在の鳥ではなく、害虫を食べる鳥」らしい。フウフの鳥の羽は、抜いて「家に持ち帰り神棚に飾ってまつる」そうである。

子どもたちが参加するのは「最後にごくろうさまの意味のおやつがあるので」それが目当てではないかとのことだった。



【フウフの鳥（公民館に飾ってあったもの）】

皆川さんは「昔から川に流すことになっているから、実盛人形とフウフ鳥を流すけど、今はすぐに回収するんだ。川を汚すわけにはいかないからね。」と教えてくれた。

#### 4) 虫送り当日の調査

調査日：2018年6月30日

##### 常滑市矢田地区

地域：常滑市矢田地区

参加者：地区の人

中心：地区の区長・副区長・評議員など

やること：神事（八幡社）

出発セレモニー（矢田集落センター）

虫送り行列

私たちが矢田集落センターについたのは6時50分ごろ準備がちやくちやくと進んでいた。壁にはたくさんの松明が並べられていた。祖父江の一回りとかく長い。本数は127本（頑張って数えてみた）すごい迫力だった。祖父江は今年は31本だったので約4倍である。



【ずらっと並ぶ松明】



【大きさの比較 左：常滑 右：祖父江】

早速、皆川さんにあいさつに行った。「遠くからよく来てくれたね」と声をかけてもらった。準備で忙しい中私たちの質問に丁寧に答えてくださった。

この松明は一週間前の土曜日の午前中に、子供が親と一緒に作るらしい。「地区の子はほとんど参加している」「親といっしょにわいわいがやがややって楽しそうに作っている」と説明を受けた。子どもが親と一緒に自分専用の松明を作るのはいいなと思った。「自分で作ったやつだから愛着がわき最後までもとうとする」という皆川さんの言葉は説得力があった。



地区以外の子供にも「わくわく体験教室」というのがあり 20 名が先着でやれるらしく。これも毎年すぐ一杯になるほどの人気だということだった。また、松明をもって「800m」歩くと聞きちょっとびっくりした。



【松明には札がついている そこには個人個人の名前が書かれている】

松明には一つずつ個人名が書かれている。皆川さんが言う「自分の松明」を作っている様子がそこからもわかる。祖父江では、番号は札についているが、作った人と持つ人は無関係である。

時間が近づいてくるとどんどん人が集まってきた。目立つのはヘルメットをかぶった小学生だ。どこも親子連れだ。自分の松明を嬉しそうに持って並んでいる。これこそが、この虫送りの特徴だと思った。また、その人数本数にとにかく圧倒された。



また、この虫送りは中止などがない伝統行事である。人為的なイベントとして行われているわけではない。

7:00 ごろから近くの八幡社では神事が行われている。憲法の政教分離に関する配慮で、同じ時間に矢田集落センターではセレモニーが行われる。多くの人が松明を手にとりにこれに参加する。セレモニーでは国会議員や県議員などのあいさつが行われている。行事が二つに分けて行われているのは現代的で興味深かった。セレモニーでは議員さんたちなどのあいさつの後、皆川さんが「稲沢市の杏和高校の高校生が来ている」と自分たちのことを紹介してくださりびっくりしたし、少し照れ臭かった。



【セレモニーが行われている矢田集落センター】      【神事が行われている八幡社】

神事が終わった後、八幡社から提灯を先頭に松明二本、ほら貝と太鼓が後を続く。鐘は使わずほら貝である。ほら貝の音が何とも言えなかった。ちょうど、セレモニーが終わったところに提灯が集落センターに到着し二つが合流し、いよいよ虫送りの開始である。



常滑の虫送りの特徴は、まず第一に実盛人形がないところにある。だから基本的には松明の行列である。サネモリ人形は、「オンカ送り」で用をすませたのか、この虫送りには参加しない。区長が持つ提灯二つを先頭に 120 本（今年は 127 本）の松明行列が続き、ほら貝・太鼓が最期をしめる。その後ろを消防団が消化しながら進むというものである。

第二にその規模の大きさにある。先ほど書いた通り、松明の本数は120本で祖父江の4倍である行列は、行程は集落センターを出て、橋を渡り、矢田川に沿って800m松明で行列を行う。800mだからだいたい15分ほどずっと歩くことなる。それが120本となると本当に勇壮である。

第三に伝統行事として神事として息づいていることである。ここ数年で作られた人為的な行事ではなく、以前からの形式を維持している。故にコースも川のほとりという、いまだ未舗装の少し広めの畦道に行く。だからこそ風情を感じずにはられない。

「せっかく来たんだから一本持って」と松明を持たしてくれることになった。特に大きい一本を手渡された。議員さんなど来賓の中でもち虫送りに参加することになった。松明作成に参加してないのにも関わらず、快く松明を譲ってくださり、驚きと共に嬉しさがこみあげてきたのを今でも覚えている。渡された松明は思ったより軽かったが、長さはとても長いので後ろに倒れそうになった。

松明をもって列になって川の横を歩いている時、前で歩いていた昔から参加している地元の人が「松明は上下に揺らすとはげしく燃えるんだぞ。せっかくだから激しく燃やさないとな。」と松明を激しく燃やすコツを教えてください、持っている松明の火が消えてしまった時に「お前さんの火消えてまってるがな。御裾分けしたる。」と言って自分の松明の火を分けてくださいました。そしてその人の松明の火が消えてしまったときに「火わけましようか？」と聞くと地元の方は「ありがとさん。困ったときは助け合いやな。」と笑顔で教えてくださいました。この時になぜ常滑の虫送りが今でも形を残しているのかが少しわかった気がした。

それ以外のメンバーは、てできるだけ先頭のほうで様子を見た。最初にもものすごいものを発見した。スタート地点の松明に点火するための炎の中に人形のようなものを見つけた。地区役員らしき人に聞くと「そう、サネモリさんとフウフの鳥だよ」と教えてもらった。



【点火用の炎の中手らしいものが見える】

松明をつけた行列が、川に沿って延々と続く本当に美しい風景だ。ちょうど空は真っ暗で、松明の炎だけが延々と続く。最初の松明がゴールについたときやっとしんがりスタートするくらいなので800mにわたる光の帯が作られる。それが、闇夜に照らされ本当に美しい。



【川の沿いの畦道で行列スタート】



【延々と続く松明の光】



【一番大きな松明を持たせてもらった】



【ゴールのところでアイスが配られる】

ガードレールをうまく利用して火を弱めている大人の方の姿が何回か見られた。松明の扱い方がとてもうまいと感じた。すでに竹だけになっている人もいれば、松明の扱いに苦労している人も見られした。2本もちの人もいた。小学校高学年かなと思う子は、一人で松明を持っていた。私なら怖くて一人では持てません…。橋に向かって歩いているときに道のわきに2人のおばあさんが座っていた。松明を見守っている人が大勢いた。こんなに多くの人に知られている行事なんだと改めて思った。

見学している人たちのぼそっと呟いたことが耳に入った。その中に小さな子供がいて、「ママ見て、あんなに小さい子が持ってるよ」「あのおじちゃんの火なくなってるね」「とお母さんを困らせているようにも見えたけれど、僕もやりたいというように感じた。

全員が到着し、たいまつを燃やした後アイスクリームを頂いた。今まで暑かったのがウソのように涼しくなった。参加者全員に配られていて、幸せそうな表情で食べていた光景を今でも思い出せる。

最後に皆川さんにいろいろ話を聞いた。

「予定では30分で終わる予定だったけど、今日は風が強いから9時くらいまで続くかもしれない…昔はもっと多かったから切れ目がなかったからね」と。子どもがかぶっているヘルメットについて聞くと「強制はしていないよ。火の粉来るから結局多くの子が身近にある自転車のヘルメットになっちゃう…」と。子どもと親の組み合わせが多いことを聞くと「子供会だけで50本かな、子どもは持ちたくてしょうがないもので。日ごろから火遊びなんてやらしてもらえないんだから…」「松明づくりも楽しくわいわいやっているし」と。「だいたい大人だけで参加しているのは八幡神社の役員か地区の役員だけそれ以外はだいたい子連れか孫連れ」「孫と歩けるからじいちゃんたちがものすごく楽しみにしている」と笑いながら話をしてくれた。話はいつまでも尽きなかった。あっという間の出来事に感じるくらい楽しかった。お礼を言ってこの日の調査は終わった。

#### 5) 調査を終えて

常滑の虫送りに参加して、一番感じたのは、人の多さも違ったが、その中で特に違ったのは年齢層だった。小学生とその保護者がたくさんいたことだ。親子や3世代で参加している方々も多く、脈脈と地域に根付き、つながっている歴史の縦のつながりがあると感じた。

子供が自分の松明を持てるということから喜んで準備から参加することで、その親や祖父母を巻き込む。子供が参加したいという意思が強いため必然的に大人の参加人数も増える仕組みが作られている。子どもを巻き込むことで次の世代にうまくバトンタッチでき、伝統がうまく引き継がれていると感じた。

祖父江でも子どもが主体になったほうが継続性が保たれる感じがした。松明に名前を付ける、一人一つが無理なら、3~4人でもいいが自分の松明という感覚を待たすことで、子供の参加やその保護者を松明作成から増やす必要性を感じた。

しかし、祖父江の虫送りは一度中断したこともあり、伝統として自然に引き継いでいくには難しい側面が多いことを痛感した。昔からの行事として継続している常滑と違って、祖父江では伝統を引く継ぐべき子供たちも自然と引き継いでいけるわけではない。意図的に巻き込むことで引き継いでもらう努力が必要である。

今回他地域を見ることで、特に感じたのは現在祖父江の虫送り実行員会で主体となっている人たちが熱い思いで伝統を作り、どうやって伝統を引きついでいくか模索されているのか。その地域に対する強い思いを感じる事ができた。

### 3. 情報発信活動

#### 1) Twitter による情報発信

##### ① 祖父江虫送り [https://twitter.com/Mushiokuri\\_S](https://twitter.com/Mushiokuri_S)

###### プロフィール

愛知県立杏和高等学校による、「祖父江町虫送り」の地域活性化応援アカウントです!! 3年生15人と愉快的な社会科教諭が活動しています。祖父江に伝わる伝統行事を知ってほしい、見てほしい、来てほしい!!!



##### ② ツイートの様子

5月31日開設し前日まで断続的に行った。

開設から5週間でツイート数は100で、一日平均約2.5個のツイートになっている。開設はじめはあまり準備ができていなくツイートが少なかったが、最近4コマ漫画をツイートするなど多くのメンバーがそれぞれのかたちでかかわっている。ツイート内容もそれぞれの個性が出て面白い。特に順番を決めずにそれぞれがつぶやいた。

##### ③ ツイート内容は

- 行事そのものを知ってもらうもの
- 昨年参加した時の感想
- 斎藤実盛について
- マンガ「さねもり君劇場」
- 祖父江の虫送り豆知識
- 雑感



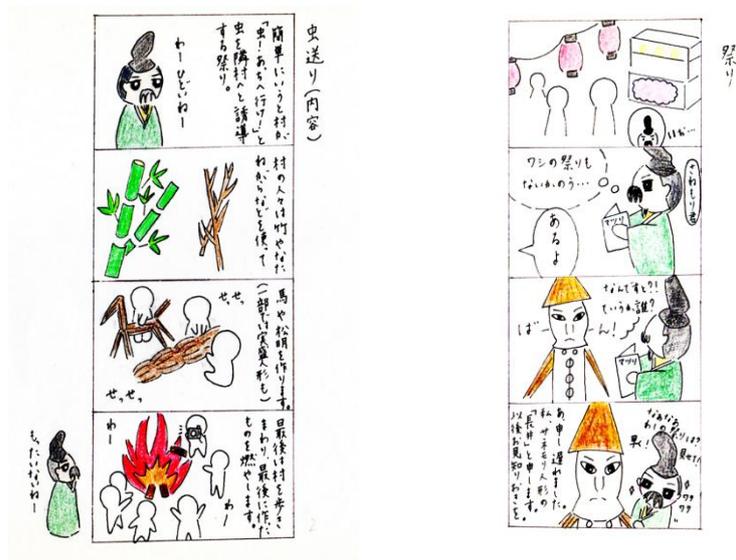
2) 「祖父江の虫送り」のチラシ作成

虫送りのチラシの作ろうということになった。本当は事前に配布したかったが、期末考査などが入りなかなか進まず直前に完成した。



3) 四コマ漫画「さねもり君劇場」

少しでも、虫送り、実盛を身近に感じてもらうために視覚的な効果を狙い4コマ漫画を作った。意外とシュールなできになり、親しみやすい仕上がりになった。



4) 新聞による報道

東海地方では圧倒的な購読率を誇る中日新聞が、私たちの情報発信を取り上げてくれた。虫送り2日前であったが、新聞掲載によって、いろいろな人から新聞で見たといわれるようになった。

### 「虫送り」ツイッター開設

稲沢市祖父江町で七日ある県無形民俗文化財の伝統行事「虫送り」をPRしようと、地元の杏和高校の生徒が、ツイッターのアカウントを開設した。同校では五年前から虫送りの研究を続けている。イラストや写真を交え、歴史などを分かりやすく発信しており、当日はリアルタイムで、行事の様子を伝える予定。

**稲沢杏和高校生 7日、速報予定**

虫送りは害虫を追い払って豊作を願う、各地で行われていた伝統行事。たいまつやわら人形を掲げ、鐘や太鼓を鳴らしながら行列を成し、田んぼ周辺を練り歩く。

農業の普及などで多くは廃れたが、町内の一部の地域では江戸時代から受け継がれ、一九八四年に県の指定を受けた。後継者不足などを理由に一度は途絶えたが、現在は地元八十人ほどでつくる実行委が担っている。

杏和高では夏休みの課題研究の一環で、有志の生徒たちが文献を読み、地元住民への聞き取りを行うなどして理解を深め、行事にも参加している。本年度



**尾張版**

岐阜城  
前野 恒  
中部一水会所属

ニュース、情報は下記へ  
社 会 部  
052-231-1650・5919  
Eメール  
shakai@chunichi.co.jp

一宮 郵 局 〒491-0851  
一宮市大江1-13-13  
0586-72-4545 Fax72-5035

津島通信局 0567-28-2157 Fax28-2158

稲沢通信局 0587-32-8800 Fax23-8035

江南通信局 0587-54-4001 Fax54-9622

鷺江通信局 0567-95-3022 Fax95-3000

春日井支局 0568-81-2036 Fax81-2797

犬山通信局 0568-61-2612 Fax61-2613

小牧通信局 0568-72-1177 Fax72-6530

中日新聞へのご意見は  
読者センターへ  
052-221-0800 Fax221-0819  
Eメール



は総合的な学習の時間も活用し、三年生十四人が研究に参加。地域活性化にも協力できると話し合い、ツイッターで発信 (秦野ひなた)



虫送りを紹介するツイッターのアカウントをPRする生徒たち＝稲沢市の杏和高で

信することになった。アカウント名は「祖父江虫送り」(同名で検索)。五月二十日に開設し、昨年行事に参加した生徒の感想のほか、言い伝えや当日の流れなどを紹介する四コマ漫画を掲載し、随時更新している。

七日は午後一時から牧川小学校の体育館でわら人形やたいまつを作り、午後七時ごろから小学校近くの田んぼの周囲を歩く予定。ツイッターではその様子を写真などで配信するため、準備をしている。

実行委会長の海田幸男さん(左)は「昔ながらのやり方を受け継ごうと行事を続けているが、実行委では外部に向けて発信する体制が整っていないのでありがたい」と感謝する。

漫画を担当している立松真実さん(右)は「自分と同世代で虫送りにも関心のない世代にも読んでもらえるよう、ストーリーなどを工夫している」。

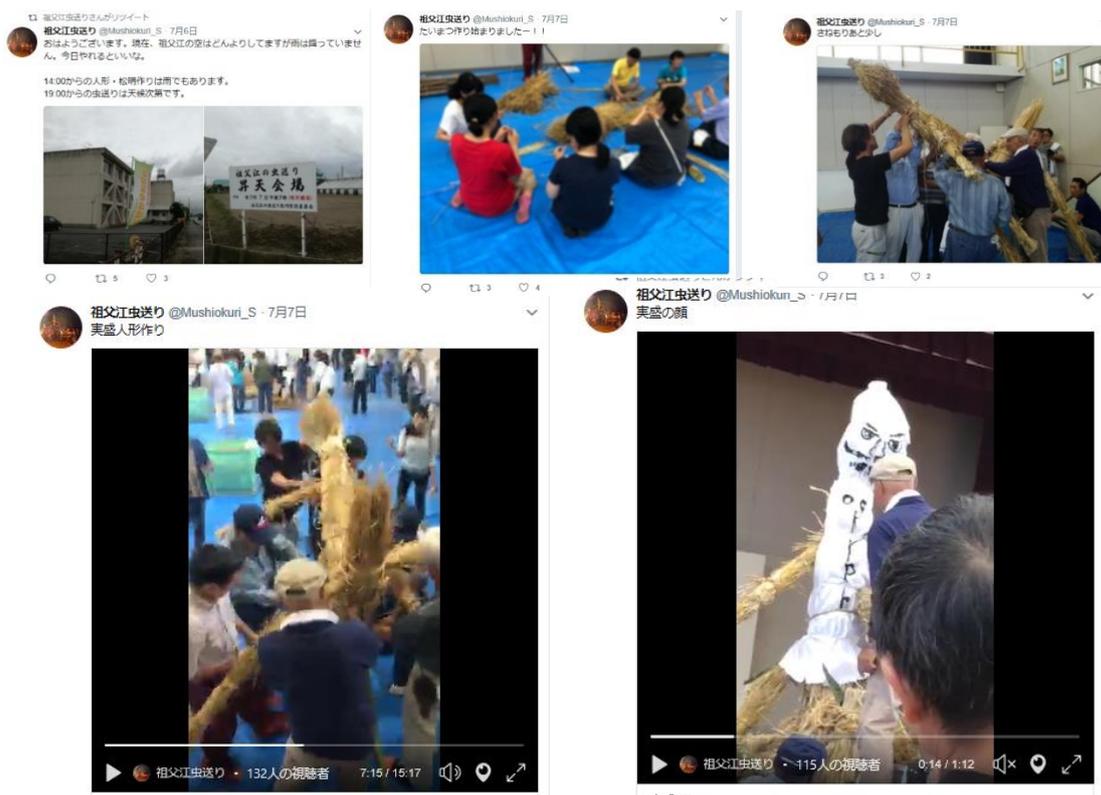
小学生のころから参加してきた地元東荆玖さへん(左)は「大人になっても行事が残っているよ、自分たちが次の世代に伝える役割を果たしたい」と話す。

新聞記事の中で祖父江の虫送り牧川実行委員長海田さんの「昔ながらのやり方を受け継ごうと行事を続けているが、実行員会では外部に向けて発信する体制が整っていないのでありがたい」とコメントがあっただけだった。

## 5) 当日の Twitter によるリアル発信

### ①人形・松明作り 7月7日(土)

朝、天気が不安なことをツイートした。午後になり作成が始まるとツイート始めた。写真を中心に様子を 25 ツイート、リアルな動画配信を 7 ツイートした。松明・人形の作成進度に合わせて行った。動画は動きの多いものを中心に行った。例えば、手綱の編み込み、顔の形作成、馬と実盛の合体、実盛人形の顔入れなどである。貴重な動画も配信できたと考えている。一方、プライバシーには配慮を心掛けた。撮影するときは、一言声をかけた。本当は小学生の子どもたちが一生懸命松明を作っている様子など貴重な写真も多かったがこれを配信するわけにはいかなかった。これは残念だが、インターネットというものを考えれば、仕方がなかった。この日の虫送り行列は、結局行われなかった。決定を聞いてすぐ延期されたことをツイートした。これをどれくらいの人が見たかは知らない。後日、ある先生が「知り合いが『虫送りの延期ツイッターで知ったよ』と言っていたよ」と聞いて少しうれしかった。ほんの少しかもしれないが役に立てたかもしれない。

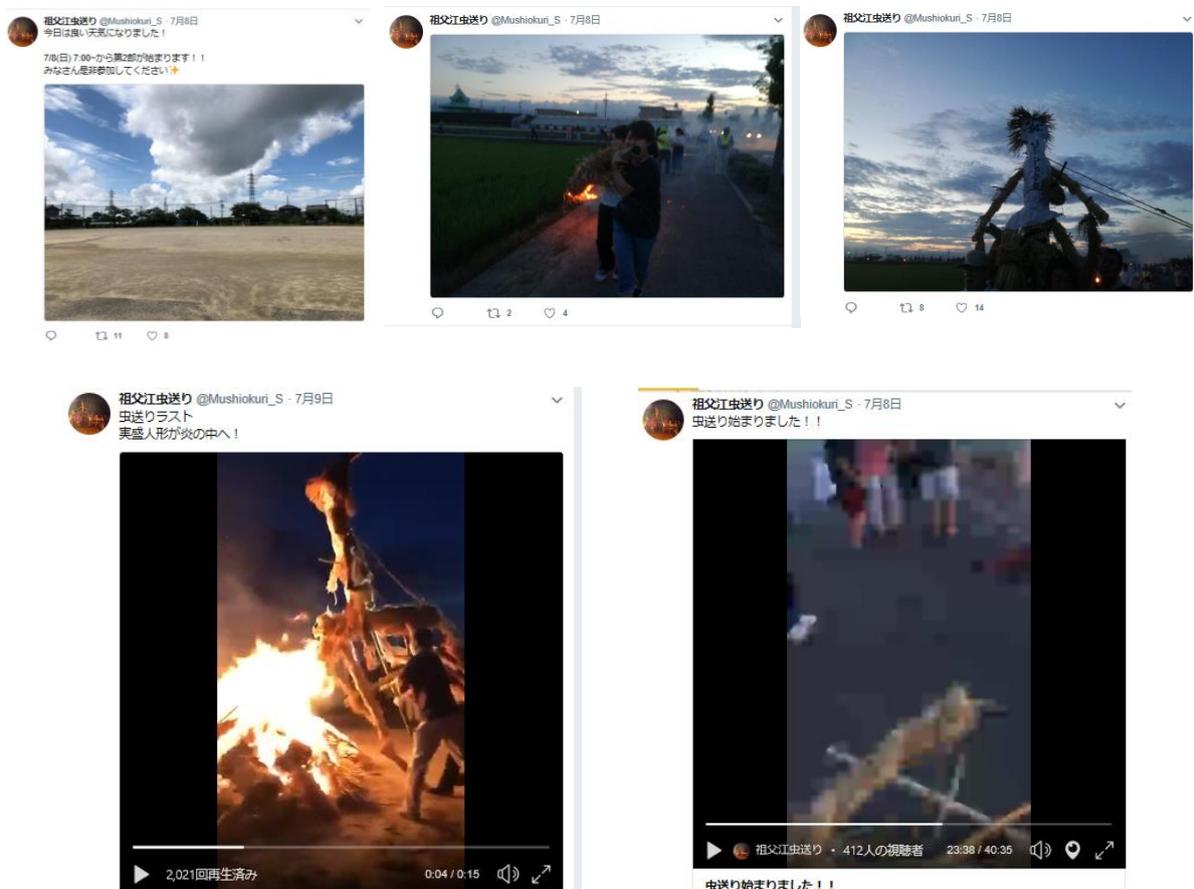


②虫送り当日 7月8日（延期でこの日に）

朝、今日は天気なのでやれそうだというツイートをした。夕方が近づき会場のようすを津一とした後、実際に開始とともにツイートをした。動画は開始と同時にリアル配信をやり続けた。画像は20ほどリアルにツイートした。

虫送り行列では、前日の作成中と違い、撮影の許可を取りにくいので、前日以上に写真に気を使った。もっと、楽しいそうな表情を取りたかったが、自分たち以外はあきらめた。これも仕方がなかった。

後日友人から家で見えたよとも言われた。実盛が昇天する動画には、多くのリツイートや「いいね」がされ、拡散できたことが証明できた。







地元の中日新聞と読売新聞で取り上げられ、この新聞を読んだから冊子を分けて欲しいという連絡も複数あった。これも少しは地域貢献ができたのではないかと考えている。

# キーワードで知る虫送り

## 稲沢 杏和高生が冊子



①冊子「祖父江の虫送りA to Z」をPRする伊藤さんと木村さん＝稲沢市祖父江町の杏和高で ②今年の虫送りの様子＝稲沢市提供



稲沢市祖父江町で行われる県無形民俗文化財の伝統行事「虫送り」をPRしようと、地元の杏和高校の生徒が、その魅力を紹介する冊子「祖父江の虫送り A to Z」を作った。同校では五年前から虫送りの歴史や文化を調べたり、毎年七月に催される行事に参加したりして研究を続けている。生徒たちは「伝統を受け継いでいくため、若い世代に手に取ってもらいたい」と願っている。

(秦野ひなた)

虫送りは、稲に被害をもたらす害虫を火や煙で追い払って豊作を願う行事。たいまつやわら人形を掲げ、かねや太鼓を鳴らしながら田んぼ付近を練り歩く。全国各地で行われていたというが、農業の普及で多くは廃れた。祖父江町内の一部地域では江戸時代から受け継がれ、後継者不足などで二〇〇〇年代半ばに一時、途絶えたが、現在は地元住民らでつくる実行委が担っている。

冊子作りに取り組んだ三年の伊藤響さん(も)は「昔の人の考えに触れられる貴重な機会で、後世に残していきたい。まずは学校の後輩たちに読んでもらい、足を運んでみてほしい」とPR。三年の木村美穂さん(も)は「わら人形やたいまつを作ったり、担いだりするのも人手が必要。伝統を途絶えさせないためにも、地元の中学生などに参加してもらいたい」と話した。

冊子は五百部作成し、一部を市に寄付した。残りは、来年の虫送り行事で配ったり、公共施設に置いたりすることを検討している。

にも伝えていこうと、同校の一三年生の生徒と担当教諭の計十七人が取り組んだ。冊子はCDケースサイズで、二十四ページ。目次には「A」から「Z」までの二十六の頭文字から始まる虫送りに関連する単語をピックアップ。その単語ごとに写真を交えながら、行事の内容や歴史、虫送りに参加した体験談を記している。

【中日新聞 2018/10/5】

# 虫送り冊子で発信

稲の害虫を追い払い豊作を祈願する稲沢市祖父江町の「尾張の虫送り行事」(県無形民俗文化財)を広く知ってもらおうと、地元の県立杏和高校の生徒たちが、小冊子「祖父江の虫送り A to Z」を作成した。生徒らはツイッターでも準備の様子や当日の様態を発信。地域の伝統行事の魅力在全国に伝えたいと意気込んでいる。

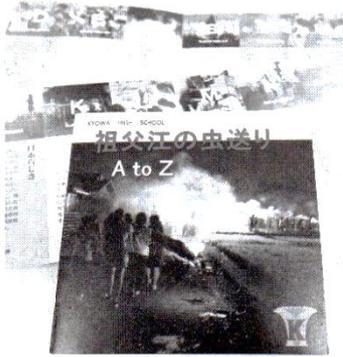
(沢村宣樹)



●作成した冊子を手元に「伝統を守っていききたい」と願う県立杏和高校の生徒ら(左)生徒らが作成した「祖父江の虫送り A to Z」

杏和高生

## 祖父江の伝統 全国へ



虫送りは7月10日前後に行われる、稲に害をもたらす害虫を追い払って豊作を願う儀礼。たいまつや鉦、太鼓などを持った人が行列になり、田んぼのあぜ道などを練り歩いて、害虫をまぢの外へ追いやる。無形民俗文化財に指定されているのは同町島本新田の行事で、後継者不足で2005年に一度途絶えたが、有志の尽力で翌年復活した。

同校からは、地元の伝統行事に触れることを目的に、有志が14年から参加。総合学習の時間に文献を読んだり、住民に話を聞いた

### ツイッターで「生中継」も

ツイッターで「生中継」も  
りして理解を深め、行事の特徴である大きなわら人形やたいまつ作りにも加わってきた。今年行事を広く知ってもらおうと、準備の様子もツイッターで発信

し、生徒約20人が参加した当日の様態も「生中継」。ツイッターを見た民俗学専攻の大学院生が茨城県から当日、見に来てくれるなど、手応えもあった。

同校の活動報告は今夏、福知山公立大学(京都府)が行う地域活性化策コンテストで佳作に入选。同大教員から行事の魅力を伝える冊子作りを勧められ、7月から取り組んできた。冊子は12センチ四方の大きさでカラー14ページ。「dynamis

「(タイナミック)」、「(Font) (クラウド)」。などAからZで始まる単語に寄せて、生徒らが「燃える炎とともに人々の心を燃え上げる」、「大地がすすごい、米や野菜が育つんだから」などと行事の情景や自然への思いをつづり、自分たちで撮った写真もふんだんに使った。平安時代末期の武將が由来とされるわら人形の成り立ちを描いた漫画も掲載。イベントなどで配られる予定だ。

行事の準備から関わってきた3年木村美穂さん(17)は「たいまつや人形作りを通して、お年寄りから絶対にはびかないひもの結び方など昔の知恵を教わった。地元の人と楽しく交流できる貴重な機会だった」と振り返り、伊藤馨さん(17)は「私たちの取り組みで行事に関心を持ってくれる人が増え、地域が元気になるはず」と話して、後参加したいと話していた。

# Ⅱ部

2019年度5月からの活動

## 1 他の虫送りの調査

### 1) 三重県熊野の虫送りの調査

調査日：2019年6月8日

地域：熊野市丸山千枚田

参加者：提灯を購入した人々

中心：丸山千枚田の虫送り実行会

行事内容：虫送り行列

北山砲発射

花火打ち上げ（熊野世界遺産登録15周年記念事業）



【虫送りのチラシ】

### 2) この調査地を選んだ理由

昨年は、尾張のもう一つ常滑市矢田地区の虫送りを調査し、祖父江の虫送りと比較した。今年は、もっと違うところを調査しようとしていた時に、世界遺産で有名な三重県熊野市で虫送りが行われていることを先生に教えてもらった。

毎年、新聞やニュースで取りあげられ有名な虫送りと比較することで、祖父江の虫送りのことを深く考えることが出来ると考えた。少し遠い所だったので行くのが大変だったが調査に行くことにした。調査に当たって、先生の知り合いだった熊野市議員の久保智さんに案内してもらった。

### 3) 当日の様子

熊野市丸山千枚田の虫送りは1953年に途絶えたが、熊野古道が世界遺産に登録された2004年に、再び行われるようになった。

丸山千枚田は熊野市観光公社のホームページよれば

「慶長6年(1601)には2,240枚あったと記録されていますが、平成5年には約530枚まで減ってしまいました。しかし、この貴重な資源と伝統的な農耕文化を保護し後世に伝えていくことが極めて重要と考え、地元住民と紀和町(現熊野市)が一体となり平成5年より復元を開始しました。平成8年には1,340枚まで復活し、訪れる人に感動を与えています。」と説明がある。



初めてみる棚田にはすごく感動した。教科書でしか棚田をみたことがなかったが、実際に昔の人が、生活のためにあんな斜面を掘り、田をつくったということ事実に驚きを感じた。さらに1つの田が止まると他の田も止まってしまうということを知り、地域全体の協力が不可欠であることを知った。さらに1つ1つの田が小さいため手植えでとても手間がかかるということについても今回実際に見て初めて感じる事ができた。

私たちが丸山千枚田に到着すると、すでに大勢の人がいて驚いた。年配の方たちだけでなく家族連れの人でも多かった。中でも目立ったのが、カメラの三脚を置いて場所取りをしている人だ。少し離れた山の上からもフラッシュの光が見えた。田んぼのオーナーをやっている人も結構来ているという。



18:30 頃から、棚田におかれたキャンドルに火がともされた。全部で 1340 個。ちょうどその数は現在の丸山千枚田の数と一致するらしい。

#### 【火がともされた棚田】

虫送りのスタート地点丸山神社の前にはたくさんの方が集まり、虫送りが始まるのをまっている。その場でかけ声の練習が行われ、子どもたちの大きな声が山に響く。

行列に参加する人が手に持っている提灯は、1つ1000円で販売されているもの。これを購入した者が虫送りに参加できる。「立夏大吉」「鎮防火燭」と書かれた御札と一緒にもらうことができる。



【購入した提灯】



【御札】

午後 19:00 から虫送りの行列がスタートする。松明は 3 本、鐘や太鼓を鳴らし、みんなそれぞれ提灯を手に持ち、「虫送り殿のお通りだい」と掛け声を上げて、千枚田のあぜ道を進んでいく。

参加している人の多くは子どもたちとその保護者だ。子どもたちの元気のいい声が谷間に響いていた。松明は大きなものではない。急いで私達は、行列に参加した人の数を手に持ったカウンターで調べてみた。222人であった。まだ、薄明かりの残る中、虫送りの行列は続く、人々の提灯の明かりは小さく弱いために、あまり光らない。まだ薄暮のためにあまり見栄えのしない状態だった。



【222人が参加していた】



【松明3本、それも簡素なもの】



【虫送り行列の先頭： 竹に刺したお札や小さな太鼓、松明が見える】



【薄暮の中を進む】



【細い畦を進んでいく】



【夜空とのコントラスト】

虫送りを行っている中心の一人である丸山千枚田保存会会長の喜田俊生（72歳）さんに話を聞くことが出来た。「それまではこの住人の人が、実際松明と太鼓・鐘と大きな掛け声で虫を松明に寄せて、村はずれまでもっていった。」という。その後虫送りが行われなくなったのは「虫を連れていく必要がなくなったから。農薬があり、科学的に虫を殺すじゃない。それで虫を連れていく必要がなくなった。」と。



現在行っている虫送りは「…昔の行事をちゃんと再現をしたいということで、始まったのがこの行事です。だから今は松明をたたいて掛け声と一緒に、昔一番外れまで行ったようなコース、道をたどって、お寺で祈祷してもらったお札を持ってそこに置いてくるという行事に変わった。」と、また「ただ昔実際苦勞してやっていたことをどこかで引き継いでいきたいという思いがある。」という思いも教えてもらった。

現在の虫送りで使う松明は3本。それを道の途中で交換していく、その他行列に参加している人はみな提灯を持つ。薄暮の中を進んで御札を置いてくる。

はたして、これが昔の行事の復活であるといえるのだろうか。千枚田を照らす1340本の火もつい最近のものだ。昔はもっと松明も多く大掛かりなものだったのだろう。

行列に参加したのは222人。しかし、丸山千枚田を訪れた人はおよそ800~1000人ほど。それを考えれば、虫送りの行列に実際に参加する人は、全体の4分の1もいないことがわかる。虫送りを含めたイベントの規模自体は大きいですが、花火や景色の写真を撮るのがメインになっているという印象を受けた。もともとは害虫駆除のために行われていたが、現在では観光客向けのものという感じが強かった。松明はたった3本。提灯の光はあまり輝くわけではない。虫送りだけを単体で見るとずいぶん寂しい行事に感じた。

虫送りの行列が終わり、徐々に闇夜につつまれ、棚田のキャンドルライトが一面光り輝くようになったころ、20:00 から北山砲や熊野古道世界遺産登録十五周年の花火の打ち上げがあり、会場全体はクライマックスを迎えた。



【北山砲から火花が発射される】



【昼間見た北山砲】



【最後は花火で終わる】

#### 4) 調査を終えて

熊野の虫送りと祖父江の虫送りを比べてみると、熊野は「観光客向け」、祖父江は「伝統の保存」という大きな差があると感じた。熊野の虫送りの提灯やキャンドルライトなどはつい最近のものという感じが強い。虫送りを再び始めた当初は、地元の人ほとんど参加していなかったようだ。完全にイベントの運営が外部化されている。

それに対して、祖父江の虫送りは地元の小・中学校、高校、地域住民が行事を支えている。これはとても大きな違いだと感じた。熊野の虫送りは松明の数が少ない。祖父江の虫送りの松明と比べると、とても小さく感じた。掛け声があるという点でも祖父江とは違う。「虫送り殿のお通りだい」という謎の掛け声。これは熊野の虫送りが、もともと地域の子どもたちが集まって行っていた時の名残なのだろうか。よくわからない。

ネットや新聞には伝統行事の復活などと書かれているが本当にそう言っているのだろうかというのが率直な感想だ。

ただ、熊野の虫送りは、これはこれでいいのかもしれない。過疎化が進む地域では高齢者が増え、町おこしができなくなってしまいよりいっそう過疎化を促進している現状なのに対し、こうして観光資源を作り、他地域の若い人材の協力のもとで、町おこしをしていくのは現代の社会変化に伴っており本来の目的とは変わっているとしても、そういった形で伝統が受け継がれていることも素晴らしいことだと思いました。実際、イベントとしては大成功である。毎年、たくさんの方が訪れているし、きれいな景色がツイッターやInstagramに上がることによって、多くの方が千枚田のことを知り、また人が集まる。地元経済も潤う。このようなことはやりたいと思ってできるものではない。

一方で、「祖父江の虫送り」は虫送りという行事で見たところ、有名な熊野の虫送りに決して負けていない。いやむしろはるかに優れて、胸を張って誇れる行事であることが認識できた。これが分かっただけでも、今回調査したことは本当に良かった。熊野の虫送りがあれほど騒がれるなら、「祖父江の虫送り」はやり方次第でもっともっと魅力を発信できることを肌で感じる事が出来た。

## 5) 丸山千枚田保存会会長 喜田 俊生さんからの聞き取り全文

### 虫送りというのはいつからいつまでやっていたんですか

やり始めたのはよくわからないんですけど終わったのは昭和 28 年。生まれてないよね。

### 生まれてないです

そうだね。僕が 5 歳の時やから。それまではこの住人の人が、実際松明と太鼓・鐘と大きな掛け声で虫を松明に寄せて、村はずれまでもっていった。これが虫送りの行事だった。その今はなぜやらなくなったかという虫を連れていく必要がなくなったから。農薬があり、科学的に虫を殺すじゃない。それで虫を連れていく必要がなくなった。ただいまもう何回目だろう。昔の行事をちゃんと再現をしたいということで、



【虫送り出発地点の喜多さん】

始まったのがこの行事です。だから今は松明をたたいで行ったようなコース、道をたどって、お寺で祈祷してもらったお札を持ってそこに置いてくるという行事に変わった。だから本来は松明に虫を引き寄せていくんだけど、今は行列してセレモニーになってしまった。だって今虫がないんだもん。もともとね、虫が発生するのはだいたい 7 月から 8 月この時に稲の実にカメムシとかウンカとか病気を運ぶ虫をみな連れて行った。それが始まり。今各地区で虫送ってやってますね。三重県でも紀北町とかああいうとこでこの前あったのかな。小学生や一般の人たちが行列してやっていた。丸山では三大イベントの一つが虫送り。田植え、稲刈り、虫送り。この三つがだいたい 1000 人ちかくの人を集めて行事をやろう・・・。

### つまり参加型なんですね

そう。だから若い人いるじゃないですか。自分たちのようにね。そういうのを狙っている。年寄りたちは若い人のエキスを吸い取ろうと。そういうのが狙い。虫を連れてくるんじゃないくて人を連れてくる。(笑) それが本来の狙い。僕らのね

### 何人ぐらい集まるんですか

今日はね新聞発表まだわからないんですけど。一応 1000 人くらいは来るとみてるんですけど。

### え～すごーい

昨日まで天気悪かったじゃない。それで少し出足わるいかな。ひそかに少ないかなとちょっと思っていたけど。テントの前に結構集まってきたので、まあ少なくとも 800 は来るかな

え～すごいな～

人口密度がこれで800くらいになるのか。(笑) 普段30人とかそんなもんですから。

**最初復活させたときは何人ぐらいでやってたんですか？**

いやあのときはね、僕もよく記憶ないんだけど、それでもやるって言うて5・600。結構集まっていた。だから、これは今実行委員長やってくれてる新谷進っていうんだけど。これがねいろいろなところに顔が利く人で「やるからよって」というと結構人が集まる。多分次の実行委員長変わったとたんちょっと減るかもしれない。今の実行委員長についている人脈でそうとうな人数呼んでる。というのもある。

**丸山千枚田にかかわっている人が多いんですか**

そうですね。今日もちろちら見えているんですけどオーナーさん結構来てるんです。愛知県とか。もう日ごろからここにきてくれる都会の人。特に三大イベントじゃなくて、草刈りボランティアやりたいとか言うて来てる方、さっきも見受けられたので、ここをあの一景色はいいんで、それだけじゃないんだけど、保存会長の人柄にもよるんですけど(笑)。あの来てくれて、気さくに話してくれる。それからね、今まで地元の人あまりよらなかったんだけどここ3年くらい前からね相当地元の人に来てくれる。特にその一あの一熊野古道の世界遺産登録から今年15年なんだけど、10年目の時に花火やったの、その前にもちょっとやったんだけど、花火というのに集まる人。結構いるんだよね。そこにずーとカメラ並んでいるんだけど、ほとんど花火なんだ。千枚田どうでもいい。こんなのは。山谷に映る花火に絵を撮りたいと言うて結構集まる。ただカメラマン同士の集まりはすごく人を寄せてくる。だいたい都市からきている。それも一つの宣伝なんですね。この田植えの後の夕日を撮りに来る人たちが「虫送りあるよ」と言うて、今日はいつものそうね10倍くらいは来ている、もっと来てるかもしれない。カメラマン、そう高級カメラずらーと並んで、みんな売っちゃたらいいね(笑) そうとう入るよね。

**実行委員会は今何人ぐらいでやっているんですか**

実行員会の役員が10人くらいかな。

**おいくつくらいの方がやっているんですか**

聞きたい？若い方がいい？(笑) あの一実行委員長がだいたい60くらいだからそれから僕が7つ上だから。事務局が若いだよね。役場の職員がだいたい40台、若くても40。君らより倍くらい違うか。お父さんくらい。そういう年代だと考えてくれればいい。お父さんが言うようなことを言うわけだ。勉強せよとか

**虫送りが復活したのは2007年、2004年でしたっけ？**

間違いない。世界遺産登録の年。

## そうですね。復活させるまでにはどんな経緯があったんですか

これがねほとんどわからない。これは新谷実行委員長に聞くのが一番いい。僕は10年前から参加しているからそれまでのいきさつはよくわからない。僕はこっちに来てから11年目。もともとこの山の中じゃなくて、熊野市の大都会にいたから（笑）大都会（笑）海岸部にいたので。虫送りが今けっこう全国でテレビなんか放映されているのを見ると、みんなこうイベントタイプ。虫送りって実際虫を追い払う必要なくなっている。これはもう間違いない。ただ昔実際苦労してやっていたことをどこかで引き継いでいきたいという思いがある。それからこの地区というのは日頃あんまり人が集まらない。例えば、熊野市のなんて言うのかな、地域復興のために、都会の人との交流は必要だから、呼んで、呼べたら呼ぶ。地域にお金を落としてもらおう。都市というのはなんぼでもお金を落とすところがあるんだけど、田舎にはないんだよね。こういうことをやることによって田舎にお金を落としてもらおう。そういうのが大きな目的かも知れない。後は久保先生（私達を案内してくれていた熊野市議員さん）にもう少し聞けばいいかもしれない。

ありがとうございました。

## 2 今年の情報宣伝活動

### 1) ここまでの活動

今年も SNS による宣言活動を行っている。新たにアカウントをとることも考えたが、昨年のアカウント引き継ぐ方が、宣伝効果が強いと考え、写真等を入れ替え継続している。先輩たちも虫送りのツイッターが再開されたことを喜んでくれた。

Twitter ホーム モーメント キーワード検索 アカウントをお持ちの場合 ログイン

ツイート 184 フォロー 195 フォロワー 128 いいね 42

フォローする

**祖父江虫送り**  
@Mushiokuri\_S

愛知県立吉和高等学校による、「祖父江町虫送り」の地域活性化応援アカウントです!! 去年の3年生のアカウントを受け継いで今年も3年生で活動しています。祖父江に伝わる伝統行事を知ってほしい、見てほしい、来てほしい!!!

◎ 愛知県 稲沢市 祖父江町  
📅 2018年5月に登録

ツイート ツイートと返信 メディア

★ 固定されたツイート  
祖父江虫送り @Mushiokuri\_S - 5月20日  
今年の祖父江虫送りの日時は7月6日、愛知県稲沢市立牧川小学校でやります。情報が入ったらまたツイートします!!

祖父江虫送り @Mushiokuri\_S - 12時間  
虫送りAtoZ 📷 Q  
quaint 非日常

Twitterを使ってみよう  
登録してあなただけのタイムラインを作りましょう  
アカウント作成

世界のトレンド  
津波注意報  
山形県・新潟県・石川県に津波注意報 震度6の地震 気象庁

祖父江の虫送りの日程や簡単な感想と昨年先輩たちが中心となって作成した「祖父江の虫送り AtoZ」を中心にツイートしている。



前日まで、SNS によって宣伝活動を続ける予定である。

## 2) 当日の宣伝活動の予定

### ① 昨年作った「ATOZ」を当日配布。

現時点で虫送りの魅力をきちんと伝え事が出来る小冊子であると考えている。  
保存用の数冊を残して当日に配る予定である。

### ② 当日リアルタイムにツイッターで情報活動を行う

外部に向けて、実盛人形、松明の作成の様子。夕方から始まる虫送りの行列を、SNS を利用してリアルタイムにその魅力を発信する予定である。

現在効果的な情報発信のために、役割分担などを話し合っている。

## まとめにかえて

今年も祖父江の虫送りが7月6日に行われる。江戸時代から続くこの行事を大切にしたいと考えている。

昨年は虫送りに参加し伝統行事を楽しむと同時に情報活動を外に向けて行った。その中で地域活性化を考えているうちに“地域”と“外部”と”世代を越えて”多くのつながりと自体の大切さを強く感じた。また、常滑の虫送りと比較することで祖父江の虫送りを相対化した。今後の継続のためには工夫が必要であることを感じただけでなく、担い手の方が必死に頑張っているからこそ、今があることを痛感することができた。

今年、祖父江の虫送りの前に、「熊野市丸山千枚田の虫送り」を調査することができた。全国ニュースで取り上げられる有名なもの。実際、翌日ほとんどの新聞がカラー写真付き記事で扱っていた。集まる観客も1000人を越える。それも全国から観光客が集まってくるこの行事、さぞかし素晴らしく勇壮な行事だろうと期待して調査に入った。

結論からいうと「虫送り」という行事だけで考えるとちょっと期待外れだった。確かに千枚田そのものが美しい上に、棚田一つ一つがキャンドル飾られ幻想的な風景が広がる。夜空に、北山砲から放たれる火花や、谷間にあがる花火が夜空を照らす。音は山々に響き渡る。全てをひっくるめてた行事としては圧巻だった。丸山千枚田保存会長の喜田さんが認めるように、キャンドルで照らされた棚田の風景や花火や放たれた北山砲を見るために多くの人が来ている。虫送りという行事は人を集めるための手段として使われているにすぎないという印象を受けた。

一方、「祖父江の虫送り」は巨大な松明一つ一つを手作りで時間をかけて作り、それを地域の子どもや地域の人々が抱えて行列を行う。鐘や太鼓も本当に本格的なもの。江戸時代と同じ形を現代に残そうと地域が本当に努力をしている。クライマックスで、実盛人形を昇天させるシーンは本当に荘厳である。虫送りという行事で考えた時、あの有名な「熊野の虫送り」と比較してもひけをとらないどころか、数倍勝っているもの、まさに地域の誇りだと断言が出来るものだということが分かった。まさに目からうろこである。

確かに大きな扱いを受け観光客が来れば地域が一時的に活性化するかもしれない。でもそれがどんな素敵な行事でも、どんなすばらしい特産品を作り出したとしても、もし、地域の人がそれに誇りを持たなかったら効果は薄れてしまう。地域活性化でまずは大切なのは、そこに住んでいる人がその地域に、その地域の行事に誇りを持ち、愛することだと思う。

私たちは、今回の調査を通して「祖父江の虫送り」がいかに素晴らしいもので、全国のどこに紹介しても恥ずかしくない、地域の誇りになるものだと確信できるようになった。もしかしたら、地域の人はこのことに気付いていないのではないだろうか？

地域どころか、担い手としてこの行事を中心的に行っている方々もそこまで感じていないのではないか、そんな思いを強くした。これを伝えるのも私達の役割かも知れない。この行事は魅力が一杯だし、観光的にも十分に将来性もあると感じた。

今の時点で、高校生の私たちにできることは何か？

第一に、昨年と同じように外部に向けて、情報宣伝活動を続けていく。

第二に、当日、実盛人形、松明作りに集まった地域の人としゃべりながら、この虫送りがどれほど、貴重で素晴らしいものであるかという私たちの思いを伝える。

第三に、この貴重な「祖父江の虫送り」を引き継ぐために、私たち自身が担い手の一人として、行事を心から楽しみ、この素晴らしい文化を、そして地域を引き継いでいくこと。実はこれが一番大切なのではないだろうか。

今年の虫送りには杏和高校生として、過去最大の25人ほどが参加する。先生に聞くと参加を始めた6年前は8人ほどだったそうだ。毎年参加者が増え続け、いまでは行事存続のためには、欠くことのできない存在にまでなっている。今回は、今までかかわってきた多くの卒業生の先輩も参加する。この虫送りのために大学の下宿先から、わざわざ帰省し参加する先輩もいるということも聞いている。先輩達と加えるとゆうに30人を超すことになる。確実につながりは増えている。それほど私たちにとっても大切な行事になっている。

地域活性化は遠い所にあるのではない。何か難しいことすることにあるわけではない。地域にかかわる人が、地域のことを愛し、地域のことを考え、地域に誇りをもち活動するところにあるのではないか。高校生の私たちが出来ることは限られている。微力かもしれないが、「祖父江の虫送り」を通して、この素晴らしい地域を、そして文化を引き継ぎ発展させていきたいと考えている。

「民泊を使って出雲市の観光客を増やすには？」

「How can we use Minpaku to increase tourists in Izumo？」

島根県立出雲高等学校普通科3年

班名：政6A

メンバー氏名：◎<sup>アンドウ</sup>安藤 <sup>ハルカ</sup>遼香 ○<sup>ヤマネ</sup>山根 <sup>タイガ</sup>大河 <sup>エスミ</sup>江角 <sup>トモヒコ</sup>智彦 <sup>オソエ</sup>尾添 <sup>コタロウ</sup>虎太郎  
<sup>ナカオ</sup>中尾 <sup>エリカ</sup>瑛理香

### Abstract

Currently, the number of tourists to Izumo is the largest in Shimane Prefecture. However, there are more places to stay in Matsue than Izumo. Therefore, we would like to increase the number of tourists who stay in Izumo by using Minpaku(=private lodging). Also, the number of vacant houses in Izumo is increasing. We would like to increase the number of Minpaku by using them. Minpaku is a new style of staying and it is not well-known in Japan still. We would like to introduce Minpaku to more people by cooperating with local government.

### 1. 研究の背景

平成28年度の島根県商工労働部観光振興課の『島根県観光動態調査結果』によると、出雲市は他の市町村に比べて、観光入込客数が最も多い。一方、宿泊する市町村では松江市が58.6%、次いで出雲市が15.7%となっており、全体の約7割(74.3%)を占めている。また、宿泊施設数(旅館・ホテル・民宿)においては、松江市については私たちの調査不足もあり最新データが見つからず、平成17年度と古いですが、松江観光協会『松江市の観光の現状』によると、133軒であった。出雲市については、出雲観光協会『出雲市内宿泊施設一覧』によると、現在、66軒であった。時期が違うため、一概に比較はできないが、現時点でも出雲市より松江市の方が、宿泊施設数が多いことが想定できる。これらのことから、出雲市は観光入込客数が最上位であるのに対し、宿泊者や宿泊施設が少ないことが分かる。

そこで、2018年に法改正された民泊を活用して、宿泊を伴う観光客の増加をはかりたいと考えている。民泊を法改正され、新しい可能性を秘めていると考えているからである。また、別頁で述べるが、出雲市の空き家も増加している。少子高齢化を背景に増加している空き家の有効活用にもつながり、地域活性化にもつながると考えている。

## 2. 研究の目的

「民泊に宿泊する観光客と民泊ホストとの密な交流が、リピーターが増加し、観光客が増えるのではないか」という仮説のもと、検証を進めていきたい。なお、「密な交流」とは大多数が宿泊するホテル・旅館と比較して、少人数の宿泊ですむ民泊は、ホストが接客対応しやすいため、密な交流ができると想定した。

## 3. 研究の内容

### (1) 研究の方法

- 仮説を検証するために、文献やインターネットを活用して、島根県内における出雲市の観光動態や民泊の現状（全国と出雲市の比較、民泊のメリットやデメリットなど）を調査する。
- 出雲市で実際に民泊をしておられる方にインタビュー調査やフィールド調査を行い、民泊の実態に迫る。

### (2) 研究の内容と結果

#### I 島根県の観光入込客数について

表1 平成28年度の島根県の観光入込客延べ数

区分	総数	内訳	
		県内客	県外客
観光入込客延べ数(千人地点)	33,082	6,507	26,575
構成比	100,0%	19,7%	80,3%
対前年増減	-0,3%	-7,2%	+1,6%

平成28年度『島根県観光動態調査結果』「調査結果の概要Ⅱ」(P.4) 島根県商工労働部観光振興課より引用

上記表1より、平成28年度の島根県の観光入込客延べ数は33,082千人であり、前年と比べると、約89,000人(-0.3%)減少している。特に県内客の減少が目立っており、県外客は微増である。この変動要因として、『島根県観光動態調査結果』には以下の点が挙げられている。

1. 「米誌ランキング」の連続日本一選出に伴う足立美術館の露出増加
2. 5月のゴールデンウィーク、9月のシルバーウィークの目並びの影響
3. 5月と9月の悪天候と、鳥取県中部地震
4. 地方への訪日旅行の増加
5. 広島、岡山、米子への香港定期便就航
6. クルーズ客船の寄港数増加

## II 島根県内の市町村及び観光地・観光施設ごとの観光入込客数について

『島根県観光動態調査結果』によると、市町村及び観光地・観光施設ごとの観光入込客延べ数の上位 10 箇所は以下のとおりである。

表2 島根県内の市町村の観光入込客数

市町村名	入込客延べ数 (人地点)	対前年度 増減
出雲市	11,984,189	-4,1%
松江市	10,261,670	+2,0%
浜田市	1,713,068	-6,1%
安来市	1,552,884	+20,6%
雲南市	1,529,646	+3,2%
大田市	1,387,435	+0,4%
津和野町	1,203,519	-0,8%
益田市	985,572	+0,2%
奥出雲町	805,116	-1,0%
邑南町	379,613	-6,9%

平成 28 年度『島根県観光動態調査結果』「調査結果の概要 II」(P. 7) 島根県商工労働部観光振興課より引用

表3 島根県内の観光地・観光施設ごとの観光入込客数

観光地・観光施設名	入込客延べ数 (人地点)	対前年 増減
出雲大社(出雲市)	6,058,000	-0,3%
日御碕(出雲市)	979,830	-17,2%
島根ワイナリー(出雲市)	750,073	-7,2%
玉造温泉(松江市)	658,595	+2,3%
三瓶山(大田市)	642,100	+4,0%
足立美術館(安来市)	635,237	+46,4%
石見海浜公園(浜田市)	600,550	-2,2%
松江城公園(松江市)	586,999	+5,6%
美保関(松江市)	559,959	+5,4%
太鼓谷稻成神社(津和野町)	557,559	+0,4%

平成 28 年度『島根県観光動態調査結果』「調査結果の概要 II」(P. 7) 島根県商工労働部観光振興課より引用

表2をみると、先述したとおり、島根県内の市町村の観光入込客延べ数が最も多いのは出雲市の11,984千人(−4.1%)、次いで松江市の10,262千人(+2.0%)であるが、前年度と比較すると、出雲市は減少していることが分かる。

表3より、島根県内の観光地・観光施設ごとの観光入込客数については出雲大社への観光入込客が最も多いが、前年度と比べて減少しており、その他の出雲市の観光地・観光施設への観光入込客も前年度より減少していることが分かる。一方で、松江市の観光地・観光施設への観光客数は増加している。

これらのことより、出雲市への観光入込客は島根県全体では総じて多いが、減少しているため、民泊を活用して、地元民ならではの観光地・観光施設を観光客に紹介し、出雲市への宿泊を伴う観光客を増加させることが必要ではないかと考えている。

### Ⅲ 民泊とは

旅行者などが、一般の民家に宿泊することを一般的に意味する日本語の表現で、特に、宿泊者が対価を支払う場合に用いられる。日本の法律では「住宅宿泊」などと呼ばれ、その事業で人を泊める日数が年間180日を超えないものである。登録するには地方公共団体へ届出を提出する必要がある。

民泊の利点、課題点については以下の点が挙げられる。

#### ○民泊の利点

- ①現地の人々の生活を体験できる
- ②民泊ホストと交流することによって、おすすめのお店や観光地などを教えてもらうことができる（あまり知られていない場所も含め）
- ③和式、洋式にとらわれていないから、様々な種類の民泊に泊まることのできる（子民家風、カフェ風など）

#### ●民泊の課題点

- ①利益になりにくい
- ②衛生面、事故のリスクが高まる
- ③法整備は整ったが、騒音などによる近所とのトラブル、宿泊客のマナー問題

民泊を活用することは環境面、マナー問題などで課題点はあるが、ホテルや旅館と違い、ホストと直接交流ができ、その地域の知られざる観光スポットを紹介してもらえるなどの利点がある。

そして、2018年6月15日には民泊新法（住宅宿泊事業法）が施行された。この法律の目的は、衆議院の「閣法 第193回国会 61 住宅宿泊事業法案」によると、「我が国

における観光旅客の宿泊をめぐる状況に鑑み、住宅宿泊事業を営む者に係る届出制度並びに住宅宿泊管理業を営む者及び住宅宿泊仲介業を営む者に係る登録制度を設ける等の措置を講ずることにより、これらの事業を営む者の業務の適正な運営を確保しつつ、国内外からの観光旅客の宿泊に対する需要に的確に対応してこれらの者の来訪及び滞在を促進し、もって国民生活の安定向上及び国民経済の発展に寄与することを目的とする。」と記載されている。

(衆議院「住宅宿泊事業法案」 第一条より)

この法律は、「国内外からの観光旅客の来訪及び滞在を促進する」ことを目的としていることが分かる。2020年に東京オリンピックが控えているため、その対応を兼ねていることは想像がつく。また、「これらの事業を営む者の業務の適正な運営を確保しつつ」と記載されており、先述した民泊の課題点を踏まえてのことであろう。つまり、届出制度や登録制度の措置を講ずることで、経営者の適正な運営を確保させて、観光客を促進させるということである。

しかし、届出制度や登録制度の措置を講ずるということは、これ以前はなく、言い換えれば、民泊運営に規制をかけることになる。民泊新法の陰には、ホテル・旅館業界の利益を保護するという配慮があるのではないかと考える。

実際に、この法律の影響として、民泊を営業する人は減少した。旅館業法の許可を得るには建築基準法や消防法の基準を満たす新たな設備投資が必要で、民泊経営者の小川さんは「住民がボランティア的に行っており、資金の余裕がない」と吐露。県が12月に把握する予定の申請状況は低調が見込まれる。県には「面倒だ」「これを機にやめる」などとの声が届き、県しまね暮らし推進課の新田誠課長は「法律に沿うとさまざまな課題が生じるため、低調なのは想定していた」と語った。

利益が見込めないうえに営業を登録制にしたことにより、その手続きが煩わしいため営業者が減ったと考えられる。

全国の民泊の例をみると、物件数は全国で1万件を超えたが、多くは都市部にあり、政府の期待と裏腹に地方で普及は進んでいない。自治体に営業届けが受理された物件は約1万1千件(11月末現在)。都道府県別では、東京と北海道、大阪で計約7千件を占める一方、秋田や山形、福井など、1桁にとどまっている地域もある。一方島根県では、法律が施行された6月15日時点での届け出は出雲市内の4件だったが、同月内にさらに4件の届け出があったほか、その後も毎月1～3件のペースで増えている。

島根県内の市町村別では、出雲市が6件で最多である。そのほか松江市で3件、浜田市で2件、雲南、益田、江津各市、奥出雲、津和野、美郷、隠岐の島各町で各1件となっている。形態としては、すべて民家一棟または一部を貸し出す形である。また、観光庁の集計によると、県内の民泊宿泊者数は6～7月が32人だったものの、8～9月には211人

に増加し、うち約3割が外国人で、中国からが一番多く、フランスや香港からが続いた。外国人観光客が多い都市部では企業が民泊に次々と参入していることもあり、勢いの差が広がっている。また、民泊新法で営業できる期間を狭めたり、届け出時に新法の規定以上の書類を求めたりする自治体があることも、普及を妨げていると指摘されている。

他方、島根県では、県独自のルールに基づいて宿泊体験などを行ってきた「しまね田舎ツーリズム」を実施する農山漁村の民家にも県は「民泊」への登録を促している。届け出の窓口になっている県薬事衛生課によると、宿泊者のゴミや騒音などのトラブルは、県内ではまだ確認されていない。県は、民泊法施行を機に協議会に登録する宿泊施設（17日現在で220施設）に対して、民泊か、旅館業法に基づく簡易宿所（民泊など）への移行を促す方針に転換し、県しまね暮らし推進課は、書類や手続きなどの説明会などを開いている。同課は「法律に基づく民泊が増えることで旅行会社と連携が進み、さらにPRできる」と期待すると語っている。

（平成30年12月18日（火）読売新聞、平成30年12月17日山陰中央新報より）

「しまね田舎ツーリズム」とは、農山漁村で、地元の人々との交流を通して、農林漁業体験やその地域の自然や文化、くらしに触れることで、例えば、米作り体験なら、田植えや稲刈りなど、足を運んで農作業を手伝う。田舎のお父さんやお母さんの宿に泊まる。その間に地元の人たちと温かな交流が生まれ、いつのまにか第二のふるさととなる……。単なる観光旅行とは違い、手に入れる感動もより深く、大きくなることを魅力としている。

（しまね田舎ツーリズムポータルサイトおいでよ！しまね「田舎ツーリズムとは」  
<http://www.oideyo-shimane.jp/about/>より）

「しまね田舎ツーリズム」は、「地元の人々との交流を通して、農林漁業体験やその地域の自然や文化、くらしに触れ」、「田舎のお父さんやお母さんの宿に泊まる」ことで「第二のふるさと」となってくれることを期待しているが、この考えと民泊を融合させることで新たな展開が可能ではないかと考えている。

さらに、私たちは出雲市で実際に民泊を経営しておられ、また本校の課題研究の外国人指導員として指導してくださっている上田麗敏（リーミン）氏の民泊に訪問しお話を伺った。

民泊の良いところは、国内外問わず様々な場所から宿泊客が来るため良い刺激になり、意欲が湧くこ



写真1 外観

とであると述べられた。また、上田氏は予約された時から宿泊者と情報交換を行うことで宿泊者と交流を深め、自身が知っているおすすめの飲食店や観光

地を伝え、宿泊者にとって居心地のよい環境を作るように努めておられる。それによって、再訪したいという宿泊者もおられるとのことである。一方で、民泊の課題点は、宿泊客のマナーが悪い時があると述べられた。やはり、法整備がなされてもマナーの悪

さは懸念される問題の一つである。また民泊では、宿泊客を対応するためのホストが宿泊先に一緒にいないといけないと法律で定められているが、それにより拘束される時間が長くなることがデメリットであると述べられた。このように、民泊新法による規制が多いため民泊の経営が窮屈になっていることを上田氏は指摘された。



写真2 インタビュー様子

#### IV 空き家について

私たちは民泊を営業する際に、空き家を有効活用することが地域活性化につながる」と述べた。そこで、空き家の問題点、島根県及び出雲市の空き家の状況などについて調査した。

##### i 空き家が所在することの問題点

###### ① 周辺環境の悪化

空き家等の敷地に草木が生い茂り、動物等のすみかになり、近隣へ被害を及ぼす問題が発生する。野生動物の糞尿やごみの不法投棄により衛生的な問題も発生する。

###### ② 景観の悪化

空き家等が管理不全のまま放置されると、外観が悪化し、その周辺の景観を損なう場合がある。

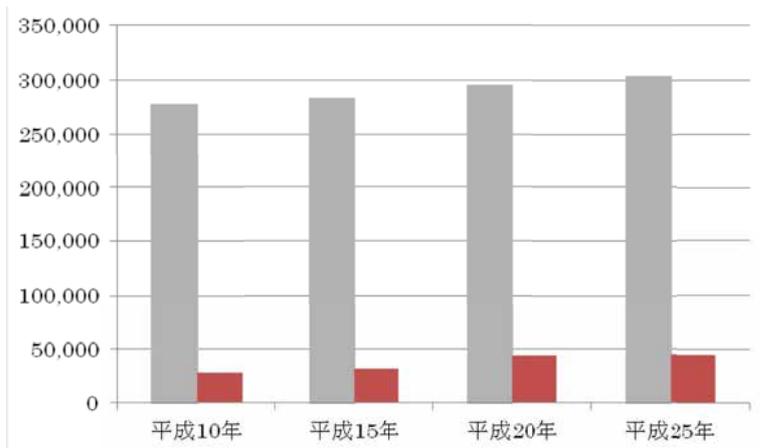
###### ③ 倒壊などによる事故の懸念

空き家等の老朽化が進行した場合、自然災害などの影響を受けやすくなり、地域住民の生命、財産へ危害を及ぼすおそれがある。

###### ④ 地域力の低下

人口が減少し、空き家等が増加することにより、地域の維持が困難となり、地域力の低下につながる。

## ii 島根県の空き家の現状



※左の柱が総住宅数、  
右の柱が空き家の数

図1 島根県の空き家の現状  
出雲市『出雲市空き家等対策  
計画(案)』より引用

## iii 出雲市の空き家の現状

表4 出雲市の空き家の現状

地域	棟数	A	B	C	D	判定不能
出雲地域	1,101	843	110	42	20	86
平田地域	527	409	49	28	20	21
佐田地域	102	63	11	11	8	9
多伎地域	58	41	8	5	1	3
湖陵地域	217	165	25	14	6	7
大社地域	324	260	31	12	6	15
斐川地域	241	190	15	7	2	27
計	2,570	1,971	249	119	63	168

老朽度判定区分判定	状態	点数
A	すぐに住めそうなもの	0点
B	少し手を加えれば住めそうなもの	1～25点
C	改築など手を加えなければ住めないもの	26～90点
D	老朽化がはげしく危険なもの	91点～

※判定不能とは

判定項目である傾斜・屋根・外壁のうち、1項目でも外観目視できなかったもの

出雲市『出雲市空き家等対策(案)より』引用

次頁の地図は、実際に出雲市の空き家バンクに登録されている空き家の所在を示したものである。

### 〈出雲市の空き家マップ〉



出雲市役所総合政策部「いずも暮らし いずも空き家バンク」  
[http://izumonakurashi.jp/teiju/akiya/akiya\\_list/](http://izumonakurashi.jp/teiju/akiya/akiya_list/)をより作成  
 地図：『地理院地図』（国土地理院 <http://maps.gsi.go.jp/>）

図1より、島根県内の空き家は増加傾向にあることが分かる。出雲市内においては表4より、空き家の数は出雲地域が一番多い。また、A～D判定でいずれも一番多い。言い換えれば、出雲地域にも多くの空き家が存在し、今後ますます増加することが懸念される。そこで、まずはA・B判定の空き家を活用することが急務ではないか。

空き家マップを見て分かるように空き家が主に一畑電鉄とJRの線路に沿ってある。このことから、このマップに載っている空き家で民泊をつくることで、車で来た宿泊客だけでなく、電車で来た宿泊客にも対応できる。

以下、空き家を民泊として活用する利点・問題点を掲げる。

#### iv 空き家を民泊として活用する利点・問題点

##### ○利点

- ①空き家問題の解消につながる
- ②空き家を再利用することによって、地域の景観がよくなる

③値段が物件によっては安い（出雲市の空き家バンクに登録されている物件の最高値は 23,000,000 円、最安値は 1,000,000 円、平均は約 7,600,000 円）

●問題点

- ①リフォームせずに使える物件がない→リフォーム時の費用がかさむ
- ②手間がかかる

上記のように費用や時間などで問題はあるが、民泊として活用することは観光客増加、地域活性化にもつながると考えている。

## V 民泊の活用方法案

私たちが考える民泊の活用案は以下のとおりである。

### ①体験型として提供

上述した「しまね田舎ツーリズム」と融合させたものであり、自分が実施可能な体験を宿泊者に伝えるとともに、地元民ならではの知られざるお店や観光地なども伝え、その地域の魅力を発信する。そこで交流が深まり、再訪したいと感じてくれるのではないかと考えている。

### ②「レンタルスペース」として貸し出す

この場合、民泊新法の届け出や旅館業法の営業は不要であり、「レンタルスペース」は特に大きな繁忙期・閑散期は無いので民泊を撤退することが可能である。例えば、〇〇サークルを週に1・2回開くことが挙げられる。出雲市であるならば、昨今、外国人移住者が多く、日本語サークルとして活用できないか。実際に上田さんも自身の民泊を活用して「サークルなないろ」というサークルを立ち上げ、日本語、英語などの語学教室にとどまらず、お茶教室などの文化に触れる活動もしている。

## VI 民泊のPRの方法

ここで重要なことが、民泊をどのようにしてPRしていくかである。現在、出雲市を例に見ていくと、先述したとおり、出雲観光協会『出雲市内宿泊施設一覧』によると、ホテル、旅館および民宿は 66 軒件掲載されているのに対し、民泊は一件も紹介されていない。また、つまり、自治体が民泊のPRに積極的ではないことが窺える。私たちが掲げる「民泊を使って出雲市の観光客を増やす」ためにも自治体との協力が不可欠である。

具体的なことは今後検討していく必要があるが、いずれにせよ官民一体となって民泊をPRしていくことが重要である。

#### 4. 研究結果の考察

民泊新法は観光客増加を目的として制定されたが、実は手続き等で業者が減少したことが調査より明らかになった。この法に則しながら民泊を営業するためには、上田氏のように民泊ホストとして、宿泊者として交流を深める工夫が必要である。また、田舎ツーリズムとの融合で新たな展開を生み出せる可能性があると考えた。これらを通して、また観光したいと思うリピーターが現れ、観光客が増えるのではないかと考えている。実際に上田氏の民泊では、「また行きたい」と思っている観光客がいる。ただし、空き家を使用する際の予算や、宿泊者のマナーの問題、PR方法など課題は山積みである。その課題を一つ一つ克服するためにも、行政との連携が不可欠である。

#### 5. 研究のまとめ

##### (1) 結論

観光客を増やすには、様々な課題がある。民泊新法が新しく制定され、民泊新法の施行により大幅に民泊経営者が減少したのはこの法律の負の側面であり、法律を見直す余地があると思われる。ただし、このような中で工夫を凝らしながら宿泊者と密に交流を深めることで、リピーターが現れ、観光客が増えるのではないかと考えている。具体的な行動として移していないので、仮説の実証には至らなかったが、上田氏の活動は私たちの案の一つの参考となった。また、現在しまね田舎ツーリズムに登録されていて、まだ民泊や民宿に登録していない物件を民泊にすることで、民泊の数が増え、宿泊者が今までよりも多く出雲に宿泊できるようになると考える。今は主にAirbnbなどの限られた情報源でしか民泊の情報を得ることができないため、民泊はホテルや旅館より浸透していないが、行政と連携をとることができれば、今よりは民泊の情報の発信が増えると想定している。

##### (2) 今後の課題

具体的に空き家を使用して民泊営業が可能であるか、また、営業ができたとして、私たちが示した案が実施可能であるか、それによって観光客が増えるのかデータを取る必要がある。さらに民泊が増えた場合、それに対応するほどの民泊業者が現れるかなど、課題を一つずつ解決していかなければならない。まず、急務なことは民泊を様々な人に認知してもらい、理解してもらうことである。そのために、現時点では出雲観光協会のホームページに民泊のページを設けることを考えている。

<参考文献等一覧>

- ① 島根県商工労働部観光振興課「平成 28 年島根県観光動態調査結果」(2017 年)  
[https://www.pref.shimane.lg.jp/tourism/tourist/kankou/chosa/kanko\\_dotai\\_chosa/H28kankoudoutai.html](https://www.pref.shimane.lg.jp/tourism/tourist/kankou/chosa/kanko_dotai_chosa/H28kankoudoutai.html)
- ② 出雲観光協会「出雲市内宿泊施設一覧」  
<http://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1456388426009/simple/syukuhaiku.pdf>
- ③ 松江観光協会「松江市の観光の現状」  
[https://www.kankou-matsue.jp/gyousei/program/index.data/index\\_\\_005.pdf](https://www.kankou-matsue.jp/gyousei/program/index.data/index__005.pdf)
- ④ 衆議院「住宅宿泊事業法案」(2018 年)  
[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb\\_gian.nsf/html/gian/honbun/houan/g19305061.htm](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_gian.nsf/html/gian/honbun/houan/g19305061.htm)
- ⑤ 山陰中央新報 (2018 年 12 月 17 日 (月))
- ⑥ 読売新聞 (2018 年 12 月 18 日 (火))
- ⑦ しまね田舎ツーリズムポータルサイトおいでよ!しまね「田舎ツーリズムとは」  
<http://www.oideyo-shimane.jp/about/より>
- ⑧ 国土交通省「空家等対策の推進に関する特別措置法」(2014 年)  
<http://www.mlit.go.jp/common/001080536.pdf>
- ⑨ 出雲市役所総務部防災安全課「出雲市空家等対策計画(案)」(2017 年 3 月)  
<http://www.city.izumo.shimane.jp/www/contents/1489464503681/files/houkoku6-1.pdf>
- ⑩ 出雲市役所総合政策部「いずもな暮らし いずも空き家バンク」  
[http://izumonakurashi.jp/teiju/akiya/akiya\\_list/](http://izumonakurashi.jp/teiju/akiya/akiya_list/)
- ⑪ 国土地理院『地理院地図』 <http://maps.gsi.go.jp/>

○ご協力いただいた方

出雲高等学校課題研究 外国人指導教員 上田麗敏様

令和元年6月20日

福知山公立大学  
「田舎力甲子園」ご担当者様

長崎県立宇久高等学校  
校長 前田由美子

2019地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」に係る書類について（送付）

貴学におかれましては、ますますご清栄のことと心よりお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

早速ではございますが下記の書類をお送りします。ご査収の上よろしくご手配を賜りますようお願い申し上げます。

記

研究要旨・報告等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1部

以上

「宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト」

その1 ガンガゼ魚醤油の醸造及び魚醤油を活用した商品開発

その2 観光客誘致に関する取組(観光雑誌編集とこれからの取組)

長崎県立宇久高等学校 普通科 第3学年

ナカムラ コウスケ ヒラタ ショウ ヨコヤマ ケイスケ ウチノ マナ カワバタ トモ ナカムラ モモコ  
中村 紘輔 平田 翔 横山 佳祐 内野 真菜 川端 智 中村 桃子

担当 川口 恭子  
電話 0959-57-3155

## 「宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト」

その1 ガンガゼ魚醤油の醸造及び魚醤油を活用した商品開発

<p>団体名 2年 地産食品開発班</p>	
<p>発表題目 宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト ～ガンガゼ魚醤油の醸造及び魚醤油を活用した商品開発～</p>	
<p>指導者名 川口 恭子、大久保加奈子、田中 颯真、山佐 菜月 生徒氏名 中村 紘輔、平田 翔、横山 佳祐、内野 真菜、 川端 智、中村 桃子</p>	
<p><b>1. 研究の背景・動機</b> 宇久島は五島列島の最北端にある、人口約2000人の小さな島である。島の主な産業は農業と漁業で、漁業を営む人は島民の約10%ほどである。宇久の漁協の方曰く、近年ウニの仲間であるガンガゼが増加し、その結果アワビやサザエなどの漁獲量が減少しているという。そのためガンガゼの駆除を年2回行っているが、駆除されたガンガゼの有効活用方法はなかった。昨年度宇久高等学校の2年生が、この駆除されたガンガゼを用いた魚醤油の開発に成功し、さらにその魚醤油の活用のレシピも考案した。本年度はその研究を引き継ぎ、よりおいしいガンガゼ魚醤油の醸造と魚醤油を活用したレシピ開発を行った。</p> <p><b>2. 目的・意義</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 駆除されたガンガゼや市場での商品価値が比較的低い魚を、魚醤油として加工することで有効活用する。</li> <li>・ 魚醤油を使ったレシピを考案し、魚醤油の汎用性や利用価値を高める。</li> </ul> <p><b>3. 研究方法</b></p> <p>①魚醤油の醸造 昨年同様、原材料としてガンガゼを使用。さらに市場での商品価値が比較的低いオジサンとイラを原材料として用い、食塩水と乾燥麦麴を混ぜ合わせて約7ヶ月間発酵させ、3種類の魚醤油を醸造した。</p> <p>②魚醤油を使った商品・レシピの開発 魚醤油を活用したレシピを試作・検討し、マドレーヌ、スイートポテト、ドレッシング、焼きおにぎり、うどんスープ、せんべい、みたらしだんごなどを考案した。また、あら茶房（宇久町平）に魚醤油を活用したレシピを考案していただき、料理への使い方などもアドバイスしていただいた。</p> <p>③産業まつりでの販売 11月11日の産業祭りにおいて、マドレーヌ、スイートポテト、ギョッキ（昨年度2年生考案のクッキー）を各100円で、各種魚醤油120mlを600円で販売した。商品パッケージは手書きの文字・イラストで作成。醸造過程の動画作成を行い、魚醤油のラベルにQRコードを貼り付けるなど、PRにも力を入れた。</p> <p>④成分分析 6月6日から約4週間おきに魚醤油をサンプリングし、遊離アミノ酸分析を行った。今年度醸造した3種類の魚醤油と昨年度醸造した2種類の魚醤油との比較、および産業祭りで実施したアンケート結果と成分分析の結果との比較検討を行った。</p> <p><b>4. 結果・考察</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 魚醤油については、成分分析の結果から発酵期間を長くしてもアミノ酸量が増えるわけではないことがわかった。また、材料に含まれるタンパク質量が多いほど魚醤油のアミノ酸量も多いことが考えられる。</li> <li>・ 魚醤油は他の醤油と比べて、塩分濃度が高い、冷めると香りが強くなるという特性があることがわかった。また数多くの試作の中で、うどんのだしやドレッシングは、作りやすく魚醤油のうまみも活かされており特に好評であった。だしやドレッシングはただの魚醤油よりも手軽に使えるため需要も高いと考えられる。</li> </ul> <p><b>5. 結論・今後の展望</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ガンガゼ魚醤油は、カラの部分は使わず、タンパク質の多い身の部分のみを使用する。</li> <li>・ 魚を用いた魚醤油においては、魚のタンパク質量を調べ、その数値が低い魚については分量を増やす。また、商品価値の低い魚の中でタンパク質量が多いものがあれば、魚醤油に使用することを検討する。</li> <li>・ 魚醤油の活用法として、より汎用性の高い2次加工品（ドレッシングやタレ）を開発する。</li> </ul>	



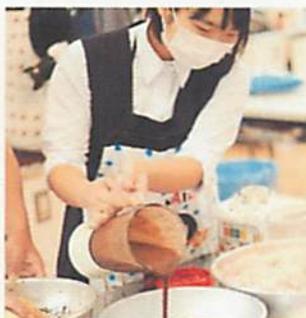
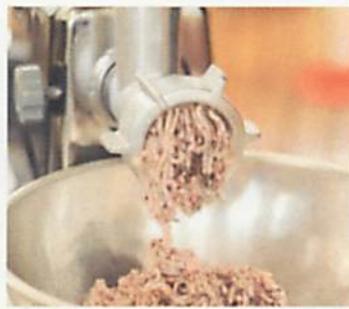
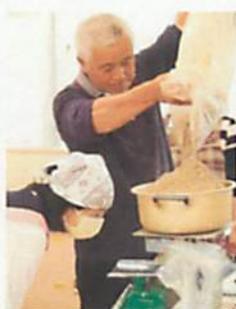
# 魚醤油作り



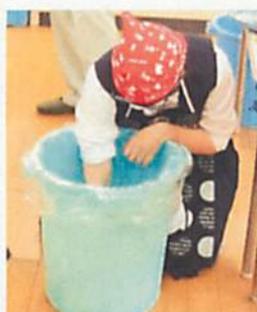
## 2年 地産食品班



ガンガゼ駆除見学  
一つ一つ網ですくっていて大変そうでした。



仕込み  
魚・麦麴・塩・水を混ぜて仕込みを行いました！



攪拌  
始めの一週間は毎日、後は二週間に一回かき混ぜます。

約7ヶ月熟成



火入れ・ろ過・瓶詰め  
思っていたよりもろ過するのに時間がかかりました。

### QRコード



QRコードを読み取ると、「魚醤油ができるまで」のムービーが流れるようにしました。

### ☆コメント☆

- ★思っていたよりも魚しょうゆを作るのは大変でした。
- ★作り始めたときはしょうゆになるか不安だったけど、徐々に水分が増えてきて最後には形になったので嬉しかったです。
- ★重労働できつかった！！
- ★初めは匂いがきつかったが、だんだんしょうゆに近づいてきて良かった。
- ★最初は、茶色がかかった色でしたが、発酵が進むにつれ、色が濃くなってゆくのが不思議でした。



完成

うま味は、主にグルタミン酸やアスパラギン酸などのアミノ酸によって生じる味覚である。醸造した魚醤油のうま味を評価するため、液体クロマトグラフィーで遊離アミノ酸の分析を行い、昨年度の魚醤油との比較を行った。

図1は昨年度・今年度の魚醤油の遊離アミノ酸量を、市販の魚醤油(小値賀産)を基準1として規格化したものである。図2は6/6~10/22の魚醤油のサンプルの総遊離アミノ酸量の変化を示している。

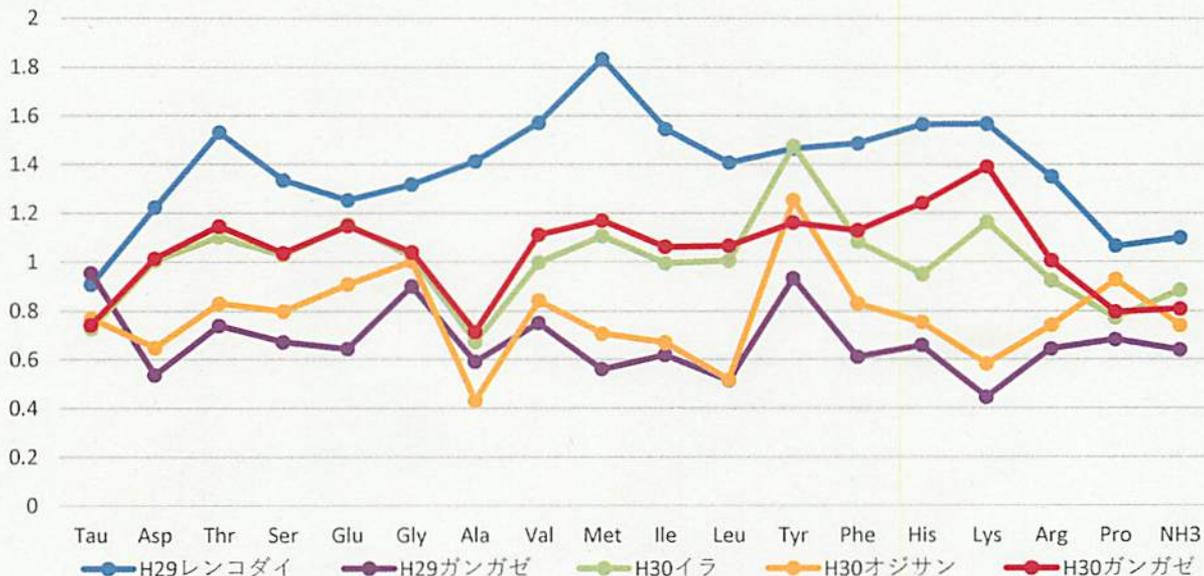


図1 遊離アミノ酸 市販品規格化パターン

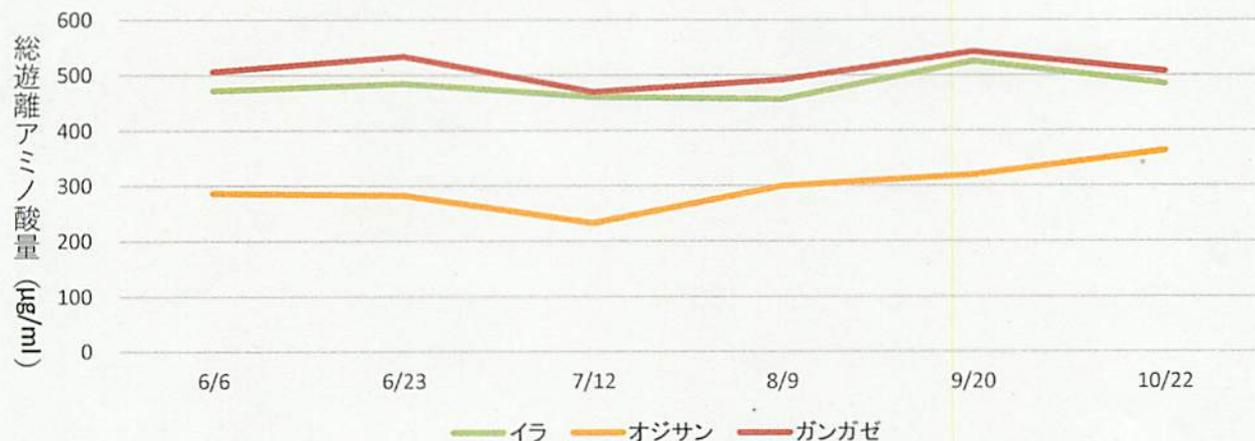


図2 遊離アミノ酸量の変化

## 結果

今年のガンガゼ魚醤油は昨年に比べグルタミン酸(Glu)やアスパラギン酸(Asp)の量は増加した。ガンガゼ魚醤油の総遊離アミノ酸量は、サンプルを採取し始めた6/6と終点の10/22で大きな変化は見られなかった。

## 考察

一般にウニの仲間の殻の主成分は炭酸カルシウム等が占める割合が多く、タンパク質含有割合は中身の生殖腺のほうが多い。魚醤油のアミノ酸は原材料のタンパク質が酵素により分解されることによって生じるため、ガンガゼ魚醤油の遊離アミノ酸量の増加については、醸造の際に使用する部分(昨年度 殻+中身(生殖腺) → 今年度 中身(生殖腺)のみ)の変更が大きく影響していると考えられる。

総遊離アミノ酸量の変化のグラフより、仕込み時に遊離アミノ酸量が0だと仮定すると、アミノ酸量の急激な増加は、仕込みから約1ヵ月半以内に起こると予想される。これより、醸造期間の延長はアミノ酸量の大きな変化には寄与していないと考えられる。しかし、9月末頃から香りの変化を感じられるようになったことから、醤油らしい香りや風味を得るにはある程度の醸造期間が必要になると考えられる。



# パッケージデザイン



2年 地産食品班

## 魚醤油

がんちゃん

ガンガンいくぜ！！

作:川端智



イラの産地はうくだイラ(宇久平)

ガンガンいくぜ！

オジサンの芳醇なかおり...

ギャグ考案:中村紘輔 平田翔 横山佳祐

## マドレーヌ



## スイートポテト



## ギョツキー



宇久高校の校章をモチーフにし、宇久島の「う」の字を9個ならべて商品をイメージした色をつけました。

作:中村桃子

## 商品文字

魚醤油やお菓子のパッケージの文字を筆で書きました

すいと  
ぽてと

魚醤油

最北  
端

五島  
列島

手仕込み  
魚醤油使用  
長崎 宇久

作:内野真菜 川端智 中村桃子

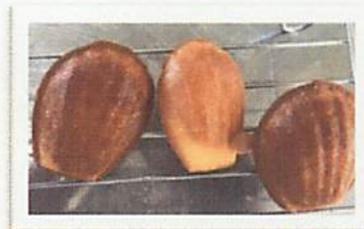
# ガンガゼ魚醤油を使ったお菓子づくり

2年 地産食品班

フードの時間や総学などを使って試作



まどれいぬ、すいーとぽてとに決定



木寺さんにアドバイスをもらいながら再度試作



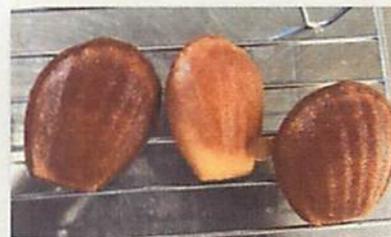
## まどれいぬ試作過程



長方形、マフィン型



バナナ入り、マフィン型



貝殻型

## すいーとぽてと試作過程



丸める



クッキーに乗せる



クッキー生地包む

**完成**





## ごまドレッシング

宇久高2年生の投票で  
人気NO.1でした!

【材料】 魚醤油 小さじ1 マヨネーズ 大さじ2 砂糖 大さじ1  
酢 小さじ2 ごま油 小さじ1 すりごま 大さじ2

【つくり方】 材料を混ぜるだけ

【ひとくちメモ】 さらさらした食感がお好みの方は、ゴマの量を減らしてください。



## 中華風醤油ドレッシング

ブロッコリー  
と合います♪

【材料】 魚醤油 大さじ1 砂糖 大さじ1 酢 大さじ1  
ごま油 大さじ1 ごま 適量

○調味料(ごま以外)はすべて分量が大さじ1で覚えやすい!

【つくり方】 材料を混ぜるだけ

【ひとくちメモ】 ごまと魚醤油の風味がして、とてもおいしいです。



## おすすめNO.1 魚醤油うどん(つゆ)

魚醤油のおいしさが  
一番味わえるレシピ!

【材料】 だし汁 300cc 魚醤油 大さじ1 みりん 大さじ1/2  
塩 小さじ1/2 うどん麺 1人前

【つくり方】 うどん麺以外の材料を鍋に入れ、火にかける。

沸騰したら麺を入れ、ひと煮立ちさせる。お好みの具材を加えて完成。

【ひとくちメモ】 ふつふつのだしに魚醤油をちょっと加えるだけでもおいしさUPします♪



## 焼きおにぎり

魚醤油の香ばしさが  
たまらない!

【材料】 米 1合 ★魚醤油 小さじ2 ★みりん 小さじ2  
★ごま油 小さじ1 ★和風だし 小さじ1

1 ★を混ぜ合わせタレを作る



2 ボウルの中にご飯を入れ、タレと混ぜる



3 好みの形に握り、オーブンで両面を6分ずつ焼く。



【ひとくちメモ】 ご飯に調味料を混ぜ込まず、表面に塗って焼いてもおいしいです。



## 醤油マドレーヌ

作り方はとっても簡単です!  
(産菓まつり販売商品)

【材料】 薄力粉 50g ベーキングパウダー 小さじ1/2  
砂糖 50g 溶かしバター 50g 醤油 小さじ1  
卵 1個 コンデンスミルク 15g

1 ボウルに薄力粉・ベーキングパウダー・砂糖を入れて泡立て器でよく混ぜる。



2 卵・溶かしバター・コンデンスミルク・醤油を加えてよく混ぜる。



3 油を塗った型に2を流し入れて予熱したオーブン180度、15~20分焼く。竹串をさして何もつかなければOK



産業祭で魚醤油を購入した方にレシピを配付しました。昨年度、魚醤油の使い道についての課題があったので、今年度は開発したレシピを配付するという形を取りました。

## 魚醤油を使った レシピ



本日は私たちが作った魚醤油をお買い上げいただき、どうもありがとうございます。魚醤油を使った簡単なレシピを考えてみました。ぜひ試してみてください。  
宇久高校2学年



## ぜひ作ってみてね



# あられ茶房 柿田さん考案！家で作れる簡単魚醤油レシピ

魚醤油の可能性をもっと広げるために、あられ茶房の柿田裕哉さんに「家で作れる簡単魚醤油レシピ」を考案して頂きました。どれもとてもおいしく、簡単に出来る料理です。ぜひご家庭で作ってみてください。



## スタミナマヨネーズ



【材料】(比)  
マヨネーズ 10  
焼き肉のタレ 2  
魚醤油 1

【作り方】  
材料を混ぜ合わせる。

## 島野菜と魚醤のペペロンチーノ



【材料】(一人分)  
水100cc 魚醤油10cc 野菜 スパゲッティ  
ベーコン 塩胡椒 鷹の爪 ニンニク オリーブオイル

【作り方】  
①フライパンにオリーブオイル、にんにく、タカノツメ、ベーコンを入れ、強火で炒める。  
②野菜、魚醤油、水を入れ、炒める。  
③茹でたパスタを入れ、さっと炒めて盛りつける。塩こしょうで味をととのえる。

## 沖あらかぶと魚醤油の島ご飯



<炊き込みご飯>  
【材料】  
米1合 出汁200ml 魚醤油20ml みりん20ml  
【作り方】  
すべての材料を炊き込む。

<混ぜご飯>(比)  
【材料】  
みりん2 酒2 濃口醤油1 魚醤油1  
【作り方】  
炊いたご飯と材料を混ぜ合わせる。

## 謝辞

魚醤油の醸造指導・助言を頂いた 宇久観光協会会長 村上 正一様、  
魚醤油の醸造指導・助言を頂いた 宇久小値賀漁業協同組合指導員の皆様、  
魚醤油の醸造指導、遊離アミノ酸分析等、技術指導を頂いた  
長崎県北振興局商工水産部県北水産業普及指導センター 松本 欣弘様、  
魚醤油を活用したお菓子作りの指導・助言を頂いた 筑豊製菓株式会社 木寺 岳人様、  
魚醤油を活用したお菓子作りの協力を頂いた 川村商店 木寺 剛士様、  
魚醤油を活用したレシピを考案していただいた あられ茶房 柿田 裕哉様、  
魚醤油の醸造活動をPRしていただいた 宇久地域おこし協力隊 北原 美穂子様 他、

多くの方々にご協力を賜りました。ありがとうございました。

### ①発表会をしてみたの気づき・反省

- ・目先のことだけを考えるのではなく全体を見通して計画的に進めることが大切（早めに取り組む）。
- ・ちょっとした変化などを継続して記録しておく（魚醤油の状態・お菓子の試作の変更点）。
- ・研究にはたくさんの時間と労力が必要である。
- ・パワーポイントを用いて発表をするときは、文字の大きさや色に気をつける。
- ・難しいことをいかに簡単に伝えるかが大切だとわかった。
- ・どうすればわかりやすく聞き手に聞いてもらえるかを考える。
- ・材料集めは抜かりなく。まず自分たちが研究内容を理解する。
- ・魚醤油に同封したアンケートはほとんど集まらなかった。産業祭が終わった後の回収は難しい。魚醤油のラベルに載せていたQRコードに、広告動画だけでなくアンケートも記入できるようにするなどの工夫が必要だと思った。

### ②アンケート結果を受けての気づき・反省

- ・年齢問わず楽しませることができた。
- ・難しい内容も劇を取り入れて発表することで、小学生・中学生にもおもしろく、わかりやすく伝えることができた。
- ・Uku Labo の活動を発表することで、多くの人に興味を持ってもらうことができた。

### ③来年度に生かしたいこと

- ・目先のことだけ考えるのではなく、全体を見通して計画的に活動しようと思った。
- ・活動の過程は細かいことでも写真や記録に残していった方がよい（記録には日付もつける）。
- ・難しい内容は劇などでおもしろく発表したほうが伝わりやすい。
- ・パワーポイントなどの使い方が身についたので、来年度の発表はより完成度の高いスライドを作りたい。

### ④後輩（次の担当者）へのメッセージ

- ・魚醤油のかきまぜのときは手袋をつけよう（手がかゆくなる）。制服ではかきまぜをしないほうがよい。虫（ハエ）に気をつけよう。
- ・魚醤油の状態（日付・おい・色など）の記録を細かくとっておいたほうがよい。また、写真も作業のたびにとっておいたほうがよい。
- ・成分分析のためのサンプルは、仕込みを行ってからすぐ採り始めたほうがよい。
- ・魚醤油の種類がわからなくなるので、混ざらないようにしましょう。
- ・発表では、聞く人の年代などを考えて、わかりやすく説明することが大切。

## アンケート結果

宇久島全体で活性化を目指すために、保護者や小学生、中学生、地域の方々など(約200名)に向けて発表会を行い、アンケートを実施した。

- ・ Uku Labo の活動を通して、宇久島の良いところを沢山見つけることができた。
- ・ ふるさと宇久島への関心が強くなり、大人への刺激になっていると思う。
- ・ 「おもしろさ」と「わかりやすさ」のある発表だった。
- ・ 「島のために何ができるか」という気持ちがあり感動的だった。
- ・ 生徒の中からいつの日か宇久島に戻り、島を活性化させる人材が出てきてほしい。
- ・ 子どもを宇久高に入学させて良かった。宇久高だからできることですね。
- ・ 宇久の子どもとしての誇りと自信を持ってほしい。すばらしい取り組みだ。
- ・ 楽しく宇久島のことを考える機会を与えてもらった。
- ・ 宇久島を愛する気持ちがよく伝わってきた。
- ・ おおげさではなく「日本に世界に誇れる発表」
- ・ 大人が見習うべき点もたくさんあると感じた。ハイレベル。
- ・ 魚醤油をつくってみたい。
- ・ 来年の発表会も絶対行きたいと思った。
- ・ 宇久をPRするために沢山の活動をしていることがよく分かった。
- ・ 魚醤油を2種類もっている。おいしかったのはガンガゼの魚醤油。
- ・ 聞き手を飽きさせないエンターテイメント性のある発表だった。
- ・ 少ない人数でも熱心に取り組んでいてすばらしい。
- ・ 漁師が取り組めるイベントを研究してみたい。
- ・ 民泊・旅館業・漁業の活性化の研究に取り組んでほしい。
- ・ 宇久の産業や空き家の活用をしてほしい。
- ・ 神浦トンネルで消えかかっている絵の保全(復元)などの提案をしてほしい。
- ・ 海洋ゴミに関する取り組みをしてほしい。
- ・ You Tube など取り組んでみては？

**Uku Labo**

## 「宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト」

その2 観光客誘致に関する取組(観光雑誌編集とこれからの取組)

団体名 3年 カミングジェネレーションプラン班	 <p>出典（海風舎・隔月刊「島へ。」103号）</p>
発表題目 宇久島PRに向けた地域活性プロジェクト ～観光客誘致に関する取組（旅行雑誌編集とこれからの取組）～ 指導者名 川口 恭子、辻尾 祐介、宮崎 仁史、磯野 史子 生徒氏名 令和元年度3年生 6名 内野 真菜、川端 智、中村 紘輔 中村 桃子、平田 翔、横山 佳祐 他 平成30年度卒業生10名	
<b>研究発表要旨</b>	
<b>1. 研究の動機</b>	
<p>私たちが住む宇久島では、少子高齢化が進み、人口の半分以上が65歳以上の高齢者である。また、高校卒業後には島を離れる生徒がほとんどであり、若者の流出は喫緊の課題である。このような現状のもと、雑誌を通して多くの人に「宇久島の魅力を知ってもらい宇久島の活性化を図る」ことをねらいとして、海風舎の全国版雑誌『島へ。』の執筆に取り組むこととした。この活動を通して高校生は、雑誌『島へ。』を発行する海風舎と一般社団法人 3710Lab（みなとラボ）の皆さんにご指導をいただきながら、自らの手で、カメラマンや記事デザインなどの雑誌作成の全工程を手がける。このことにより、高校生自身が宇久島の魅力を再発見すると共に、地域のよりよい未来を創造する足がかりとすることが期待できる。また、その研究を引継ぎ、宇久島滞在型旅行プランの開発とそのPR動画作成に取り組んでいる。</p>	
<b>2. 研究計画</b>	
<b>【平成30年度3年生】</b>	
第1回ワークショップ（4月12日） ・ 島生活を考える ・ 企画考案	
第2回ワークショップ（5月24日） ・ 記事分担 ・ レイアウト	
講話「宇久島について」（5月30日） ・ 宇久島の産業 ・ 歴史・文化について ・ 宇久島の魅力と課題	
第3回ワークショップ（6月7日） ・ 取材テーマの選定 ・ 取材先の選定 ・ 取材先の予約	
第4回ワークショップ（8月1・2日） ・ 取材の実施 ・ 原稿執筆	
第5回ワークショップ（10月8日） ・ 紙面のレイアウト ・ 文章の推敲	
産業祭（11月11日） ・ パネル作成 ・ 販売予約 ・ 宣伝	
<b>【令和元年度3年生】</b>	
Uku Labo 事前学習会①（3月13日） ・ 九州を訪れる観光客に関する各種統計 ・ 旅行プランの検討	
Uku Labo 事前学習会②③（3月19日・26日） ・ 五島神楽について	
取材活動（5月15日） ・ 宇久島の「食」について	
<b>3. 研究活動</b>	
<b>(1) 旅行雑誌編集</b>	
① テーマ設定・島生活を考える ・ 企画考案 ・ 記事分担 ・ 各記事レイアウト	
② 取材活動 ・ 取材テーマの選定 ・ 取材先の選定 ・ 取材先の予約	
【魚醤・神楽・かんころもち・インスタ映えスポット・魚・捕鯨】	
③ 執筆活動 ・ 紙面のレイアウト・文章の推敲	
④ PR広報 ・ 文化祭（CM作成） ・ 産業祭（PR広報パネル作成、宣伝、販売予約—58冊）	
・各新聞社記事掲載【離島経済新聞・長崎新聞・西日本新聞】	
<b>(2) 旅行プラン開発</b>	
① 事前学習 ・ 観光に関する各種統計の収集と分析 ・ 五島神楽について	
② 取材活動 ・ 取材テーマの選定 ・ 取材先の選定 ・ 取材先の予約 【宇久島の「食」について】	
<b>4. 成果と課題</b>	
・ 講話や取材を通して、宇久島が抱える課題や魅力について自らの問題としてより深く考えることができた。	
・ 不特定多数の読者に宇久島の魅力を伝えるという視点のもと、テーマ設定、取材、記事の執筆、レイアウトを自ら手がけることで、雑誌作成の過程を知ることができた。	
・ 雑誌作成の経験を広報活動やその他の活動に活かすことができた。	
今後、成果を行政などと共有したり、具体的な宇久島滞在型の旅行プランの開発を通して、島の更なる	
活性化につなげたい。	

## カミングジェネレーション班～「宇久島の未来をつくるプロジェクト」～について

名前 宮崎 風香

## ☆カミジェネ班とは☆

「カミングジェネレーション」とは、「次の世代」という意味を指します。いよいよ宇久島を離れ、次世代を担っていく私たち3年生が一から宇久島を見つめ直し、活性化を図る取り組みです。



## ☆活動内容☆

今回は、日本で唯一の島マガジン『島へ。』に掲載する宇久島特集を作成しました。3710Lab(みなとらぼ)の方々に協力していただきながら、記事に取り上げる題材決定から取材、編集作業に至る全工程を行いました。限られたページの中で、「自分たちが島外の人に知ってほしいこと」や「伝えたい宇久島の魅力」のすべてをまとめるのは容易ではありませんでしたが、生まれ育った宇久島を別視点から見つめる良い機会となりました。



## ☆講師の先生方☆

- \*熊本 鷹一さん/海風舎発行『島へ。』の編集者
- \*北 悟さん/一般社団法人 3710Lab 代表理事
- \*田口 康大さん/東京大学海洋教育促進研究センター特任講師、3710Lab 理事
- \*吉村 雄大さん/「スタジオ・プントピルゴラ」のデザイナー



## 第1回 ワークショップ (4月12日)

名前 辻 まこと

第1回ワークショップでは、自己紹介から始まり、雑誌『島へ。』についての説明を受けました。

また、「島って何だろう」という講師の方の質問に対して島のあり方、現状など、それぞれの考えを共有しました。日本の島の数や人口、領土問題、文化継承、新制度など、様々な考えが挙がり、「島は多様な役割を担っている」ということを学びました。そして、私たちが住む「宇久島」をテーマに宇久島のいいところ、好きなところ、そして宇久島が抱える問題などを話し合い、宇久島の未来を担う私たちにとって、宇久島について考え直すとても貴重な経験となりました。

授業の後半では、宇久島特集の記事作成のためのテーマやプロジェクト名について検討しました。その結果、「宇久島の未来をつくるプロジェクト」をテーマに、活動していくことが決まりました。3年生は、初めての試みに不安と期待を抱きながら、雑誌作りがスタートしました。



## 第2回 ワークショップ (5月24日)

名前 川上 桃子

雑誌作りをするにあたって、それぞれが考えていることを「誌面にどう落とし込んでいくか」を検討するために、デザイナーである吉村雄大さんのご指導のもと、「ラフレイアウト作り」を行いました。

ラフレイアウト作りとは、誌面を仕上げていくための「最初のたたき台」を作る作業工程のことです。

まず、取り上げるテーマを決め、「何を伝えたいのか」、「どう表現したいのか」を考えました。テキストや写真を選びそれを厚紙に並べ、それぞれ雑誌の誌面を作るという作業をしました。全員が初めての経験で、テキストや写真の位置、分量など、試行錯誤しました。しかし、アドバイスをいただきながら、自分の中に生まれたアイデアを表現しようと、積極的に作業に取り組むことができました。

出来上がったラフを示しながら、「何を伝えたいのか」、「工夫した点」、「レイアウトのかたち」についての説明、意見交換をしました。それぞれが作成したラフを見てみると、情報を豊富に散りばめているもの、写真やテキストの分量のバランスがうまくとれているものなど、各自がどう表現したら、相手に伝わるのかを踏まえてうまく作ることができたと思います。



## 講話「宇久島について」 (5月30日)

名前 宮崎 風香

『島へ。』の雑誌の誌面作りを始める前に、佐世保市宇久行政センター産業建設課課長 永島清治さんを講師としてお招きして、宇久島の現状をお話していただきました。

## 〈学んだこと〉

## ☆宇久島が現在行っている取り組み☆

- \* カフェ(あられ茶房) \* 水産加工場(黒朝鮮魚店)
- \* オリーブ事業 \* 宿泊施設のリフォーム(丸金)
- \* 民泊事業の充実(現在20件) \* ふるさと納税商品作成

## ☆宇久島の抱える課題☆

- \* 進学、高齢者の死去等による、急激な人口減少
- \* イノシシによる被害の増加
- \* マダラカミキリムシの大量発生に伴う枯れ松の増加
- \* 「民泊事業」や「島暮らしの体験事業」などの取り組みが浸透していない。

## ☆宇久島の魅力☆

- \* 伝統行事(祇園祭、ひよひよ祭り、おくんちなど) \* 豊かな自然



## 第3回 ワークショップ (6月7日)

名前 浦吉 翔

前半は、四人の講師と「宇久島の問題について話し合う」をテーマにワークショップを行いました。

## 〈話し合いの内容と成果〉

## ☆宇久島の問題☆

- \* 遊べる場所や働くところがない
- \* 宇久島に注文した商品が届くのが遅いなど

## ☆宇久の未来を考えて不安に思うこと・感じること☆

- \* 宇久島の人口がさらに減少して、無人島化
- \* イノシシの繁殖が増えて、襲われたり、農産物が食べられたりしてしまう。
- \* 太陽光発電の設置により、人口が増加して、治安の悪化 など

## ☆宇久島の未来のために自分たちができること☆

- \* 宇久島のPR ・一回島外へ出て、いずれ帰ってくること
- \* 宇久島に住んでいる時間や地域の人たちとの繋がりを大切にすること
- \* 宇久島の活動に積極的に参加すること など

後半は、コースに分かれて次のように、それぞれの活動を行いました。

☆理文Ⅰ…雑誌原稿の訂正

☆文Ⅱ…取材先決め→アポ決め→取材先へ事前打ち合わせの電話



## 第4回 ワークショップ (8月1・2日)

名前 竹村 太斗

## ☆インタビュー☆

1日～2日の2日間で、かんころ餅を作っている榎さんや漁協支所長の里村さんなど5名の方にインタビューを行いました。読者に伝わる執筆にするために、具体的な質問をすることを意識してインタビューを行いました。

## ☆インスタ映えページ用の写真撮影☆

大浜海水浴場などの有名な絶景スポットを中心に、その他島民だからこそ知っている絶景スポットを7箇所ほど回り、写真撮影をしました。背景を変えたり、遠近法を利用したりするなどさまざまな工夫をして、宇久島ならではのインスタ映え写真を撮ることができました。

## ☆記事のデザインと執筆活動☆

2日間ともインタビュー・写真撮影後に、執筆活動を行いました。それぞれの担当の記事を書くことは初めてだったので、書き始めはなかなか筆が進みませんでした。しかし編集者の方から頂いたアドバイスを踏まえて執筆することで、読み手に伝わりやすい文章を書くことができました。



## 第5回 ワークショップ (10月 8日)

名前 平田 明日香

講師2人をお招きして、私たちが作成したラフを再度見直す作業をしました。

誤字脱字や、レイアウトのミスなどをみんなで意見を出して訂正し、完成したときに読者の方が見やすいようにしました。また、記事の内容について、取材先に再度電話で確認をしたり、新たな取材先にインタビューをしたりしました。

最初に、原案を見たときに、自分たちが作り上げたものが雑誌になるという実感と喜びが湧くとともに、間違いがないように正しく情報を伝えなければいけないという責任感が高まるのを感じました。

今回のワークショップでは、自分が何を伝えたいかによって文字や写真の大きさやデザイン、また、文章構成を工夫することで、読者に伝えたいことをよりわかりやすく伝えることができることを再確認しました。また、講師の方や周りの人と協力しながら作成することで、違う視点から記事を推敲し、より読者の興味をひくような記事になったと思います。今回の雑誌作りを通して、人に自分の思いを伝えることは難しいということを感じました。



## 産業祭 (11月11日)

名前 浦吉 翔

産業祭りにおいて、三年生の文Ⅱコース六名は三年生全員でルポ作りに参加した雑誌「島へ。」の予約受付、ファッションの授業で作成した浴衣の提示、学校生活の紹介をしました。

## ☆感想☆

- \* 購入予約をしてもらえるように、活動の内容を説明した。説明するのは難しかったが楽しかった。
- \* PRを工夫していたらもっとお客さんが予約してくれたのかもしれないと思った。
- \* 予約を取るだけでなく、学校生活の様子などをポップで紹介することでよりお客様を集めることができた。
- \* 宇久高校の出来事や浴衣も一緒に展示することで多くの方が立ち止まって見て下さっていた。
- \* 私たちの取り組みについて質問をして下さる方もいて、その質問に対してしっかり答えることができた。
- \* 予約が主な目的だったが、宇久高校の出来事や浴衣も一緒に展示することで多くの方が立ち止まって見て興味をもってくれるような展示物を作ることができた。



PR/広報

瀬島経済新聞 (2018年6月22日) 掲載

## ニュース

【島News】長崎・宇久島の高校生が地元取材。雑誌掲載を通して郷土愛を育む

瀬島経済新聞 2018/06/22

大塚の取材 宇久島の高校生

島々の高校生が手がけた記事も雑誌掲載する取り組みが始まっている。瀬島マガジン「島へ。」編集部が指導役となり、2017年は宮城県気仙沼市の観光・大島（おおしま）(正式版)で、2018年は宇久島（うくしま）(長崎版)でプロジェクトを実施。長崎県宇久高等学校で1回目のワークショップが始まっている。



宇久高等学校3年14人が参加したワークショップの様子 (長崎版) (長崎県宇久高等学校)

## 2018年は宇久島でプロジェクトを実施

今年で2年目を迎えた同プロジェクトは舞台を長崎県宇久島に移し、長崎県宇久高等学校の3年生10名が参加。同校の「総合的な学習の時間」を使い、4月から1回のワークショップがスタートした。

初回のワークショップでは「島へ。」編集部の熊本第一デスクが講師役となり、日本に2,852ある「島」について講義。国土保全庁による島の定義や、島が果たす役割として「防災及び地域の経済圏などの保全」「多様な文化の継承」などを紹介した。

また、取材や撮影、原稿執筆、印刷など、雑誌制作の流れを紹介。「いずれの工程においても読者に何を伝えたいかを想定することが大切だ」と生徒たちにも雑誌づくりの基本となる考え方を伝えた。



「島へ。」編集部熊本第一デスクによるワークショップの様子 (長崎版) (長崎県宇久高等学校)

生徒たちは3グループに分かれて話し合い、宇久島の好きなところや嫌いなところなどについて自由に話し合いながら誌面で伝えたいテーマを探り、プロジェクト名を「宇久島の未来をつくるプロジェクト」と決定した。

## 雑誌PRポスター

11月15日  
雑誌『島へ。』発売!

3年生10名で執筆しました

瀬戸内海道  
SETOUCHU COASTLINE ROAD

厚着の宇久島 魅力ルポ

¥ 842

予約受付中!

## 活動紹介

『島へ。』活動の様子

<インタビュー>

漁師の方にインタビュー  
かみころもちの作り方を  
見て興奮気味です!!!  
宇久島の歴史についてお話を聞いている様子  
島についてお話を聞いている様子

<執筆>

インタビューで得た情報をもとに文章に添えてみたい、イラストを描いた様子

<写真撮影>

対馬展望台  
大浜海水浴場  
スズノ海水浴場  
撮った写真を確認している様子

長崎新聞 (2018年12月15日掲載)

西日本新聞 (2019年1月11日掲載)

2018年(平成30年)12月15日 土曜日 ローカル

# 宇久島の魅力アピール

## 専門誌掲載 地元高3 特集15分を編集



佐世保市の歴史、宇久島の魅力、島の魅力を伝える記事が、島の魅力を伝える専門誌「島へ」に掲載された。取材・写真…細部までこだわり

「宇久島の魅力を知ってほしい」と呼びかける生徒は、佐世保市宇久島、鹿児島県宇久島

佐世保市の歴史、宇久島の魅力、島の魅力を伝える記事が、島の魅力を伝える専門誌「島へ」に掲載された。取材・写真…細部までこだわり

佐世保市の歴史、宇久島の魅力、島の魅力を伝える記事が、島の魅力を伝える専門誌「島へ」に掲載された。取材・写真…細部までこだわり

3710HP <http://3710lab.com/> (随時更新)



HOME 学ぶ みなとラボ お知らせ お問い合わせ SEARCH

NEW TOPICS



(第3種郵便物認可)

# 宇久高生の記事、専門誌掲載

## 捕鯨の歴史 インスタ映えの海

### 育った島の魅力PR 3年10人全員、卒業前に



宇久島の魅力を取材した記事が掲載された「島へ」を手にする宇久高の生徒

佐世保 五島列島の北端、佐世保市宇久島にある宇久島の3年生10人全員で取材した記事「宇久島の魅力」が島専門の雑誌に掲載された。この春、卒業して島を離れる生徒たちは「育った島の良さを多くの人に知ってほしい」と願いを込めた。

掲載されたのは隔月刊誌「時代の鯨が島で発見された」(海風舎)。学業、江戸時代以降も捕鯨で島の地景面を形成した歴史を関係者から聞き取り、鯨の形をイラストで表現。佐世保市の歴史や自然、自慢を添えて、宇久島の魅力を伝える記事が、13日「切っても切れない関係」にまとめた。

浦吉翔さんは古くから盛んな「切っても切れない関係」にまとめた。

浦吉翔さんは古くから盛んな「切っても切れない関係」にまとめた。

浦吉翔さんは古くから盛んな「切っても切れない関係」にまとめた。

PR動画 (文化祭・Uku Labo 発表会で放映)



「島へ。」11月より発売！ 買ってねえ～!!

### ①発表会をしてみたの気づき・反省

#### 【理Ⅱ文Ⅰ（ステージ発表をしていない生徒）】

- ・見てもらう方にわかりやすく伝えるために工夫が必要で、たくさんの時間や労力が必要なのが見えて分かった。
- ・見る人が飽きないようにお笑いやキャラクターを入れるなどして楽しく、かつ分かりやすく発表していたので、とてもよかったなと思った。

#### 【文Ⅱ（ステージ発表をした生徒）】

- ・活動した複雑な内容を、人前で分かりやすく飽きさせずに伝えることは楽しいと思えた。
- ・練習をすればするほど発表が良くなったので、練習あるのみだなと思った。
- ・最初は、上手く伝えることができるか不安だったけど、みんなで協力して活動することができたので、本番では今までで一番良い発表になった。
- ・1つのものをみんなで創り上げる楽しさを知った。
- ・パワーポイントの使い方をより学べ、プレゼンテーション能力が向上したと思う。
- ・分かりやすい発表にするために、文字はなるべく大きくし、発表内容を厳選して、アニメーションを工夫することが大切だと思った。

### ②アンケート結果を受けての気づき・反省

- ・年齢を問わず、みんなを楽しませるプレゼンテーションができた。
- ・一般の方のアンケートで、好評だったので、今までの自分達がやってきたことに誇りを持って、これからは色々なことに挑戦していきたいと思った。
- ・小中学生のアンケートで、Uku Labo で何をしているか知ることができたという意見があったので、小中学生にも分かりやすく伝えることができた。今後の小中学生の活躍に期待したいと思った。
- ・情報量が多くて、少し早口になってしまい、分かりづらいこともあったと思った。

### ③今後に生かしたいこと

- ・自分は文Ⅰコースだったので、取材や記事作りの大半をすることができず、少し残念に思ったが、大学進学後、3710Lab の人達と自分が企画したことを材料に、もう一度、活動したいという思いに駆られた。
- ・島に帰ってくるきっかけをつくりたい。
- ・活性化させる案を提案するだけでなく、実際に自分たちで動きたい。
- ・Uku Labo で得たものを、卒業後の進路先での十分に生かしていけるように頑張りたい。
- ・今後の人生で、Uku Labo で身につけた力を発揮したい。
- ・卒業後も何らかの形で Uku Labo に関わっていきたい。

### ④後輩（次の担当者）へのメッセージ

- ・お互いに意見を出し合うことで、活動が充実するし、互いの学びや気づきになります。
- ・明るく楽しい発表をして、ますます Uku Labo と宇久島を活性化してほしいと思います。
- ・観ている人が楽しめるように、自分達自身が、積極的に楽しんで表現することが大切です！
- ・宇久島がこれからも活性化していけるように、できることを頑張ってください！！

## Uku Labo 事前学習会① (3月13日)

名前 中村 紘輔

1回目のUku Labo事前学習会では、宇久町観光協会の檜垣さんにお越しいただき、訪日する外国人の目的や実際に宇久島で行っている観光客向けの体験ツアーについての説明を受けました。その結果、訪日する外国人には「自然景観」、「神社・仏閣」などが人気があり、加えて日本の地方や日常文化に関心があることが分かりました。その後、宇久島のパンフレットなどを参考に訪日する外国人向けの体験型ツアーにふさわしいアクティビティについてアイデアを出し合いました。これを踏まえ、宇久島ならではの外国人向け観光ツアーの作成に取り掛かりました。



## Uku Labo 事前学習会② (3月19日)

名前 平田 翔

外国人向けの観光ツアーを作成するにあたって、体験できるアクティビティの案として意見が出た宇久神楽(宇久島に伝わる五島神楽の1つ)について学びました。五島神楽は、国重要無形民俗文化財に指定されており、島の貴重な文化の1つであるため、七日間の体験ツアーのメインとして五島神楽を第一候補としました。

この日も講師としてお越しいただいた宇久町観光協会の檜垣さんからさらなる資料をいただき、外国人は何に興味があるのかを、資料を基に考えるなど色々な説明を聞くことができました。話を聞く中で「現地の歴史」・「遺産にふれる」などの旅行を楽しむ外国人がいるとおっしゃっていました。

複数の体験ツアーの中から何が外国人の興味を引きつけるのかを考え、七日間の体験ツアーの中身を具体的に考えていきました。



## Uku Labo 事前学習会③ (3月26日)

名前 中村 桃子

メインの五島神楽について、新たに講師として平田さんにお話をお聞きしました。宇久神楽には宇久島流と神島流があり、平田さんは神島流の後継者です。五島神楽のビデオも拝見させていただきました。

この日は、各自が事前に考えてきた神楽に関する質問を、平田さんに聞くことができました。「一般の家系の人でも神楽を行えるのか」と言う質問に対し「昔は神社に仕える家系の人しか出来なかったが、今は人口も減少しており後継者を作るという意味でも一般の方でも出来る」というような基本的な事柄から、神島流神楽の現状まで、さまざまなことを学ぶことができました。また、「外国人の方でも神楽を行うことができるのか」と言う質問に対して、すでに観光客に向けての体験を行っており、その中でも「どなたでも体験出来る。外国の方や、宗教が違う方でも可能である」との返答をいただきました。これを踏まえて、宇久神楽を七日間の体験ツアーのメインに据えることとしました。



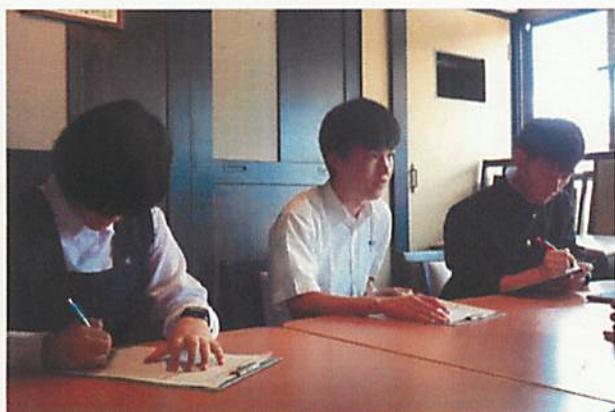
## 取材活動（5月15日）

名前 中村 紘輔、平田 翔

宇久島のお食事処「あられ茶房」さんと「レストハウスもりた」さんを訪問させていただき取材を行いました。

あられ茶房さんでは店を訪れる観光客の方についてお聞きしました。安くてボリュームのあるものを好む島民の方に対し、あられ茶房さんにいらっしゃる観光客の方には魚を楽しむ人と島の特産品を使った料理を楽しむ人の2つに分かれるそうです。また、観光客の方は宇久島に限らず離島に興味があり来た人が多いとおっしゃっていました。

あられ茶房の経営者である柿田さんに、過疎化が進んでいる宇久島で店を開こうと思った理由を伺うと、衰退している故郷を助けたいとの返答が返ってきました。そして、自分の料理を宇久に来た観光客の方の記憶として持ち帰ってもらい、また来店してもらいたいとのことでした。



レストハウスもりたさんでは、レストハウスもりたさんの開業時のことや島の現状についてお話をお伺いしました。話を聞く中で、「なぜお店を開こうと思ったのか」という質問をさせていただいたところ、元々は福岡で店を営んでおり、島での出店募集を目にし、応募したところ当選し、宇久島で店を開くことになったとの返答をいただきました。

また、島の現状として、島の人口の減少にともなって、お店に来られるお客さんの数も減ってきているとおっしゃっていました。

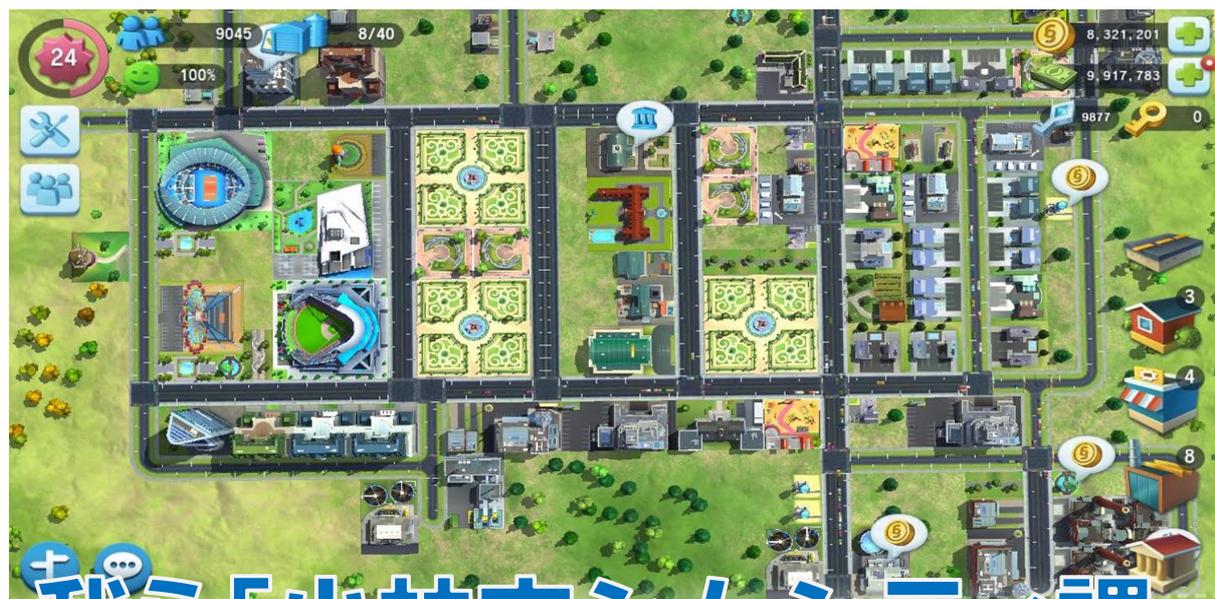
外国人の観光客が来たときに通訳がないということから、島民の方から通訳が出来る人を募集し外国人の観光客が来た際に柔軟に対応できるようにしてはどうかとのことでした。



## 【まとめ】

島のお食事処2軒を訪問させていただき、宇久島を訪れる観光客の特徴や今、島が抱えている問題について詳しく知ることができました。ツアープラン作成時の参考とさせていただくこととしました。

福知山公立大学2019地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」



# 我ら「小林市シムシティ課」

## スマホアプリでまちづくりに挑戦!



## 宮崎県立小林秀峰高等学校

商業科・経営情報科 課題研究 調査研究班

【発表者】 大牟田 夏子 小野塚 盟 川原 春美月 石井 優美  
 大久保 未裕 高佐 磨衣 束田 明日香 西平 茂樹  
 野口 理菜 古園 知美 松山 佳聖

【指導者】 瀧口 尚志 松澤 総子 基本 晃一 別府 妙香



小林市  
シムシティ課  
KOBAYASHI CITY  
DEPARTMENT OF  
SIMCITY BUILDIT





# 目次

はじめに	2
第1章 現状分析と活動開始までの流れ	3
1-1 環境分析（小林市について理解を深める）	3
1-2 今年度の取り組みについての検討	5
1-3 共感から始まる活動（Plan）	6
1-4 ミーティングの実施	7
1-5 仮説の設定	7
第2章 実践	8
2-1 使われなくなった「ビニール傘」の新用途開発?!	8
2-2 小林市の職員に、そしてキャストに!	9
2-3 まちづくり検討会の実施	10
2-4 まちづくりタウンミーティングの開催	16
2-5 アイデアをカタチに	20
第3章 検証と課題	22
第4章 今後の展望	25
第5章 終わりに	26





## はじめに

### これまでの取り組みと本年度の活動に向けて

平成30年4月、私たちが在籍している「宮崎県立小林秀峰高等学校」は創立10周年を迎えました。農業・工業・商業・福祉の4学科からなる宮崎県初の『総合制専門高校』として、この10年間、地域と共に歩み、そして多くの方々に支えられ、各学科ともに大きな成果を挙げることができました。

そのなかで私たち商業科・経営情報科の課題研究「調査研究班」は、昨年度、目標としてきた「全国高等学校生徒商業研究発表大会」に初めて出場する機会を頂き、全国の舞台上でこれまでの先輩方の思いを胸に発表することができました。

そして、本コンテストにも2013年から応募させて頂いており、昨年度は2回目の”最優秀賞”を受賞することができました。

このように、私たちの活動は、全国の多くの皆様に共感して頂き、そして応援してもらっていることを実感しています。

年度	研究発表の内容
2015年度	フリーペーパー「みちくさ」との連携
2016年度	Web CM「“山奥”篇」の制作
2017年度	Web CM「サバイバル下校」の制作
2018年度	PRミュージック「田舎女子高生」の制作



2018 田舎力甲子園 受賞式

なかでもここ数年は、Web上での効果的な情報発信の研究を継続して行ってきました。2016年度と2017年度の2年間は、小林市と連携してWeb CMの企画・制作に携わり、活動を通して「Web上で“バズ”らせる<sup>(\*)</sup>ことへの仕掛けについて」学び、2018年度には何度も見てもらうために、動画に「音楽」を融合させた“ミュージックビデオ”の企画・制作に取り組み、全国放送の情報番組や音楽番組などで取り上げて頂き、話題を集めることに成功しました。

(\*) 「バズる」は、ツイッターやフェイスブックなどのSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)やブログなどを通じて、特定の話題が一気に拡散し、各方面で話題になる事を意味する新語。

次の取り組みについて、検討会の準備に入ろうかとしていたそのとき、私たちの活動を応援してくださっている方の一人から、次のようなご意見を頂きました。

**「みなさんの頑張りは大変素晴らしいが、もっと、**

**地元を観察しながら、まちに根ざした活動をして欲しい。」**

活動の成果に満足し、少し根拠のない自信を持っていた私たち。地域をPRすることはとても大切なことですが、私たち高校生が地域のためにできること、やるべきことはもっと他にあるのではないかということを感じました。





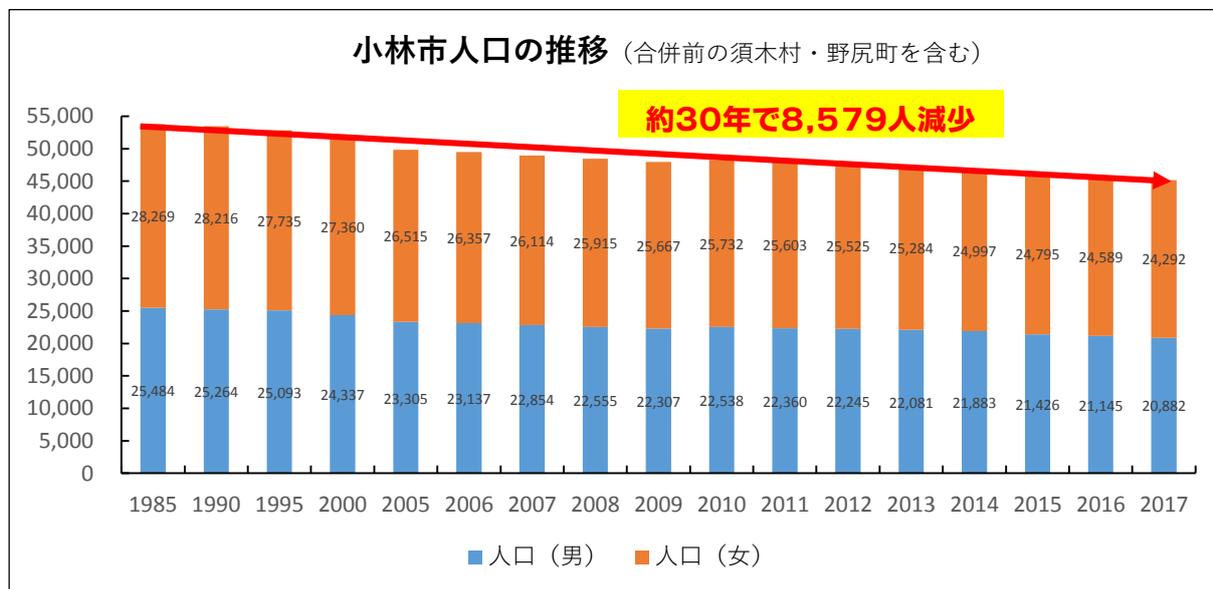
# 第1章 現状分析と活動開始までの流れ

## 1-1 環境分析（小林市について理解を深める）

本校がある小林市は、宮崎県の南西部に位置し、小林、須木、野尻の3つのエリアがあります。市の南西部には霧島連山、北部には九州山地の山々が連なり、山から潤沢に湧き出る「水」、その湧水池である出の山公園では、初夏を迎える時期、数万匹のゲンジボタルが飛び交います。その湧水を利用して行われるのが農業。メロン・梨・ぶどう・ゆず・栗・マンゴー。国内でも屈指の質を誇る宮崎牛。高級食材「キャビア」を生み出すチョウザメなど、小林の豊かな大地は、私たちにその恵みを余すところなく、届けてくれる、まさに「自然と人々が共存するまち」です。



そこでまず、小林市について既存資料を用いて分析を行いました。はじめに小林市の人口の推移を分析してみました。



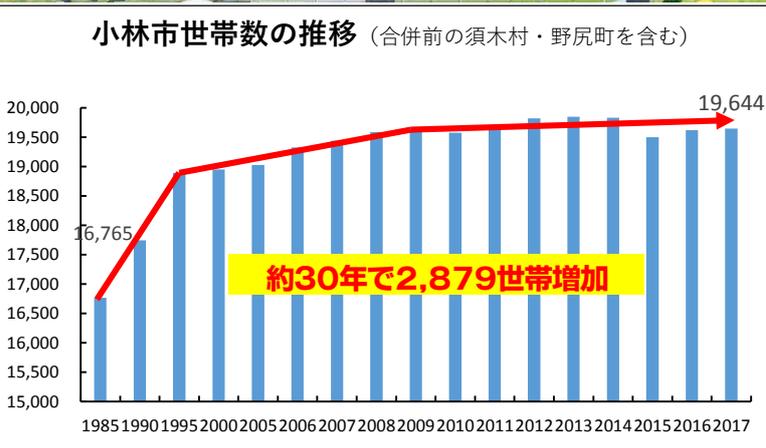
1985年（昭和60年）に旧小林市・旧須木村・旧野尻町の人口総数は53,753人でしたが、2017年（平成29年）には45,174人と、約10,000人弱の人口減少となっています。

総務省統計局の人口推計資料（平成28年10月1日現在）によると、**わが国の人口減少率は前年比約0.13%**。小林市の2016年（平成28年）の**人口減少率は前年比約1.05%**ということから、**全国平均を上回る速さで、人口減少が進んでいる**ことがわかります。次に、世帯数を調べてみました。**1985年（昭和60年）の旧小林市・旧須木**

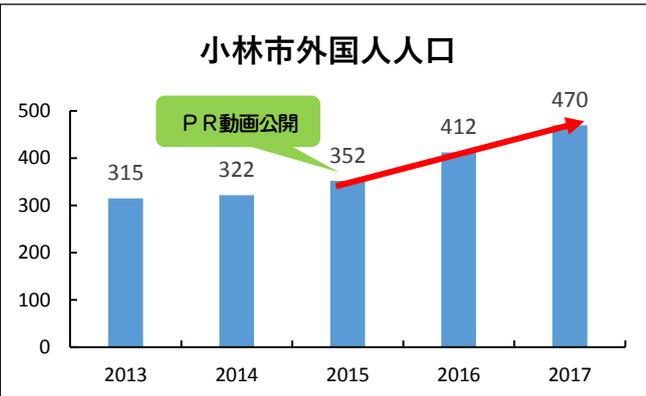




村・旧野尻町の世帯数は16,765世帯であったのに対し、2017年(平成29年)には19,644世帯と、人口とは逆に世帯数は増加しています。



人口と世帯数から、一世帯当たりの人口(家族数)を計算してみると、1985年(昭和60年)は約3.2人であったのに対し、2017年(平成29年)には約2.3人と、一世帯当たり約一人が減ったこととなります。小林においても核世帯化が進行していることがこのことから分かります。



注目すべきは、右の「外国人人口」です。2015年(平成27年)までは、おおよそ300人前後でその数が推移していましたが、移住促進PR動画「んだもしたん」の公開後、毎年60人前後増加し続け、現在470人と500人に迫る勢いで増加しています。

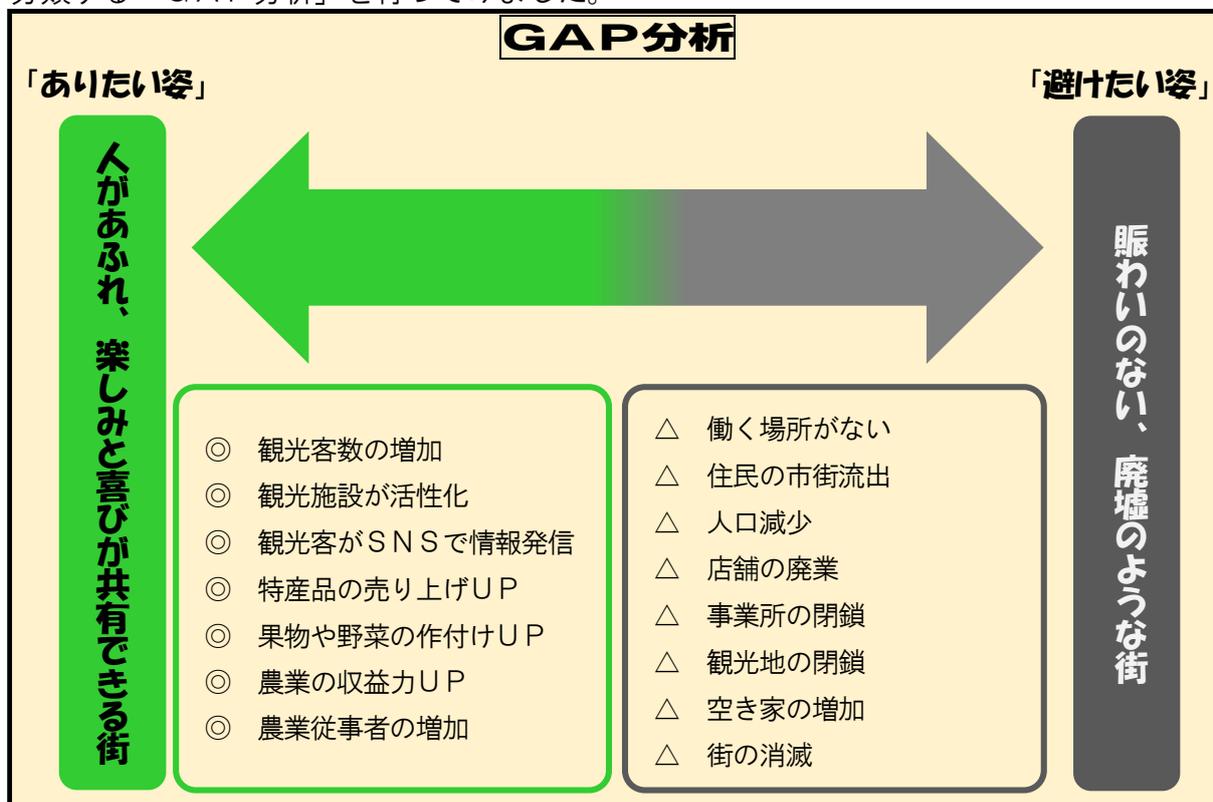
既存資料を用いた分析と同時に、SWOT分析も行いました。内部環境については「VRIO分析」、外部環境については「ファイブフォース分析」を用いて抽出しました。

	プラス要因	マイナス要因
内部環境	<b>Strength</b> [強み] <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 巧みな情報発信 (PR動画・SNS) で大成功</li> <li>・ ふるさと納税制度において成功している (小中学生への医療費・給食費助成の拡大)</li> <li>・ 食べ物が豊富 (食糧自給率が高い)</li> <li>・ 方言 (西諸弁) を生かした取り組みの成功</li> <li>・ 人情味ある人柄</li> <li>・ 観光資源が豊富 (霧島連山・水・食)</li> <li>・ 市民活動の活性化</li> </ul>	<b>Weakness</b> [弱み] <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 公共交通機関の整備が不十分</li> <li>・ 宿泊施設が少ない</li> <li>・ 人口減少と人口流出</li> <li>・ 核世帯化が進んでいる</li> <li>・ 遊ぶところが少ない</li> <li>・ 街に人がいない</li> <li>・ 農業従事者の減少</li> </ul>
	<b>Opportunity</b> [機会] <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国の地方創生政策</li> <li>・ 移住者の増加と市民活動における活躍</li> <li>・ 地方創生の取り組みへの高い認知度</li> <li>・ 外国人の増加</li> <li>・ インバウンドの拡大</li> <li>・ 情報化の進展 (情報発信の機会の増加)</li> </ul>	<b>Threat</b> [脅威] <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少子高齢化が平均値以上に進んでいる</li> <li>・ 働く場所が少ない</li> <li>・ 人口減少と労働人口の減少</li> <li>・ 景気の低迷</li> <li>・ 自然災害の発生 (火山・大雨)</li> <li>・ 少子化によるコミュニティ活動の崩壊</li> </ul>





SWOT分析の結果、他の地方自治体と同様、人口減少や少子高齢化に伴う労働人口の減少が目にとまります。そのような中、小林市の魅力は何と言っても「豊かな自然や食」であることが分かりました。これらの分析結果を、更に上手に活用するため、野村総合研究所の官民連携担当部長／上席コンサルタントの名取雅彦様がWeb上で公開されている「まちづくりのためのフレームワーク入門」を参考に、「ありたい姿」と「避けたい姿」に分類する「GAP分析」を行ってみました。



## 1-2 今年度の取り組みについての検討

「ありたい姿」の小林市に向かって、私たちができることを考えます。ここ数年、小林市はハード面において、小林市庁舎と小林駅（KITTO小林）、TENAMUビルの3つの建物がデザインを統一した形で建設され、少しずつではありますが、中心市街地も整備されてきました。また、ソフト面においても私たちがこれまでも連携させて頂いている「てなんど小林プロジェクト」や市民団体「西諸県軍」そして、市民や企業、行政や各種団体の共同出資からなる「小林まちづくり株式会社」。コワーキングスペース「TENOSSE」など、地域コミュニティの活動が活発になってきています。そこで私たちは、これらの施設や活動と連携して、将来の小林のまちづくりに参画できないかと考え、これまでの私たちの活動をご支援くださっている小林市役所地方創生課に問い合わせしてみました。





「今、本市には全国様々なところから問い合わせがきています。

**今すぐ紹介できる状況にありません。申し訳ありません。」**

私たちの活動が、思いもよらないところで **STOP** してしまいました。

### 1-3 共感から始まる活動 (Plan)

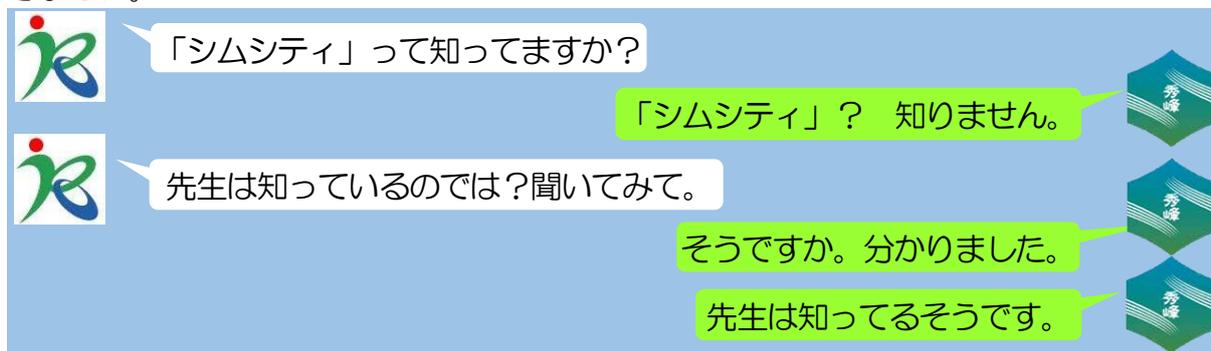
P D C A サイクルに則り、今年度の活動計画を立てることにしました。

#### 《活動計画》

- 1 これまでの「情報発信」に関する研究は継続すること。
- 2 創造とは何か、想像しながら活動に取り組むこと。
- 3 重要業績評価指数 (K P I) の設定が容易であること。

例えば、2017年度から小林で開催されている「こばやしマルシェ」に高校生として出店、あるいはステージイベントの企画・運営をさせてもらい、集客人数や各店舗の売上を前回開催時との比較で検証するなど、より具体的な比較ができる活動を行い、数値データで客観的な評価ができるよう工夫してみてもどうかというような意見ができました。

早速、「こばやしマルシェ」の企画・運営を行っている地域おこし協力隊の方と交渉を…と思っていた矢先、宮原小林市長も、星衛校長先生も驚く、ビッグニュースが飛び込んできました。



昨年の夏の出来事です。話によると、アメリカに本社を置くエレクトロニック・アーツ株式会社が、自社のスマートフォン用アプリケーション『SIMCITY BUILDIT』を用いた社会貢献活動の一環として、これまで様々なアイデアを盛り込んだプロモーション活動を行っている小林市と小林秀峰高校に協力してもらえないかとオファーが来ているとのことでした。







## 第2章 実践

### 2-1 使われなくなった「ビニール傘」の新用途開発?!

紆余曲折ありましたが、9月末日、ようやく活動開始です。まずは、毎年恒例となった、頭脳を活性化させるためのトレーニングから始めます。今年は、**新たに小林市の関係人口に加わってくださった**、株式会社電通の磯部先生が私たちに授業をしてくださいました。先生は普段、大手通信会社“D社”や大手自動車メーカー“T社”のCMなどを手がける「コピーライター」という仕事をされています。早速、毎年恒例となっている“脳トレ”からスタートです。今年の“脳トレ”、お題は2つです。

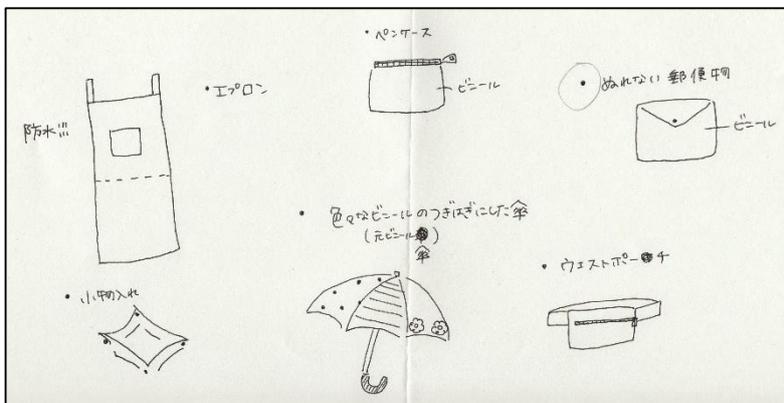
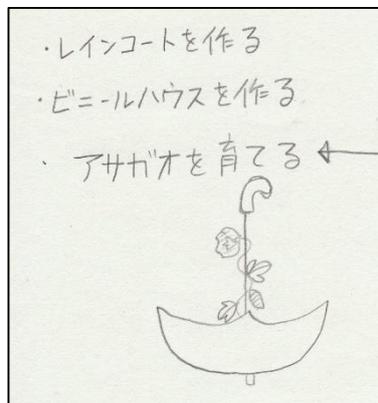
#### 1. 使われなくなったビニール傘の新しい使い方

このお題、株式会社電通で、クリエイティブ部門の希望者試験に出されるようなお題とことです。一瞬にして、私たちメンバーの表情が固まります。ポイントは「使われなくなった」です。「傘」ではありません。しかし、どうしても「傘」という言葉が、今度は私たちの脳を固まらせます。先生のアドバイスは「なるべく数を出してみる。」とのこと。

早速、課題に取りかかります。

普段の授業ではなかなか体験できない、そして答えが一つではない課題を、アイデアで解決することを学びました。

この時に出了、アイデアの一部を紹介します。



ちなみに、プロである先生は、仕事の際、「100以上」の言葉を出されるそうです。メンバー全員が自分のアイデアを発表し、脳のウォーミングアップは終了。

そして次のテーマは「キャッチコピーを考えよう」です。有名なキャッチコピーで、イメージを膨らませます。

#### 《キャッチコピーの一例》

『おしりだって、洗ってほしい。』(TOTO)

『一目で義理とわかるチョコ』(ブラックサンダー)

『親からもらった名前を、いつかブランド名にするんだ。』(東京都内のM専門学校)

『世界は誰かの仕事でできている。』(GEORGIA)

『告白しなかった恋は、どこへいくんだろう。』(LOTTE)





これらのキャッチコピーは、どれも“商品そのもの”に触れていません。商品について強調・主張するだけでは人を引きつけられないことを学びました。さらに“脳トレ”が続きます。

## 2. 「消しゴム」のキャッチコピーを考えよう

普段、私たちが使わない日はないであろう「消しゴム」のキャッチコピー。誰もがその用途を知っているからこそ、個性あるキャッチコピーを生み出すのは難しいものです。

ポイントは「**視点をかえてみる**」  
「**アイデアを深く掘る**」。

私たちが出した答えです。

- ・消せぬ。ボールペンは消せぬ。
- ・丸くなったら一人前。
- ・発想は大きく、僕は小さく。
- ・あの子に貸すため専用。
- ・“ぼく” あつての鉛筆。
- ・間違っ、気付くMONO。
- ・がんばれ、受験生。



- ・丸くなくても投げないで。
- ・私消えても、あなたの心は消せません。

プロである先生も驚くキャッチコピーを考えることができました。この“脳トレ”のおかげで、私たちも俄然やる気になりました。

### 2-2 小林市の職員に、そしてキャストに！

磯部先生が来校された日、私たちにとって重大発表がありました。それは、

**「これから始まるこの取り組みが、小林市長公認の新しい課として発足し、私たちはその『シムシティ課』の職員として所属する**

ということでした。

私たちの先輩方は、「動画」や「歌」の制作に取り組んできました。そして今年は、「私たちが『シムシティ課』のPR動画に出演」することになりました。動画の演出コンテを事前に頂き、イメージを膨らませて撮影に臨みます。

その画面では、シムシティをプレイしていた。		未来の街づくりを 検討しています  遊びではありません。 本気の取り組みです。
市役所の前に課の人々が並び、手にはスマホを掲げている。		
カメラが引くと、市役所をバックに、たくさんの人たちが並び。		それは、 小林市シムシティ課。 (演出コンテの一部)





撮影日は8:00に現場（撮影場所）入りです。現場は「小林市役所」。様々な職種のスタッフさんが、既に忙しそうに準備をされています。撮影日である10月13日は土曜日で庁舎は閉庁日のため、私たちは、別玄関から入り、会議室に用意された「シムシティ課公式ポロシャツ」に着替えます。そして、説明を聞き、撮影に入ります。



初めて入る、市庁舎の応接室。そしてなんと、**市長室に入り、本物の市長の椅子に座って撮影**です。これには思わずテンションが上がりました。急遽、本校の先生方もキャストとして撮影に参加しました。



最終的に完成した「**小林市シムシティ課 イメージムービー**」は、**平成30年10月16日にYouTubeに公開**されました。全世界に向けて、私たちの活動のスタートを宣言しました。

### 2-3 まちづくり検討会の実施

**10月26日（金）** 「まちづくり検討会」と題し、私たちの“ビジネスアイテム”となる、「SIMCITY BUILDIT」について学びます。この日は、株式会社電通から沼田先生に来て頂き、『人の心を動かす魅力的なまちづくり』について、みんなで議論しました。



私たちは“リアルな高校生”で、私たちが考える理想的なまちは「高校生の理想」に過ぎません。街には、様々な方がそこでの生活を営まれており、その様々な方が不満に思うところや、良いと思うポイント、小林市に求めることも様々です。自分以外の違った目線からまちづくりを考えることで、自分には見えなかった悩みや課題が見えてくるのではないかと考え、班ごとに**8つの視点を設けて**、検討に入ることにしました。各班の視点は以下の通りです。

- |                                     |                 |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1班：東京に住む女子高生                        | 5班：小林市の農家       |
| 2班：小林市に住む出産を控えた新婚夫婦                 | 6班：小林市に住む高齢者    |
| 3班：小林市に住む工場経営者                      | 7班：外国人のキャリアウーマン |
| 4班：小林に住むおしゃれな夫婦<br>(外国にあこがれを持っている。) | 8班：小林市に住む高校生    |





早速、その視点に立って「魅力的な小林市」にしていくためのコンセプトを立てます。



コンセプトに沿った街を“見える化”するため、「SIMCITY BUILDIT」にも表現していきましました。道路をつくり、その道路に沿って住宅を配置します。住宅の基礎ができて、住宅をつくるための材料となる鉄骨や木材を生産する工場も作らなければなりません。工場生産された材料を住宅建設地に運ぶと、住宅の建設が再開され、完成します。住宅が完成すると住民（シム）が増加します。住民が徐々に増えると、生活に欠かせないライフラインである電気・水道などが不足するため、発電所や貯水塔を作らなければ、住民（シム）が苦情を言い始め、**住民満足度**が低下していきます。警察や消防も住宅に近い場所に作らなければ、犯罪が発生し始めます。そして、住民が減ることになります。

住民の意見を取り入れ、要望を可能な限り叶えていけば**住民満足度**は上がり、納税額も増えます。





**11月 9日(金)** 2週間をかけて各班が作り上げたコンセプトに沿った理想の街を、互いに発表する「中間発表会」を行いました。この日は、小林市の様々な課の職員の方々が本校に足を運ばれ、「シムシティ課」職員である私たちの考えた理想の街の出来栄を見に来られました。また、この日初めて、エレクトロニック・アーツ株式会社の藤村様も私たちのプロジェクトを見学に見えられました。



(小林市役所職員のみなさん)



(エレクトロニック・アーツ社藤村様)

今回の発表内容は、

- (1) 誰の目線に立って、「魅力ある街」をつくろうとしているのか。
- (2) どういうコンセプトで街をつくるのか。
- (3) ここだけは言いたい、街のこだわりのポイントは何か。
- (4) 実際に作っている「SIMCITY BUILDIT」上の街の紹介。

の4点です。発表準備も、念入りに行いました。なぜなら、私たちが考えている「魅力的な街」「理想の小林市」は、最終発表の際、最もよいアイデアを**現実の小林に再現しよう**とするという、最終目標があるからです。



いよいよ発表です。各班が考えたのコンセプトの一部を紹介します。

#### コンセプトについて

渋谷のような109的なものを  
小林市に。(5884の建設)  
この中にトレンドのお店を取り  
入れる。そんな街をつくる。



#### コンセプトについて

まずは...  
小さい子供がいる親になった気持ちになりまして  
その時に...  
近くに病院がある? 治安はいい? ...と99%の不安が!!!  
そこで...  
そんな不安がなくなるような子育てしやすい街にしたい  
と考えました。





### コンセプトについて

ヨーロッパ風にする為に  
エッフェル塔や大観覧橋、街並は基盤の目と意識。



### コンセプトについて

高校生である今だけでなく、  
将来社会人になっても住み  
続けたいと思う街にしたいと  
考えた。

発表を受け、今度は実際に地方創生課や商工観光課、畜産課などで小林市のまちづくりや市民サービス業務を担っていらっしゃる小林市の職員の方々から、フィードバックを受け、更にブラッシュアップさせます。



職員の方の中には、小林市の姉妹都市である石川県能都町から人材交流で小林にきている方もおられ、市外から見た小林市について、アドバイスをしていただくなど、大変貴重な中間発表となりました。

**11月28日(水)** 12月14日(金)には宮原義久小林市長をはじめ、市の幹部職員の皆さんや市議会議員のみなさん、そして一般市民の皆さんに、まちづくりの提案を行うことが決定しました。そこで、前回の中間発表を受け、各班ともアイデアの深化を図るため、更なる改善点を探りつつ、最終発表となる「まちづくり検討会」に向けて準備を進めました。

普段の自分とは異なる視点で、私たちが生活している小林市を見つめ、考えてみると、様々な発見や課題が見えてきます。特に、「高齢者」の視点で考えている6班は、高校生である私たちでは感じられない「生活のしにくさ」に焦点をあて、以下のような課題から、理想のまちを再検討しました。



- |                 |                |                 |
|-----------------|----------------|-----------------|
| ・ 道路が狭い         | ・ 交通が不便        | ・ 店が遠い          |
| ・ 道路がどこどこまで歩けない | ・ 交通機関が少ない     | ・ 店が少ない         |
| ・ 歩道が狭い         | ・ バス、電車の本数が少ない | ・ 店が小さい         |
| ・ 道路の段差が多い      | ・ バス、電車までが遠い   | ・ 店に売ってある品物が少ない |

歩道があっても「段差がある」し、そもそも「歩道があるところが少なく、道幅も狭い」、JR小林駅は整備されたものの、「吉都線の利用者が少なく、本数が少ない」など、高齢者は「生活のしにくさ」を感じているに違いありません。





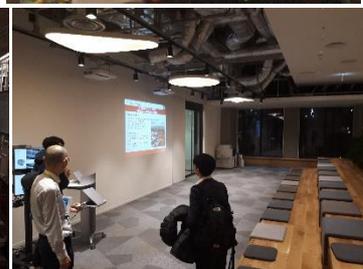
この日の授業の終わり、ビッグニュースが届きました。それは、「私たちはまちづくりを通じて社会に貢献します」をグループ全体の基本使命に掲げている『三菱地所株式会社』で東京現地研修を受講できるというものです。

三菱地所様は、三菱グループの一つとして、日本のみならず海外の主要都市の都市開発などを手がけている大企業です。今回の訪問の目的は、普段、都市計画等の業務を担当されている“まちづくりのプロ”の方々に、「小林市シムシティ課」が考えている小林市の「理想のまち」を見て頂き、アドバイスをもらうことです。

**12月10日(月)** 朝から小林を出発し、一路「東京」に向かいます。お昼過ぎに東京に到着し、まず東京駅に向かい、沼田先生と合流。その後、翌日の意見交換会で行うプレゼンテーションの打ち合わせを行いました。その後、17時に三菱地所様とのミーティングです。12月の東京は日の入りが早く、空は真っ暗。しかし、日本一のビジネス街「東京丸の内」は、どの高層ビルの窓からも赤々と明かりが漏れています。

そんな中、徒歩で三菱地所本社近くの「3×3 Lab Future」という、会社でも自宅でもない第3の場所「サードプレイス」を意味する、業種業態の垣根を越えた交流・活動拠点でミーティング開始です。

意見交換会では、元テレビアナウンサーの方が司会進行をされることや、どのような形で発表をするかの確認、プレゼンの中身を簡単にお伝えし、その内容により詳しい社員の方にお声かけ頂けるとのことでした。打ち合わせ後は、実際に意見交換会を実施する三菱地所本社内のオープンスペースにて、機器の確認などを行い、宿泊先に向かいました。



**12月11日(火)** 三菱地所様との意見交換会当日、東京で朝を迎え、東京のビジネス



スマンと同じく、ビジネス街を歩いてプレゼン会場に向かいます。到着後は「名刺交換」から。オープンスペースのガラス越しの向こう側は、三菱地所の社員の方が利用する「おしゃれな社員食堂」になっていて、私たち高校生を珍しそうに見ています。これまで感じたことのない緊張を感じつつ、本番ギリギリまで二人で打ち合わせを行いました。

開始時刻前になると、通りがかりの社員の方々が足を止め、私たちのプレゼンが始まるのを待っています。

12:00、沼田先生からの本プロジェクトの説明、本校の先生による小林市の概要説明の後、課の代表2名が所属する7班





の「外国人のキャリアウーマン」の視点で考える理想の街についてプレゼンしました。外国人のキャリアウーマンの視点から更にターゲットを『日本で別荘を探している富裕層の外国人』に絞り込み、第二の生活拠点（別荘地）として選ばれる小林市はどんな街であるかを考えました。その街のコンセプトは『都会と田舎が共存する街』。都会の一部を“緑化”するのではなく、一つの街に都会と田舎を共存させ、「都会の便利さ」と「田舎の癒し」を、イメージとして橋でつなぐことを発表しました。



コンセプトの街と現在の小林市を比較した際、現在の小林市には「外国語表記が少ないことで、外国人を受け入れる体制が整っていないのではないか」と感じ、外国人から見たときに「歓迎されていないのでは?!」と誤解されてしまうと考えたことを説明しました。その上で対策として、本校生徒が中心となって約500人弱の小林市在住外国人にヒアリングを行いながら、外国人向けのガイドマップの制作を行い、市内の主要施設に設置して試してみることを考えていることを伝えました。

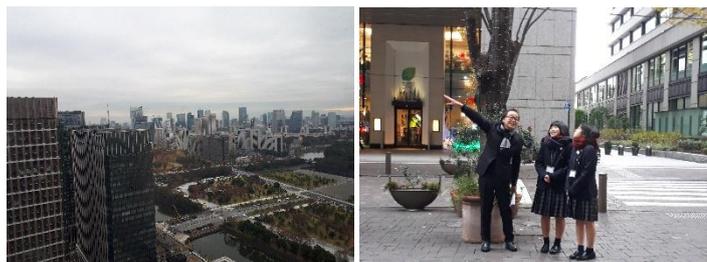
私たちのプレゼンを見ていた三菱地所の社員の方々からも様々な意見を頂きました。

「田舎に住んでいる人たちは、どうしても都会に憧れをもってしまいが、都心から見ると田舎はとても魅力的な場所である。小林市ならではの魅力に外国人は、惹かれて観光に来るはずだから、今小林市が持っているものを発信していくのが良い。例えば、小林市の桜並木は海外の人から見てもすごく魅力的なものになると思う。」

私たち「“田舎”女子高生」の視点と、“都会”で働くビジネスマン。加えて、アドバイスをくださるのは「まちづくりのプロ」です。大変貴重な意見を頂きました。

意見交換会後は、三菱地所が開発された東京のオフィス街「丸の内」を探索しました。高層ビルから東京の街を見渡すと、シムシティの画面を見ているように整備されています。昨年生まれ変わった東京駅や、小林市では見ることのできない高層ビル群。このまちで生活する人の立場に立ったまちづくりが、ここ「丸の内」で実践されていました。

小林市に住む私たち二人にとって、すべてが興味深く刺激的な話で、大変貴重な東京現地研修となりました。





## 2-4 まちづくりタウンミーティングの開催

**12月14日(金)** これまでの私たちの活動は「まちづくり検討会」と銘打ち、学校の教室で行ってきました。そしてこの日は、これまでの取り組みの成果と私たち“シムシティ課の高校生”が考える魅力ある小林のまちづくりについて、宮原義久市長をはじめとする市幹部職員の皆様、議員の皆様、そして市民の皆様にプレゼンテーションを行いました。学校を飛び出し、リニューアルした小林駅“KITTO小林”の2階にある市民交流スペースで実施しました。



発表の内容	タイムスケジュール
<div style="text-align: center;"> <p>① 誰にとって魅力的な街を作ったのか</p> <p>↓</p> <p>② 街のコンセプト</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: #3498db; padding: 10px; border-radius: 10px; width: 45%;"> <p>③ SIMCITYで作った理想の街</p> </div> <div style="background-color: #3498db; padding: 10px; border-radius: 10px; width: 45%;"> <p>④ 小林市を理想の街に近づけるための事業アイデア</p> </div> </div>	<p>13:30 開会</p> <p>13:30～13:40 経緯説明(市)</p> <p>13:40～14:20 発表(生徒4班)</p> <p>14:20～14:30 休憩</p> <p>14:30～15:10 発表(生徒4班)</p> <p>15:10～15:25 参加者による投票</p> <p>15:25 優勝チーム発表</p> <p>15:30～15:35 宮原市長講評</p> <p>15:40 閉会</p>

各班の提案内容は以下のとおりです。

班	ターゲット	コンセプト	状況分析と具体的アイデア
1班	東京の女子高生	エンタメが発達した小林市	<p>硫黄山の噴火により、小林市を訪れる観光客が減少している。特にえびの高原に通じる県道1号線が通行止であることから、生駒高原は大打撃を受けている。そこで「映え、増え、栄え作戦」と題し、「映え」を開発し、観光客を「増や」し、街を「栄え」させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●映えスポット”を生駒高原につくる。</li> <li>●生駒高原に“大きな額縁”を設置する。(絶景が絵になる)</li> <li>●バス停をメロンやぶどうなど特産物の“オブジェ”にする。</li> <li>●発電ブランコを作る。</li> </ul>
2班	新婚夫婦	子育てしやすい街	<p>子育てへの不安や悩みを感じても、相談したりする場が小林に不足しているのではないかと考え、子育て世代の交流スポットを作ってみてはどうだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●今ある公民館をリノベーションし“全天候型の公園”にする。</li> <li>●こどものため、“絵が描ける壁”の設置。</li> <li>●母親のための“カフェ”の併設。</li> </ul>





班	ターゲット	コンセプト	状況分析と具体的アイデア
3班	小林で働く人	働きやすい街	<p>「働きやすい」=『休みやすさ』と考案。仕事帰りに、あるいは休日に癒やしを求め、くつろげる場所を創る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●“足湯カフェ”をつくる。(体を癒やししながら、食事ができる)</li> <li>●足湯の匂いを変えたり、ドクターフィッシュによるイベントを実施し、「明日も頑張ろう」という気持ちにさせる。</li> </ul>
4班	おしゃれな中高年夫婦	自然と気品を兼ね備えた小林市	<p>小林市には芸術に触れたり、季節を感じるができる場所が少ない。そこで、そのような場所を創ってはどうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●商店街の空き店舗を活用し、ヨーロッパの町並みにあるような“パン屋さん”と“オープンスペース”を配置。</li> <li>●パン作り教室などのイベントも開催。</li> </ul>
5班	小林市の農家	農家のイメージUP	<p>農家に対する「大変そう」「休みがない」などのイメージを払拭し、しっかりと儲けることのできる仕組みをつくる。なかでも、大規模農家と小規模農家の間にいる、“少しだけでも売りたい”農家を応援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●生産物を“コミュニティバス”の車内で販売する仕組みをつくる。</li> </ul>
6班	小林市に住む高齢者	高齢者に便利な街	<p>高齢者が「移動することの不安」を持っていることに着目。免許を返納すると移動手段がない。公共交通機関も便数が少ないため、“シニアカー”で移動をする高齢者が多い。結果、事故も多くなっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●“シニアカー専用レーン”を設置する。</li> </ul>
7班	海外の富裕層	都会と田舎が共存する街	<p>日本の自然は外国人にとって魅力となるはず。しかし、都会の便利さもそこには必要。これまではこちらが「楽しみ方を用意」しておくことが主流だったが、今の時代は「この街には何があるか」を素直に伝え、観光客が「楽しみ方を考える」ように変化してきている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●外国語対応のガイドブックの作成</li> <li>●SNSによる情報発信も“外国語”に対応させる</li> </ul>
8班	小林市に住む高校生	住み続けたいと思う街	<p>現在、小林市の商店街には活気がない。学校帰りに立ち寄れる場所も限られている。だからこそ、商店街を活気づけたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●空き店舗を活用する。</li> <li>●小さな映画館やe-sportsが楽しめる場所を、空き店舗を利用して設置する。</li> </ul>





**1班：エンタメが発達した小林市**



**2班：子育てしやすい街**



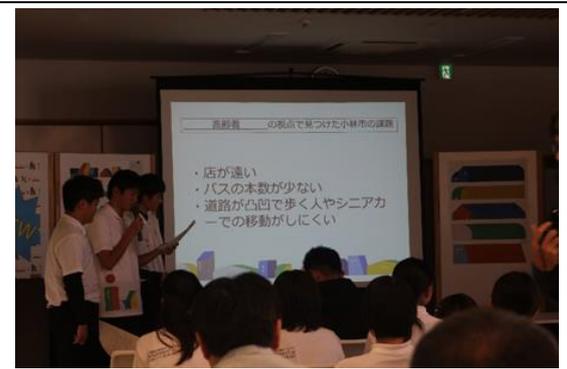
**3班：働きやすい街**



**4班：自然と気品を兼ね備えた小林市**



**5班：農家のイメージUP**



**6班：高齢者に便利な街**



**7班：都会と田舎が共存する街**



**8班：住み続けたいと思う街**

すべてのプレゼンテーションが終了し、私たちを含め、会場にいらっしやる全ての方々に一人一票で投票をしてもらいました。





《集計結果》

※票数は上位3班のみ表示

班	ターゲット	コンセプト	票数
<b>1班</b>	<b>東京の女子高生</b>	<b>エンタメが発達した小林市</b>	<b>13</b>
2班	新婚夫婦	子育てしやすい街	
3班	小林で働く人	働きやすい街	
4班	おしゃれな中高年夫婦	自然と気品を兼ね備えた小林市	
5班	小林市の農家	農家のイメージUP	12
6班	小林市に住む高齢者	高齢者に便利な街	
7班	海外の富裕層	都会と田舎が共存する街	
8班	小林市に住む高校生	住み続けたいと思う街	11

私たち小林秀峰高校の「シムシティ課」職員が31名、会場にいらっしやった方が27名の合計58名でした。集計の結果、**優勝は『1班 エンタメが発達した小林市』に決定**しました。私たちの発表を見て頂いた方の感想を、一部紹介します。

《1班に対して》

- ・映え、増え、栄えの整理がよかった。
- ・取り組み可能な事業。
- ・「映え・増え・栄え」のキャッチが心に残った。
- ・ワクワクする。どれだけの期間、効果があるのか課題。
- ・噴火被害からの復興という着眼点は素晴らしい。

小林市シムシティ課タウンミーティング  
～市長に発表しよう～ 評価記録用紙

各班の発表毎に、評価をお願いいたします。なお、全ての班の発表が終了しましたら、最も良かった班に1票投じて頂く「投票用紙」を別途お配りいたします。

発表順	班名	発表内容	発表姿勢	事業実現度	メモ
1	1班				映え、増え、栄えの整理がすばらしい。リビウー、緑地の緑地がはじけてる。課題は？
2	6班				高齢者が住みやすい街が課題である。
3	2班				シムシティに種々、ミッドタウンはあっていい。ササキの文化とパースとの関係を考えてほしい。コンセプトが面白い。
4	8班				施設とコワーキングに集約するのはいいと思う。緑の面積を増やしてほしい。市の緑地の面積の割合が少なくていいと思う。
5	3班				高齢者が住みやすい街が課題である。
6	5班				コワーキングの施設はいいと思う。緑地の面積を増やしてほしい。
7	4班				緑地を増やしてほしい。パースの緑地、緑地を増やしてほしい。
8	7班				緑地を増やしてほしい。緑地を増やしてほしい。緑地を増やしてほしい。

審査発表の後、宮原義久小林市長から全体の講評を頂きました。

全ての班で共通して出ている意見として「自然が豊か」とあった。そして、どんな街にしていきたいかという点に関しては「住みやすい街」「働きやすい街」「買い物がしやすい街」「交通の便がいい街」ということが挙げられていた。市として、皆さんの意見は可能な限り実現に向けて取り組んでいきたい。

皆さんには今回、「シムシティ課」の職員として小林について考えていただく中で、小林のいいところも悪いところも見えてきたかと思う。今後は、小林だけでなく、東京や大阪、北海道など日本の他の地域や、海外にも目を向けてもらって、その上で外から見た小林の良さを再度、感じてもらえるといいと思う。

様々な提案をしてもらったが、これらを実現していくためにはお金がかかる。このお金は市民の皆さんが収めている税金である。税金を使って何かをするためには、そこに「政治」が関わっている。みなさんには既に18歳になっている人もいますかと思う。「政治」が良いとか悪いではなく、皆さん一票でこのプロジェクトで取り組んだような“まちづくり”が行われていく。これを機会に是非、「政治」にも関心を持ってほしい。





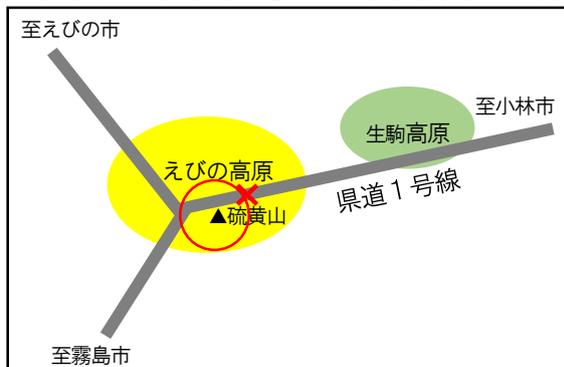
## 2-5 アイデアをカタチに

1班が優勝したということで「**映え・増え・栄え作戦**」を実行していくことになりました。1班は小林市の最も有名な観光地の一つである“生駒高原”を盛り上げるため、インスタ「映え」スポットを設け、観光流入が「増え」るようにし、結果として小林市が「栄え」という提案を行った班です。早速、生駒高原に現地調査に出かけることにしました。

### 4月19日(金)

春晴れの天気にもまれたこの日、新メンバーとなった私たち28名は生駒高原に現地調査に出かけました。平日ではありますが、この天気です(写真参照)。この時期、アイスランドポピーも咲き始めています。ですが、**お客さんの姿はほとんどありません。**

それは、去年の1班のメンバーも言っていました。「えびの高原の硫黄山が2018年4月19日に250年ぶりに噴火し、噴火警戒レベルが引き上げられたことで**えびの高原に通じる県道1号線(小林えびの高原牧園線)が通行止め**になっている」ためです。県道1号線は小林市からえびの高原へ通じる道路で、えびの高原には小林市からの他、えびの市・鹿児島県霧島市からもアクセス可能です(下記図参照)。しかし、県道1号線が通行止めであるため、本来この時期に霧島市やえびの市からえびの高原を訪れ、えびの高原から生駒高原に観光に訪れる人の流れがストップしていることが原因です。正直、「これはなんとかしなければならぬ」という気持ちが高まりました。



× 付近の様子→



← 生駒高原付近の道路標示

生駒高原は「花の駅 生駒高原」として、宮交ホールディングスのグループ企業である宮交ショップアンドレストラン様が運営されています。小林市の観光地ではありますが、ここで何かをするためには、交渉のうえ、許可を頂くことが必要となります。後日、アポイントを取った上で交渉させて頂くことにして、今日はまず、調査を行います。





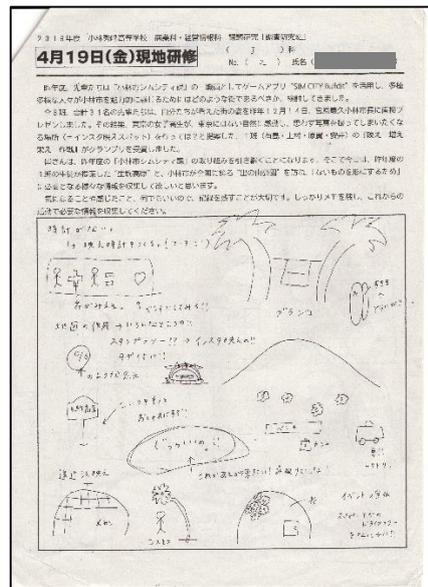
広大な敷地一面にアイランドポピーと菜の花が咲いており、天気の良いのも相まって大変素晴らしい“絶景”を望むことができます。この自然は小林市にとって、大変貴重な地域資源であることが実感できます。

しかし、同時に課題もあります。ほとんどのメンバーが、以下の点を課題としてあげました。

- ・座る場所がない。
- ・時計がない。
- ・移動が大変。
- ・木陰がない。
- ・花畑の奥に進むと、トイレがない。

これらの課題を解決しつつ、私たちは具体的に「インスタ映えスポット」の検討を進めていくことになりました。

また、生駒高原からの帰り、小林のもう一つの有名スポット「出の山公園」にも立ち寄りしました。私たちのように生駒高原からの帰りに立ち寄り方が多いのではないかと考え、伺いました。



出の山池



出の山湧水



出の山の湧水で泳ぐチョウザメ

5月末から6月初旬にかけては『ホテル祭り』が開催され、多くの人で賑わいますが、平日の昼間は生駒同様、観光客はいませんでした。

この日の現地調査で得た情報を持ち帰り、今後の活動に繋がります。

### 5月10日(金)～6月7日(金)

今年のメンバーは7班に分かれています。各班、実際に現地を見たことで具体的なアイデアが生まれます。そして、アイデアをカタチに仕上げていきます。

① 「移動に使えるトロッコ」

5 班 今までにないもの

冬と夏に訪水人数が少ない	モノマネゴキアよりかきかきを使用している	体験
キャンプ場に5割	園内に給水できる所がない	映元
土産に沢山の土産を扱っている	時計がない	小林市で有名な土産を売りたい

② スタンプラリー 尾根→

生駒高原の回

③ 「休けいスペースにもてる小屋」

③ 「道に沿う鉄琴」

① 映えるジュースしぼり

水何処か設置予定

③ 星が映り分けるキャンプ場





そんな中、5月31日金曜日、生駒高原を訪問しました。私たちメンバーを代表し2名でこれまでのシムシティ課の活動報告と現在の活動状況について説明。その後、最終的には生駒高原を更に活性化するために、私たちのプランを是非実行させて欲しいことを訴えました。ご対応頂いた宮交ショッピングアンドレストラン「花の駅生駒高原」の統括店長光森様と同副店長の廣澤様からは、



「(硫黄山の)噴火の影響で、かなり客足が遠のい

ている状況。高校生であるみなさんがここ(生駒高原)を活性化し、地元へ貢献したいという思いは大変嬉しい。是非、連携して取り組みましょう。」

と言って頂き、交渉は成立。**生駒高原の大地に、アイデアを描く**ことが実現できることになりました。私たちのアイデアがカタチになる日が近づいてきました。

### 第3章 検証と課題

私たち「小林市シムシティ課」の活動はまだまだ道半ばですが、これまでの活動の検証を仮説に照らし合わせて行ってみました。

仮説1	仮説2
<p>まちづくりについて、ゲームを用いて検討することで、視覚化が可能となり、まちづくりを親しみやすいものとして感じてもらえるようになるのではないかと。</p>	<p>これまでにない産学官連携に取り組むことで、パブリシティ効果を生み、新たな価値の創造につなげることができるのではないかと。</p>

私たち「小林市シムシティ課」の活動は、まちづくりシミュレーションゲーム「SIMCITY BUILDIT」を用いて、実際のまちづくりの検討を行ってきたところにその話題性があります。活動の中では、課内における「中間発表(11月)」、三菱地所様での「意見交換会(12月)」、そして「まちづくりタウンミーティング(12月)」の計3回、各班が検討を重ね、生み出したアイデアをプレゼンする場がありました。その際、**各班のアイデアを「SIMCITY BUILDIT」上に表現し“視覚化”することで、大変分かりやすく訴求効果があった**ことは間違いありません。実際に、「まちづくりタウンミーティング」に参加された小林市議会議員の方は「高校生が考えるアイデアを、聞くだけではなかなか分かりづらいところがあるが、スマートフォン上に街のイメージが出ていることで理解しやすかった」とのご意見を頂きました。

**仮説1**の「視覚化が可能となり」一定の効果があったと考えられます。

しかし、どれだけの方にまちづくりについて「親しみ」を感じてもらえたかは未知数であり、検証することができませんでした。



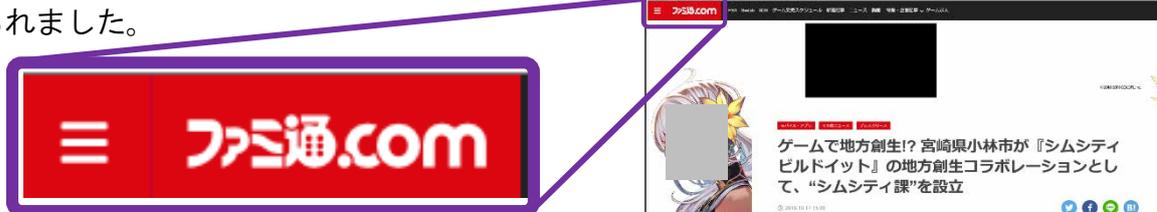


次に「**仮説2**」について、まずはパブリシティ効果について分析してみました。まずはWeb上での反応です。Webでの掲載結果と広告換算値を一覧にまとめた資料を小林市からご提供頂きました。これは資料の一部であり、各メディアの広告換算値は公表できませんが、「小林市シムシティ課」発足時のパブリシティだけでも広告費換算で約1,800万円近くの効果があったことが証明されています。

PRタイトル	宮崎県小林市が人気ゲームとコラボし、「シムシティ課」を設立！				
報告記事数	179				¥17,781,561
掲載日	報告日	媒体名	記事タイトル	URL	広告換算値
2018/10/17	2018/10/24	ニコニコニュース	ゲームで地方創生!? 宮崎県小林市が『シムシティビルドイット』の地方創生コラボレーションとして	https://news.nicovideo.jp/watch/nw4036750	111
2018/10/17	2018/10/24	ハッカドール	ゲームで地方創生!? 宮崎県小林市が『シムシティビルドイット』の地方創生コラボレーションとして	https://web.hackadoll.com/n/8nyvz	97
2018/10/17	2018/10/24	5NEWS	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	http://c.googukip.fc0e.com/news/newstail/469712	21
2018/10/17	2018/10/24	dメニュー	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	http://topics.smt.docomo.ne.jp/article/mantan/entert	89
2018/10/17	2018/10/24	NEWS Collect	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://newscollect.jp/article?id=4252685094198160	91
2018/10/17	2018/10/24	nor	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://this.kijiji/425268509419816038	25
2018/10/17	2018/10/24	So-netニュース	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://news.so-net.ne.jp/article/detail/1656671/	04
2018/10/17	2018/10/24	トピックプラス	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	http://topicplus.info/news/index.php?id=4252685094	96
2018/10/17	2018/10/24	ハッカドール	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://web.hackadoll.com/n/8nyvz	97
2018/10/17	2018/10/24	カゾオ	人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://web.kamei.io/article/1724462759647592301	98
2018/10/17	2018/10/24	ニュースサイト「毎日新聞」	人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	http://mainichi.jp/articles/20181017/dyc/00m/200/0	23
2018/10/17	2018/10/24	ニコニコニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』のコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://news.nicovideo.jp/watch/nw4036419	111
2018/10/17	2018/10/24	愛媛新聞ONLINE	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』のコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://www.ehime-np.co.jp/article/201810170028	91
2018/10/17	2018/10/24	au Webポータルコミュニティ	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://article.auone.jp/detail/1/1/1/20_9_20181017	96
2018/10/17	2018/10/24	dメニュー	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	http://topics.smt.docomo.ne.jp/article/oricon/enterta	89
2018/10/17	2018/10/24	GREE ニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	http://jp.news.gree.net/news/entry/3015202	69
2018/10/17	2018/10/24	福井新聞	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	http://mainichi.jp/articles/20181017/orc/00m/200/0	23
2018/10/17	2018/10/24	FM AICHI	宮崎・小林市『シムシティ』とコラボ	https://www.fukushima-bun.co.jp/articles/-/720832	70
2018/10/17	2018/10/24	KKB鹿児島放送	宮崎・小林市『シムシティ』とコラボ	http://fma.co.jp/news/?newsid=2121640&c=30	47
2018/10/17	2018/10/24	OHK岡山放送	宮崎・小林市『シムシティ』とコラボ	http://www.kkb.co.jp/oricon_style/oricon_style_detail	25
2018/10/17	2018/10/24	ZIP-FM77.8	宮崎・小林市『シムシティ』とコラボ	http://www.ohk.co.jp/entame/news.php?ID=2121640	34
2018/10/17	2018/10/24	ステレオ	宮崎・小林市『シムシティ』とコラボ	http://zip-fm.co.jp/oricon/2121640.asp	16
2018/10/17	2018/10/24	日本外信名産	宮崎・小林市『シムシティ』とコラボ	https://www.nagoya.oricon.net/gainuhtml?ID=181d	34
2018/10/17	2018/10/24	カゾオ	宮崎県小林市が『シムシティ課』を設立。『シムシティビルドイット』を遊んで若い世代にまちづくりを	https://web.kamei.io/article/1724290896924200101	97
2018/10/17	2018/10/24	ハッカドール	宮崎県小林市が『シムシティ課』を設立。『シムシティビルドイット』を遊んで若い世代にまちづくりを	https://web.hackadoll.com/n/8nyvz	97
2018/10/17	2018/10/24	LINE NEWS	宮崎県小林市が『シムシティ課』を設立！ 『シムシティビルドイット』を遊んで高校生とのまちづくりを	http://news.line.me/articles/oa-rp83769/0f1b83919	111
2018/10/17	2018/10/24	ニコニコニュース	宮崎県小林市が『シムシティ課』を設立！ 『シムシティビルドイット』を遊んで高校生とのまちづくりを	https://news.nicovideo.jp/watch/nw4037274	111
2018/10/17	2018/10/24	Love TechMedia	宮崎県小林市が『シムシティ課』を設立！ ゲームと自治体の夢の地方創生コラボレーションが実現	https://lovetech-media.com/news/social/20181017	96
2018/10/17	2018/10/24	わげんweb	宮崎県小林市が人気ゲームとコラボし、「シムシティ課」を設立！	http://waegenise.jp/msk/57136/	96
2018/10/17	2018/10/24	ねとらび	市長、朗読です！ 宮崎県小林市が『シムシティ課』を新設。『シムシティビルドイット』を遊んで	https://netnavi.appcard.jp/e/6ojMk3d	96
2018/10/17	2018/10/24	ニコニコニュース	市長、朗読です！ 宮崎県小林市が『シムシティ課』を新設。『シムシティビルドイット』を遊んで	https://news.nicovideo.jp/watch/nw4037785	111
2018/10/17	2018/10/24	ハッカドール	市長、朗読です！ 宮崎県小林市が『シムシティ課』を新設。『シムシティビルドイット』を遊んで	https://web.hackadoll.com/n/8nyvz	97
2018/10/17	2018/10/18	JNews	ゲームで地方創生!? 宮崎県小林市が『シムシティビルドイット』の地方創生コラボレーションとして	https://jnews.tokyo/article/1269009/29	91
2018/10/17	2018/10/18	カゾオ	ゲームで地方創生!? 宮崎県小林市が『シムシティビルドイット』の地方創生コラボレーションとして	https://web.kamei.io/article/17242224361204490101	98
2018/10/17	2018/10/18	ファミ通.com	ゲームで地方創生!? 宮崎県小林市が『シムシティビルドイット』の地方創生コラボレーションとして	https://www.famitsu.com/news/20181017/1659898.htm	118
2018/10/17	2018/10/18	ニコニコニュース	ゲームで地方創生!? 宮崎県小林市が『シムシティビルドイット』の地方創生コラボレーションとして	https://news.nicovideo.jp/watch/nw4036750/news_re	111
2018/10/17	2018/10/18	LINEニュース	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://ch-news.line-apps.com/articles/oa-mantanw	108
2018/10/17	2018/10/18	MANTANWEB	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://mantan-web.jp/article/2018101700e0m0000	108
2018/10/17	2018/10/18	マイナビニュース	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://news.mynavi.jp/article/20181017-7086557	446
2018/10/17	2018/10/18	スポーツキャスト	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	http://sports.mocast.jp/news/entertainment/515688	574
2018/10/17	2018/10/18	goo ニュース	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立(MANTANWEB)	https://news.goo.ne.jp/article/mantan/entertainment	332
2018/10/17	2018/10/18	eo	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立あなたにおすすめ	https://eotopics.smt.docomo.ne.jp/mantan/425268509419	803
2018/10/17	2018/10/18	dメニュー	シムシティ人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立(MANTANWEB) 人気入	https://topics.smt.docomo.ne.jp/article/mantan/entert	89
2018/10/17	2018/10/18	毎日新聞	人気ゲームが宮崎県小林市とコラボ 『シムシティ課』設立	https://mainichi.jp/articles/20181017/dyc/00m/200/0	23
2018/10/17	2018/10/18	373news.com	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』のコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://373news.com/news/oricon/ajiji.php?id=21216	92
2018/10/17	2018/10/18	Ameba News	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』のコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://news.ameba.jp/entry/20181017-586f/	966
2018/10/17	2018/10/18	千葉日報	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』のコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://www.chibanippo.co.jp/life/oricon/540018	959
2018/10/17	2018/10/18	上毛新聞ニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』のコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://www.jpmo-news.co.jp/life/oricon/86343	54
2018/10/17	2018/10/18	MSNニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://www.msn.com/ja-jp/news/national/KE5K6EX	319
2018/10/17	2018/10/18	ザンシー	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://www.gunosy.com/articles/entw/83PmU	319
2018/10/17	2018/10/18	AGARA総研日報	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	http://www.agara.co.jp/news/entame/?id=2121640&p=	16
2018/10/17	2018/10/18	BIGLOBEニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://news.biglobe.ne.jp/entertainment/1017/ori_18	39
2018/10/17	2018/10/18	CLUB Panasonic	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://club.panasonic.jp/oricon/news/detail/?id=212	394
2018/10/17	2018/10/18	Felial	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://mall.373news.com/news/felial/oricon_news=21216	34
2018/10/17	2018/10/18	FM NACK5	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://www.nack5.co.jp/oricon_2121640.shtml	48
2018/10/17	2018/10/18	GREE	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	http://jp.news.gree.net/news/entry/3015202?from_gm	769
2018/10/17	2018/10/18	Infoseekニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://news.infoseek.co.jp/article/oricon_2121640/	380
2018/10/17	2018/10/18	livedoor	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	https://news.livedoor.com/article/detail/15456934/	372
2018/10/17	2018/10/18	mixiニュース	宮崎・小林市、ゲーム『シムシティ』を活用したコラボ部設置 地方創生プロジェクトで高校の授業に	http://news.mixi.jp/view/news?pid=5335087&media	20

メディアごとの数値は公表できません。

そして何より、今回「ゲーム」であったことにより、これまでの小林市や本校の取り組みを取り上げてくださったメディアに加え、ゲームを専門に取り上げるメディアで取り上げられました。



特に上記に提示した「ファミ通.com」さんは、三菱地所様での「意見交換会」の際と、小林市で開催した「まちづくりタウンミーティング」にも取材にお越し頂き、私たちの活動に大変興味を持って頂きました。





Webだけでなく、テレビ宮崎のニュースやBTVケーブルテレビにも取り上げていただきました。



また、「ソーシャル&エコマガジン“ソトコト”」（月刊誌）が、小林市の取り組みを記事に取り上げてくださるとのことで、本校にも取材に来て頂きました。これまでの本校と小林市の連携をまとめて、見開き3ページの記事にしてくださいました。（左参照）

時事通信社が全国の学校や教育関係者に向けて発行している「内外教育」（毎週2回火・

金曜日発行）や、平成31年10月31日付の朝日新聞にも取り上げられるなど、昨年度までの活動と同じように、多数のメディアに露出することができました。

そして何より、「小林市シムシティ課」の活動が全国初の取り組みということ、その中でも学校の授業で「ゲーム」が教材の一つとして活用されているということにフォーカスを当て、記事にして頂いたメディアも多数ありました。

以上のことから、仮説の検証を行った結果は、以下の通りです。

### 仮説1

△

まちづくりについて、ゲームを用いて検討することで、視覚化が可能となり、まちづくりを親しみやすいものとして感じてもらえるようになるのではないかと。

### 仮説2

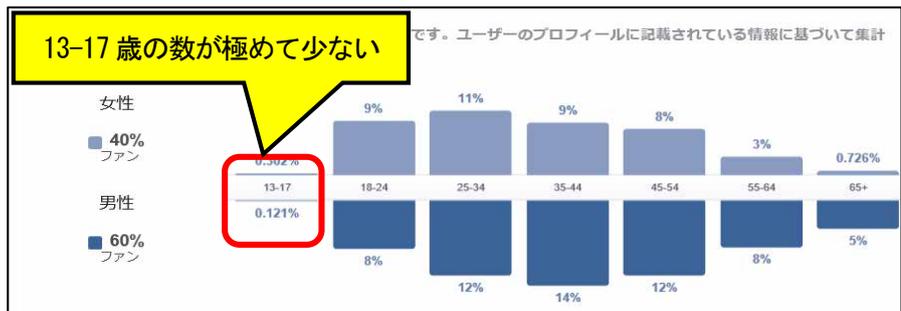
◎

これまでになかった産学官連携に取り組むことで、パブリシティ効果を生み、新たな価値の創造につなげることができるとはならないか。

課題として「小林市シムシティ課」としての活動が現在進行中であるため、市民をはじめとする小林市の“関係人口”の方々に評価して頂くには、まだまだ時間が必要だということが挙げられます。

今後は、フォロワー数が1,700人を突破した本校 Facebookに加え、若者ユーザー数の多い“Instagram”の開設などを視野に

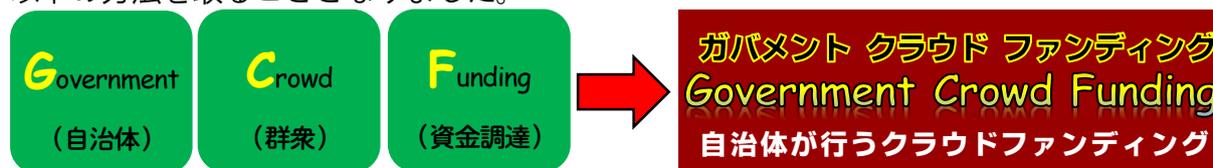
入れ、より工夫しながら多くの人に向けて情報発信をし続けることが必要です。





## 第4章 今後の展望

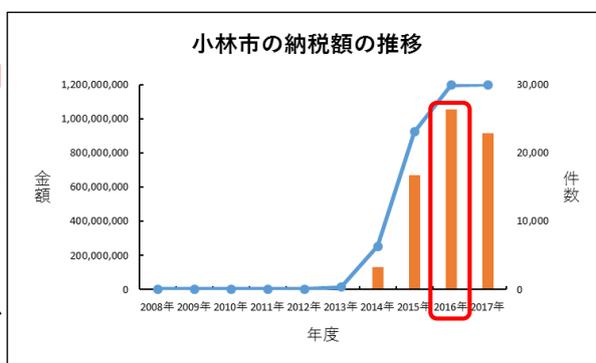
私たちが「小林市シムシティ課」のアイデアをカタチにするために、避けては通れないのが“**資金をどのように集める（出資を募る）か**”です。宮原市長がおっしゃっていたように、地方自治体が住民のために行う各種サービスは基本的に全て「税金」で賄われています。「税金」で私たちの活動を続けていくためには、市議会での審議が必要となるなどハードルが高いようです。そこで、地方創生課の深見様に相談し、資金の回収方法については以下の方法を取ることとなりました。



**ガバメントクラウドファンディング**とは、**自治体が抱える問題解決のため、ふるさと納税の寄付金の「使い道」をより具体的にプロジェクト化し、そのプロジェクトに共感した方から寄附を募る仕組み**です。

(<https://www.furusato-tax.jp/>「ふるさとチョイス」HPより)

小林市では2008（平成20）年度にふるさと納税制度を導入し、初年度は全国から



64件、約400万円の寄附を受け入れました。その後、「ンダモシタン小林」や本校が企画・制作に携わった「山奥篇」「サバイバル下校」「田舎女子高生（※PRミュージック）」などのPRが功を奏し、**2016（平成28）年度には29,930件、約10億8千万円の寄附**が全国から寄せられました。更に、返礼品としては全国で唯一「子牛の命名権」を準備。5月31日（金）にはフジテレビ「とくダネ!」、6月1日（土）には「めざましどようび」で紹介されるなど、大きな反響を呼んでいます。

このようなノウハウも活かしつつ、「小林シムシティ課」が進めているプロジェクトでは、自治体が行う**ふるさとの納税制度を活用したクラウドファンディング**、略して**GCFを実施することが決定**しました。

6月14日（金）早速、に株式会社トラストバンクふるさとチョイス事業本部の増山様にお越し頂き、ガバメントクラウドファンディングについて学習しました。

クラウドファンディングを行うには“プロジェクトオーナー”が必要であること、人を行動させるには、興味を持ってもらうこと、そして何より**共感が得られる**ことが最も必要であるということでした。



私たちは“プロジェクトオーナー”として、インターネット上で資金提供を呼びかけていかなければなりません。その際、ただ単に「お金を出してください!」では、絶対に資金を集めることはできません。寄附者は、プロジェクトの





内容に共感し、その結果『じぶんごと』として捉えたときに、初めて寄附という行動に移すこととなります。共感を呼ぶためには、次の3つが必要です。

1. 誰のために、何を（課題）、どうやって解決するか
2. 主体的な実行者（組織）
3. 広める・共感をつなげる

この3つの点について、今後残された期間しっかりと向き合い、検討を重ね、

7月25日木曜日

ふるさとチョイス様のWebサイトにおいて

「小林市シムシティ課」GCFを開始します。

## 第5章 終わりに

現在3年生である**私たちは本校第10期生**です。現在、私たちが「シムシティ課」の職員の一員として活動することができるのは、これまで「課題研究調査研究班」として活動されてきた**先輩方のおかげ**であり、そして多くの“**関係人口**”の皆さんから活動を応援して頂いているからです。



今年3月に卒業した「課題研究調査研究班」31名のメンバーのうち、地元に残っている先輩は4人。**メンバーのうち約9割は地元を離れ**、新たな場所に生活の拠点を移して新生活を送っています。**小林市には大学・短期大学はありません**。専門学校は数年前によりやく1校設置されました。働く場所も限られています。このような現状を目の当たりにしたとき、**地元を離れたたくなくても離れなければならない状況**が今の小林市にはあります。

地元を離れても、地元に対する思いはなくなることはありません。その思いをカタチにできる制度として「ふるさと納税」制度は生まれました。昨今、納税額に対する返礼品の金額（返礼割合）や地場産品以外を返礼品として提供していることについて、総務省から指摘があり、**今年6月から「ふるさと納税」を活用できなくなった自治体が4団体、「ふるさと納税」を活用できる期間について4ヶ月という指定を受けた自治体も43団体**あります。過熱する「ふるさと納税」の競争合戦ではありますが、それだけ、**地方の自治体は人口減少から派生する諸問題（労働人口減少、税収減、地域産業の衰退、空き家・空き店舗の増加など）に悩み、多くの課題を解決しなければならないからこそ、すぎる思いで「ふるさと納税」に取り組んできたのではないのでしょうか。**





そしてなにより、全国で突如発生する自然災害。私たちが暮らす小林市も例外ではありません。霧島連山の噴火活動、台風や大雨、そして地震。これらの天変地異は誰も止めることはできません。だからこそ、「どう向き合っていくか」を常に考えておくことが必要となります。

今回、私たちは霧島連山の硫黄山噴火に伴う「県道1号線」通行止めの影響を大きく受けている『生駒高原』にスポットを当て、昭和38年の開園当時のような賑わいを復活させるため、現代に数多く存在する様々な手段を集結する形でプロジェクトを進めていこうとしています。

## 「大地に絵を描く」

この言葉は、生駒高原を開発・開園した、宮崎交通グループの創業者 故岩切章太郎氏が掲げた理念です。その思いを、今を生きる私たちが引き継ぎ、『小林市シムシティ課』の職員として、地域の情報発信、地域の観光振興、地域の経済の発展につとめていきたいと思えます。

## 活動が共感を生み 共感から行動が生まれる

今年度も多くの“関係人口”の皆様にご支援いただき、大変充実した活動を行うことができました。心より感謝申し上げます。



2019年6月

宮崎県立小林秀峰高等学校 商業科・経営情報科

課題研究「調査研究班」





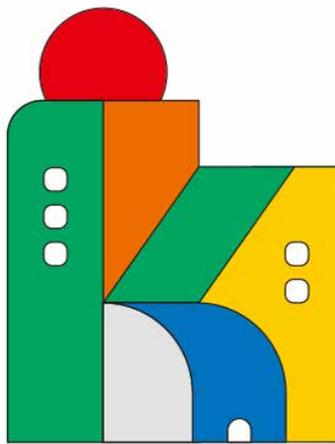
## 私たちの活動にご協力頂いた方々（順不同／敬称略） ※平成30年度

藤村活子／シニアマーケティングマネージャー（エレクトロニック・アーツ株式会社）  
 鈴木瑛／クリエイティブ・ディレクター（株式会社電通）  
 磯部建多／コピーライター（株式会社電通）  
 沼田晃佑／コピーライター（株式会社電通）  
 小柳祐介／アートディレクター（株式会社電通）  
 中村まこ／グローバルアカウント部（株式会社電通）  
 佐藤佑紀／コンサルタント（株式会社電通パブリックリレーションズ）  
 加藤卓／プランニング&コンサルティング（株式会社電通パブリックリレーションズ）  
 加藤慧（株式会社テー・オー・ダブリュー）  
 遠山貴一／代表取締役（株式会社ハナビヤ）  
 温水香南／プランナー（株式会社ハナビヤ・ラボ）  
 村上孝憲／エリアマネジメント推進室・一級建築士・再開発プランナー（三菱地所株式会社）  
 田口真司／エリアマネジメント推進室（三菱地所株式会社）  
 長井頼寛／環境・CSR推進部（三菱地所株式会社）  
 中嶋美年子／エリアマネジメント推進室リガール担当（三菱地所株式会社）  
 井上航太／エリアマネジメント推進室（三菱地所株式会社）※宮崎県からの出向  
 増山友寛／ふるさとチョイス事業本部（株式会社トラストバンク）  
 光森武志／花の駅生駒高原総括店長（宮交ショップアンドレストラン株式会社）  
 廣澤和洋／花の駅生駒高原副店長（宮交ショップアンドレストラン株式会社）  
 宮原義久／小林市長  
 安楽究（小林市役所）  
 深見順一（小林市役所）  
 柚木脇大輔（小林市役所）  
 吉丸典宏（小林市役所）  
 他 UMKテレビ宮崎・朝日新聞社・株式会社G zブレイン・株式会社木楽社・時事通信社

## 参考資料

小林市観光動向実態調査報告書～平成30年度版～（小林市）  
 2018（平成30）年度版小林市統計書（小林市）  
 図解実践マーケティング戦略（日本能率協会マネジメントセンター）  
 教育ネットひむか「みやざきひむか学」（<http://www.miyazaki-c.ed.jp/himukagaku/>）  
 てなんど小林プロジェクト（<http://www.tenandoproject.com/>）  
 まちづくり情報サイト「まちげんき」（<https://www.machigenki.go.jp/>）  
 ふるさとチョイス（<https://www.furusato-tax.jp/>）





# 福知山公立大学 2019 地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」募集要項

●趣旨：本学の位置する北近畿エリアをはじめ、日本全国の地方都市・農山漁村は何処も少子高齢化や地域経済の活力低下という問題に直面しているが、これら諸課題に対する解決策の一つとして「田舎」の持つ内発的発展力が注目されている。そこで「田舎力甲子園」と題して全国の高校生から地域活性化策のアイデアを募集し、優秀策を表彰することによって、広く啓発・普及を行う。

●主催：福知山公立大学「田舎力甲子園」実行委員会 ●後援：内閣府地方創生推進事務局・京都府・福知山市

●対象：全国の高校生（個人・グループいずれも可）等

●様式：論文・企画書・動画・アニメ等いずれも可、字数・枚数・分量も自由 ●言語：日本語もしくは英語

●表彰：最優秀賞 1組に賞状と副賞（旅行券または図書カード6万円分）  
優 秀 賞 1組に賞状と副賞（旅行券または図書カード3万円分）  
佳 作 若干組に賞状と副賞（旅行券または図書カード1万円）  
奨 励 賞 若干組に賞状

●応募締切：2019年6月21日（金） ●結果発表：2019年7月5日（金） ●表彰式：2019年7月20日（土）

●審査基準：1.適合性 若い感性を活かした「ニッポンの田舎を元気にする」内容であること。  
2.新規性 単なる事例紹介や既に発表された内容ではなく、一つ以上オリジナリティが認められること。  
3.論理性 問題意識・論理展開・結論に無理や事実誤認がないこと。  
4.現実性 夢物語を描くだけでなく、経済面等での説得力も持ち得るリアリティの高い内容であること。  
5.表現力 各言語・画像・映像・音声等それぞれ適正な使い方と効果的に表現されていること。

●実行委員：◎は委員長 ☆は副委員長 括弧内は（職名：専門分野）

井口和起◎（福知山公立大学 学長：歴史学）

塩見直紀☆（半農半X研究所代表・本学准教授：ローカルデザイン） 中尾誠二☆（本学教授：農村振興）

富野暉一郎（副学長：地方自治） 平野真（地域経営学部長：国際経営）

矢口芳生（地域経営学科長：農業経済） 芦田信之（医療福祉経営学科長：遠隔医療）

岡本悦司（教授：地域医学） 垣内康宏（教授：健康科学） 神谷達夫（教授：メディア情報工学）

倉本到（教授：情報人間工学） 齋藤達弘（教授：ファイナンス） 渋谷節子（教授：文化人類学）

鄭年皓（教授：経営科学） 谷口知弘（教授：コミュニティデザイン） 山田篤（教授：情報処理）

井上直樹（准教授：パブリックガバナンス） 大谷杏（准教授：生涯学習）

加藤好雄（准教授：マーケティング） 佐藤恵（准教授：医療情報） 杉岡秀紀（准教授：公共政策）

星雅丈（准教授：地域医療福祉政策） 三好ゆう（准教授：地方財政） 前田一貴（講師：応用数学）

江上直樹（助教：教育行政） 佐藤充（助教：地域産業） 張明軍（助教：インバウンド観光）

●応募方法：タイトル・学校名・学科名・学年・氏名（複数人の場合は代表者を筆頭に全員分）・フリガナ・電話番号を明記し、原則として電子メール添付ファイル等で提出。止むを得ない場合のみ郵送（返却希望の際は明記）。

●注意事項：他コンテスト等での過去受賞策につきましては無効となります。

応募内容は結果発表後に本学ホームページ等で公開する可能性があることを予めご了解ください。

表彰式は本学にて開催しますが、詳細は受賞者へ追って連絡します。

《ご応募・お問い合わせ先》 〒620-0886 京都府福知山市堀3370 福知山公立大学「田舎力甲子園」実行委員会

Tel: 0773-24-7100 Fax: 0773-24-7170 Mail: inakaryoku@fukuchiyama.ac.jp